

静岡大学

生涯学習教育研究

第15号

目次

論文

- 展示される「原子力の夢」——浜岡原子力館における「原子力コミュニケーション」とその表象
 金子 淳 3
- 静岡大学地域連携プログラム「想いや願いを筆に込めて」——その成果と課題
 杉崎哲子 17

事業記録

- 公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習⑭」 27
- 博物館フォーラム「博物館活動と学芸員資格——現場の声を聞く」 43

事業報告

- 2011年度生涯学習教育研究センター事業の実施報告 73

資料

- 研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』編集規程 69
- 研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』投稿規程 70

イノベーション
 静岡大学社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門

2013

静岡大学

生涯学習教育研究

第15号

静岡大学^{イノベーション}社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門

2013

論文

展示される「原子力の夢」

——浜岡原子力館における「原子力コミュニケーション」とその表象——

金子 淳*

1 原発PR館というパラレルワールド

原子力発電所には、原子力発電の推進を目的として、各電力会社等⁽¹⁾によって一般市民を対象としたPR施設が併設されている。「原発PR館」⁽²⁾と称されるこれらのPR施設では、さまざまな模型、説明パネル、映像、写真などの展示によって原子力発電の有効性や正当性を訴えかける。

もっとも各電力会社は、原子力だけでなく、水力、火力発電についても、全国各地に同様のPR館を数多く設置している。これらはいずれも電気事業への理解増進、企業イメージの向上などを目的として設置したものであり、その形態や規模、建物、名称など、さまざまなバリエーションがある。必ずしも発電所の敷地内に併設されているというわけではなく、かつて渋谷にあった電力館のように発電所とは無関係のPR施設もあり、また名称も、〇〇PRセンター、〇〇ホール、〇〇ふれあい館、〇〇ランドなど、バラエティに富んでいる。本稿ではこれらを総称して「電力会社PR館」と呼ぶが、原発PR館もこのような広義の電力会社PR館の一形態である。

言うまでもなく、東日本大震災に伴う福島第一原発の事故により、原子力発電所に対する社会の信頼は完全に失墜した。再稼働の是非や脱原発が大きな争点として問われているにもかかわらず、原発PR館においては、後に詳しく触れるように、こうした逆風に決して「屈する」ことなく、原子力利用の推進という目的達成のために、粛々とその正当性を訴える活動を継続している⁽³⁾。そこには、3.11以前と変わらぬ価値観の残渣が凍結保存された、ある種のパラレルワールドが展開されているかのようである。

ここで表象されているのは、端的に言えば、3.11以前から受け継がれている「原子力の夢」であり、原発を推進する電力会社の「欲望」である。しかし、その後の社会状況を考えれば、展示というメディアを通して、企業の「欲望」をそのまま「原子力の夢」としてダイレクトに表象し続けることの意味とその問題性を問わないわけにはいかないだろう。

ところが、原発PR館については、関係者の中では博物館の亜種⁽⁴⁾という認識があるからか、研究の対象として捉えられにくい傾向がある。原発PR館の成立の経緯や展示そのものの検証についての研究は数少なく、その全貌を掴むことは難しい。

原発PR館を扱ったものでもっとも多いのは、原発を推進する立場から、より効果的な原発PR館の展示に向けて検証するというスタンスである。たとえば、関西電力地域共生・広報室の多田 [2001] は、原発PR館は「実際に現地において見聞きすることによる賛成方向への態度変容の効果」や「見学後に来訪者個人を通じて他の多くの人たちに発信される正しい情報や良いイメージなどの副次的な効果」が期待できるとの前提のもとで、アンケートにより、原発PR館の入館前後で原発への理解がどの程度高まったのかを検証しているが、展示効果の技術論に特化したものであり、本稿とはその立場を異にする。原発PR館のより効率的な運営方法を検討した勝木 [2009・2010] も同様である。

一方、馬淵 [2004] は、東北・東京・中部・九州という4つの電力会社を例に、電力会社PR館の成立に関する総合的な調査を行い、基礎的なデータを提供している。ただし原発PR館については、火力、水力

* 静岡大学イノベーション社会連携推進機構准教授

発電所のそれに比して扱いは相対的に軽く、簡単な概要紹介にとどまっている。

そうした中であって原発PR館を正面から扱った唯一とっていい成果は、住原 [2003・2004] によるものである。全国25ヶ所の原発PR館を対象に、ヤーコブソンのコミュニケーション論を援用しつつ、発信者、受信者、メッセージ、接触、コード、コンテクストという6つの構成要素に分解することによって分析を試みるとともに、原発PR館の展示方法や建物が、初期の質素で堅実なものから、80年代後半以降、来館者の眼を引き付けるために美的な側面が配慮されるように変化していった要因について、「詩的機能」という概念を用いて説明した。

住原の研究は、全国各地の原発PR館において展開されているコミュニケーションの動態を歴史的な変化から解き明かしたという点で画期的なものであった⁽⁵⁾。もっとも、全国的な動向として俯瞰的に把握することを目的としていたために、個別のPR館を事例としてその展示の様相を具体的に描き出すことに重きが置かれたものではなかった。そこで本稿においては、電力会社が設立した原発PR館における展示について、特に浜岡原子力館という特定の原発PR館を事例とし、電力会社の描く「原子力の夢」がどのように表象され、それがどのような手法により、いかなるコミュニケーションを志向していたのかを具体的に検討するものである。

2 原発PR館の成立過程

(1) 電力会社PR館の歴史の変遷

原発PR館がどのような経緯によって成立したのか、その過程を検証するために、まず電力会社PR館の歴史を簡単に振り返っておきたい⁽⁶⁾。

PR館の先駆けとなるのは、中部電力が1955年（昭和30）に名港火力発電所（名古屋市）に併設した「名港展示館」とされる。1951年（昭和26）に名港火力発電所が日本発送電株式会社から中部電力に移譲されたことに伴って、1954～55年にかけて火力機の増設を行い、それを機に設置されたものである。増加する発電所見学者に対応するため、建設事務所を改造して模型、ジオラマ、映写装置、絵図面などを展示し、オープンから4ヶ月で17,758人の入館者があったという。

東北電力においても、八戸火力発電所（1958年運転開始）、仙台火力発電所（1959年運転開始）、新潟火力発電所（1963年運転開始）の建設当時からそれぞれ見学者が殺到し、運転開始後も年を追って見学者が増加したため、構内建物の一部を改造してPR館を設けている。

この時期における初期のPR館はいずれも、増加する発電所の見学者に対応せざるをえないという状況への、いわば彌縫策として姑息的に生み出されたものであり、火力発電所、水力発電所ともに事態は同様であった。また、その展示物も、電気、機械、土木、建築といった技術系利用者に対する事前説明用の模型や機器などが再利用されたものだった。こうした経験を踏まえて、1960年代以降になると発電所の設計当初からPR館の計画があらかじめ組み込まれ、全国各地に発電所併設のPR館が続々と誕生するのである。

その後、公害問題が顕在化すると、特に火力発電所に併設する電力会社PR館では大きな転換が迫られるようになる。「工場立地の調査等に関する法律」（1959年）を改正して1973年に制定された「工場立地法」では、一定規模以上の工場に対して、敷地内に緑地を含む環境施設を設けることを義務づけた。火力発電所はこの工場立地法の対象となり、工場の立地段階から地域環境への配慮が要請されるようになったのである。具体的には、緑地や環境施設の具体的な割合を定めた「工場立地に関する準則」において、工場の敷地面積に対し、緑地を20%以上、緑地と緑地以外の環境施設を25%以上設け、生産施設と外部を緩衝させることが求められた。こうして生み出されることとなった開放地を使って、地域住民が自由に出入りできるPR館が設置されるようになっていく。その先駆けとなったのが、東北電力の東新潟火力発電所（1977年運転開始）内に設置された「はまなす館」（1977年開館）とされ、工場敷地内に約27,000㎡の公園、テニスコート、バレーコートなどとともに地域住民に開放された。

このように、周辺の環境に特段の配慮が求められるようになった火力発電所では、その展示内容も変化

が迫られ、単なる発電所の概要説明からエネルギーや環境問題に関する内容へと徐々にシフトしていった。さらに、より地域に開放された存在となるべく、それまで平日だけだった開館日を土日にも拡大し、より多くの来館者層を獲得しようとする戦略へと転換していく。

一方、さほど環境負荷のかからない水力発電所においては、もとより工場立地法の対象外でもあったため、その展開過程が多少異なり、周辺の環境への配慮ではなく、発電所自体の構造変化に伴う物理的な要因により変化を遂げていった。1950年代においては、火力発電所と同様に、個別の発電所見学者に組織的に対応するため、建設事務所などを改造してPR館にすることが多かったが、その後の技術革新や法律の整備などによって、1960年代半ばより発電所が自動化、無人化されるようになると、遠隔運転をするための施設内にPR館が併設されるようになる。さらに1980年代には、送電所、制御所などの統廃合が進んで余剰施設が現れるようになり、それらの建物を改修してPR館として再利用するようになっていったのである。

(2) 原発PR館の成立とパブリック・アクセプタンス

原子力発電所においては、火力、水力発電所の場合とは対照的に、より積極的・戦略的にPR館を位置づけていく。このことは、表1に示すとおり、その多くが1号機の運転開始前にすでにPR館を開館させていることから分かる。

こうした原発PR館の積極的な方針は、もちろん地域住民にとつての「究極の迷惑施設」である原発を電力会社が立地させるにあたって、地域住民からの合意を取りつけるために要請されたからにはほかならないが、このことが原発PR館の存在やその活動内容を規定する決定的なファクターとなっていた。以下この点についてさらに掘り下げて考えてみたい。

原発PR館の設置の目的について、馬淵 [2004] は「エネルギー需要急増に応えるため、原子力発電への依存度を高めることへの理解を求める」ことを挙げている。東京電力原子力計画部の山西 [1996] は、私見と断りつつ、原発PR館の最終的な目的として、「原子力発電の必要性に関するコンセンサスを得ること」

表1 全国の原発PR館

開館年	開館時名称	発電所名	電力会社	1号機 運転開始	改称後名称	改称年
1964	東海原子力館	東海	日本原子力発電	1966	東海テラパーク	1993
1970	島根原子力館	島根	中国電力	1974		
1970	福島第一原子力発電所サービスホール	福島第一	東京電力	1971		
1972	浜岡原子力館	浜岡	中部電力	1976		
1972	美浜原子力PRセンター	美浜	関西電力	1970		
1973	玄海原子力発電所展示館	玄海	九州電力	1975	玄海エネルギーパーク	2000
1978	伊方ビクターズハウス	伊方	四国電力	1977		
1979	柏崎刈羽原子力発電所サービスホール	柏崎刈羽	東京電力	1985		
1980	川内原子力発電所展示館	川内	九州電力	1984		
1983	女川原子力PRセンター	女川	東北電力	1984		
1987	敦賀原子力館	敦賀	日本原子力発電	1970		
1988	福島第二原子力発電所エネルギー館	福島第二	東京電力	1982		
1991	原子力PRセンターとまりん館	泊	北海道電力	1989		
1992	エル・パークおおい おおいり館	大飯	関西電力	1979		
1994	アリス館志賀	志賀	北陸電力	1993		
1996	高浜発電所ビクターズハウス	高浜	関西電力	1974		
1999	東通原子力発電所PR施設トントウビレッジ	東通	東北電力	2005		

と述べ、いずれも原発PR館の立地は「理解」「必要性」といったキーワードで説明されている。

これらは原発PR館の目的が語られる際の常套句のようなものであり、企業PR館の使命から考えれば当然のことだが、近年では、「パブリック・アクセプタンス」(public acceptance)という用語に関連づけて説明されるようになってきている。パブリック・アクセプタンスは「社会的受容」と訳され、原義からすれば、原子力発電所など周辺地域に影響を及ぼし得る施策を実行するにあたり、地域住民の合意を得ることである。このように理解すると、合意＝双方向のコミュニケーションというイメージとして捉えられるが、実際には、推進側が原発立地のための説得工作や一方的な啓蒙活動を行うといった意味合いで使われ、「昨今の実態は、原発反対住民運動対策と思えば間違いない」(傍点原著者)[橋爪 1982:70]、「反対が強いから、その力を殺ぎ、望むらくは原子力に対する好意に変えていこうというのが「社会的受容」という言葉の意味である」[田中 1982:29]と説明されることすらある。

もともと原発立地地域への説得工作は、いわゆる「電源三法交付金」の支払いとして行われていた。つまり、迷惑施設である原発を立地させるにあたり、交付金という名の莫大な「迷惑料」で解決しようとしたわけだが、そもそも迷惑料を支払うということ自体、原発の存在が迷惑(＝危険)であることを前提としているため、いくら「原発は安全です」と唱えたところで論理的には説得力を持ち得ない。また、原発立地に対するいわゆるNIMBY感情の問題⁽⁷⁾も、事態を硬直化させていた。こうした行き詰まりを打破するべく“救世主”として立ち現れたのがパブリック・アクセプタンスであったのだ。

この語はもともと1960年代末にアメリカで使われるようになったといわれるが[丹羽 1979:20]、日本では、原発立地に難航していた政府や電力会社はその行き詰まりの打開策として熱心に研究するようになり、原子力開発推進の文脈で使われるようになったのは1976年頃からとされる[清水 1997:108]。こうして、パブリック・アクセプタンスという概念が原発立地を推進するための理論的支柱となっていき、これは明らかに原義を離れ、単なる「同意取り付け説得工作」として機能していくプロセスでもあった⁽⁸⁾。

それ以降、原発PR館も、パブリック・アクセプタンスの一翼を担うようになっていく。もともと、パブリック・アクセプタンスは原発立地時のみに一時的に要請されるのではなく、原発が稼働を開始したとしても、電力会社はさらに新しい原子炉や関連施設を建てる必要があるため、その後も継続して地元からの理解、同意を得続ける必要があり、パブリック・アクセプタンスが持続的に要請されていた。このような事情から、地域住民に対し持続的に利益を与えるような原発PR館の存在が不可欠であり、しかも、「こうしたPA[パブリック・アクセプタンス——引用者注]の基礎にあるのは、「反対するのは無知だからだ」という一種の啓蒙意識である」[清水 1997:108]と指摘されるように、パブリック・アクセプタンスの一環としての原発PR館は、一方的な啓蒙施設としての性格が付加されていった⁽⁹⁾。

一方で、原発PR館が生み出される構造的な要因として指摘できるのは、電気料金が、電力会社に利益を確実にもたらすとされる「総括原価方式」により算定されているという点である。原発PR館の運営費を含めた広報活動に関する経費が、料金算定の基準となる「原価」に組み入れられているために、それが地域独占企業に不釣り合いなほどの巨額の広報宣伝費を許容し、原発PR館の成立にも資金面で多大な「貢献」をしてきたというわけだ⁽¹⁰⁾。

(3) 巨大化する原発PR館

原発PR館にとって大きな転機となるのは1980年代であった。これは、1979年のスリーマイル島原発事故、1986年のチェルノブイリ原発事故の影響により、原発に対する社会的信頼が大きく低下し、国民の間で原発への不信や不安感が高まったことと関係している。つまり、これらの原発への「逆風」に対応するために、原発PR館は新たな戦略を打ち出さなければならなくなったのだ。

住原[2003]は、1970年代に建てられた初期の原発PR館と80年代後半以降のものとを比べると、①施設の大規模化、②美的なイメージづくり、③原発とは全く関連しない施設や展示物およびイベントの増加、④原発関連の説明をおこなうメディアのハイテク化、多様化、という4点の特徴を挙げている。

すなわち、近年の原発PR館においては、①設立費用や敷地面積、建物規模が巨大化しただけでなく、②たとえば出雲大社をイメージした高さ26mの四角錐の建物である島根原子力館や、おとぎの国にあるようなドーム状の建物のアリス館志賀、未来都市の建築物を連想させるような玄海エネルギーパークなどのように、建築物に意匠をこらし、美的で人目を引くような建物が次々と出現してきたという。また、③室内25m温水プール(原子力PRセンターとまりん館)、果樹園(女川原子力PRセンター)、野球場(島根原子力館)など、原発とは関係ない付属施設を併設するだけでなく、それぞれの原発PR館は水泳教室やこども映画会、写生大会、ミニ運動会など、さまざまなイベントを活発に行っている。

このように、原発とは関係ない付加価値を加えることについて住原[2003:88-90]は、「原子力との必然的な関連の有無にかかわらず、展示館の一部として提示されることによって、原発施設を受け入れてゆくような意識の生成が意図されている」と分析し、また、こうした原発PR館の歴史的な変化を踏まえて、「電源三法による交付金や固定資産税などの、大金とはいえない一時的しかない地元利益に対して、永続的恒常的な利益を地元にもたらそうとする動き」であると結論づけている。

いずれにせよ、原発PR館をめぐるこれらの動きは、原発を立地させる際に必要な地域社会への懐柔策であり、かつ地元へのメリットを永続的に提供するためのツールであったということが出来る。原発PR館は、持続的な原発立地という難題への現実的対応を構想する壮大な「実験場」として試行錯誤を繰り返し、さまざまな形式を生み出してきたのだ。

3 浜岡原子力館における原子力の表象

(1) 浜岡原子力館の概要

では、実際に原発PR館の展示はどのようなものなのか、そしてこれによってどのような効果や反応が得られているのか、中部電力の浜岡原子力発電所に併設されている原発PR館である浜岡原子力館を例に検討してみたい。

浜岡原発は、静岡県御前崎市にある原子力発電所であり、1号機は1976年に運転が開始された。浜岡原発建設の経緯や反対運動の概要については別稿において触れたことがあるので省略するが[金子2012:29-30]、浜岡原子力館は、1号機運転開始前の1972年8月にすでに開館している。

現在の建物は1988年に改築されたものだが、開館当初の建物構成や展示内容については、川崎[1979]によるレポートが参考になる。これによれば、延1,135㎡の鉄筋2階建ての建物で、1階は第1ホール、第2ホール、オープン・ギャラリー、2階は会議室、郷土コーナー、そして屋上展望室となっていた(図2)。第1ホールは120名収容の映写室で、「原子力発電の必要性と安全性」、「1号機の建設記録」などの映画を上映、さらにエネルギーの現状に対するクイズが出題され、その正解率などが

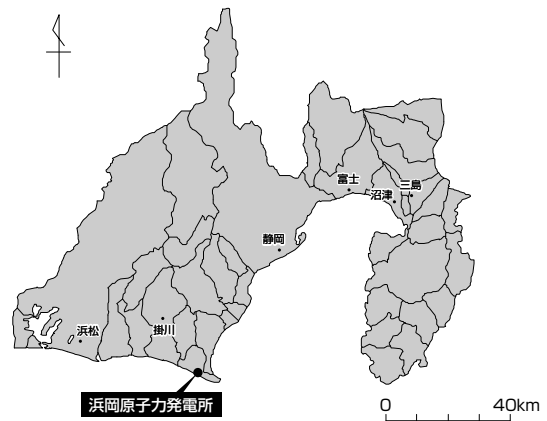


図1 浜岡原子力発電所の位置

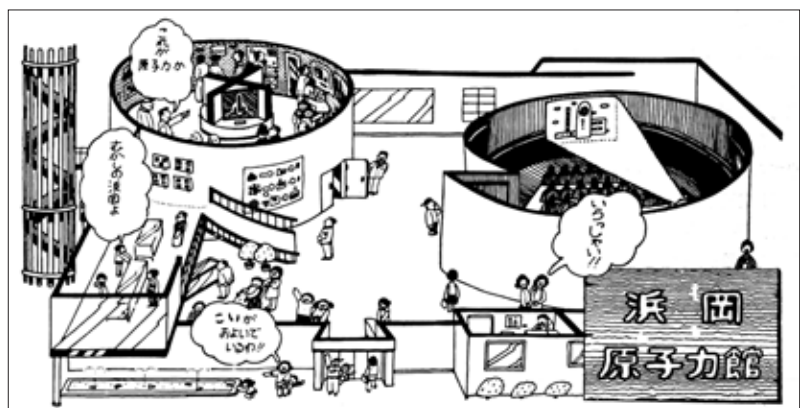


図2 浜岡原子力館(旧建物)の内部[川崎 1979]

スクリーンに映し出される仕組みになっていたという。第2ホールは円形の模型コーナーで、回転する原子力発電所の模型を中心に、ウラン燃料の製造工程、原子炉の内部構造、原子力の開発状況などをパネルで説明していた。特に人気があったのはホール中央の回転模型で、4つに分かれたターンテーブルにより原子力発電の仕組みをナレーションと連動して説明するようになっており、さらに周りには、制御棒を組み込んだ実物大模型などもあったという。この段階においては、主に原子力発電の仕組みの紹介に注力していた。

表2 現在の浜岡原子力館の展示構成

ゾーン	展示名	概要
ZONE C エネルギー・環境	地球環境データオブジェ	増え続ける世界の人口とエネルギー問題をデータで解説
	アースラボ	地球温暖化や酸性雨、オゾン層の破壊など、地球環境の現状をパネルで展示
	マザーシップシアター	エネルギー資源問題について360度映像を上映
	地球とエネルギーの歴史	石油、石炭、天然ガスなどの化石燃料の歴史を壁面グラフィックで展示
	エネルギークイズウォール	エネルギー消費についてのパネル式クイズ
	確かめよう！世界で使うエネルギー	国別のエネルギー消費量の比較とエネルギー事情を電光掲示板で展示
	エネルギーワールドクルーズ	世界のエネルギー事情についてクイズを出す参加型展示
	エレクトリックタウン ～電気が家庭に届くまで～	ジオラマ模型とモニターで構成され、発電所で作られた電気が家庭に届くまでを紹介
	原子力発電ブロックパズル	原子炉を組み立てるパズル
ZONE D 原子力発電のしくみ	実物大防波壁模型	津波対策としての防波壁の実物大模型。地上たて壁部・地下基礎部をシースルー化
	実物大原子炉模型	浜岡3号機の実物大原子炉模型（高さ22m）
	原子力発電のしくみ	原子力発電のしくみや安全性を映像で上映
	リプレース計画などの概要	浜岡1、2号機の廃止措置および6号機の建設、使用済燃料乾式貯蔵施設の建設計画の紹介パネル
	鉄筋コンクリート	発電所建物で使われている鉄筋コンクリートの壁の展示
	実物大制御盤	発電所の運転制御や監視を行っている実物大の制御盤
	炉心構成材	原子力発電の燃料であるウランの燃料集合体模型
	浜岡3号機 1/30模型	原子炉建屋とタービン建屋からなる浜岡3号機の縮小模型
	安全ステーション	安全対策についてのロールプレイングゲーム
	浜岡5号機 模型	沸騰水型軽水炉である浜岡5号機の原子炉縮小模型
ZONE E 放射線・地震対策	放射能探検タウン	日常生活の中の放射線や放射性物質をパネルで紹介
	防災シミュレーションセンター	東海地震対策に関する参加型展示
	原子力発電所バーチャルイン	発電所内部の疑似体験
ZONE F 原子燃料サイクル	プルサーマルパーク	原子燃料サイクル全般とプルサーマルについて壁面グラフィックと裸眼3Dモニターで紹介
	プルサーマルツアー	発電所、再処理工場、MOX燃料工場を巡るバーチャルツアー
	高レベル放射性廃棄物バーチャル地層処分	バーチャルエレベータに乗り、地下500mで地層処分される高レベル放射性廃棄物のガラス固化体模型を紹介
	クイズシアター	プルサーマル、エコライフ、発電所ツアー、なるほど原子力から選択するクイズ
ZONE G プレイランド・ライブラリ	アトムランド	遊具や映像ゲームがある子どもの遊び場
	原子力情報コーナー	エネルギーや原子力に関する情報を、書籍やビデオ、インターネットで閲覧

(出典) 浜岡原子力館ウェブサイト (<http://www.chuden.co.jp/hamaoka-pr/>) および筆者現地調査に基づき作成

川崎 [1979] の報告の時点では建設中であった第3ホールは1979年にオープンし、石油に代わる新しいエネルギーを紹介する展示室となっている。この措置は、火力発電所のPR館がエネルギーや環境問題に考慮した展示へとシフトしていった時期とも重なり合う。ただしこの第3ホールでは、原子力のほか、太陽、風力、海洋、地熱エネルギーの開発状況を展示しているものの、「いま注目されている代替エネルギーのホープは太陽光エネルギー。とはいっても、現在の開発状況では、浜岡原発（出力一、二号機計百三十八万キロワット）に相当する出力を出すには、ざっと五十倍の敷地、百倍の建設資金が必要」[『読売新聞（夕刊）』1984年11月29日] といった趣旨の説明がなされていたことから、新エネルギーとはいっても、結局のところ原子力の経済的なアドバンテージを示してその必要性を強調するための機能を担っていたようだ。以降も、折からのバブル景気と、総括原価方式による潤沢な運営資金により、次々とリニューアルを果たし、新たな展示物を登場させていく。

1988年には新しい建物に建て替えられ、展示も一新、実物大の原子炉模型や半球状のドームスクリーンに魚眼レンズを通して映像を映し出すオムニマックスシアターを設置した。1997年に、太陽光・風力・燃料電池など、水力・火力・原子力以外のエネルギーを扱った「新エネルギー館」を敷地内に独立棟として新設、2003年のリニューアルでは、原子力発電所内の作業を疑似体験するコーナーや、大画面で原発の防災・地震対策を見るコーナーといったアトラクションを設置[『静岡新聞』2003年12月13日]、さらに2007年には、併設する新エネルギーホール内に、赤外線で参加者の動きを感知する映像シアター「エネルギーチャレンジアーズ」を新設し、直径3メートルの大型スクリーンを見ながら参加者が体を動かしてクイズやイベントを進めるといふ、小中学生を対象にした最新技術を使った参加型の展示が話題を呼んだ[『静岡新聞』2007年3月24日]。

現在、浜岡原子力館はAからG（そのうち展示はCからG）のゾーンで構成されており、展示構成は表2のとおりである。この展示からは、①「原罪」の展示、②「とにかく安全」の展示、③最新の展示技術と「参加・体験」型展示、という特徴を見出すことができる。以下、順に説明していく。

(2) 「原罪」の展示

小川 [2002: 61-62] は、ある出来事にかかわる人々の記憶を構築する働きとして、「原罪」のロジックを挙げている。すなわち、「すべての人間が加害者となりうるという論理」のことを指し、「人は実際に加害をなしていなくとも、潜在的な加害者としての「原罪」を背負わされる」というロジックで語られるという。その典型として、滋賀県立琵琶湖博物館における「台所の流しおよび排水溝の実物」の展示を挙げ、「今の暮らしがいかに環境に負荷をかけているかを対比的に来観者に認識させる仕組み」を表現していることを紹介している。こうした「原罪」のロジックによって構成された博物館は、誰も反論できない「脅しの空間」として機能するというのである。

浜岡原子力館の前半部の展示物は、一貫してこのような「原罪」の展示に徹し、まさしく「脅しの空間」にふさわしい。われわれが享受する現代社会の快適な生活がいかに環境に悪影響をおよぼすのか、その「加害者性」にフォーカスし、これでもかとばかりにわれわれの「原罪」を強調する展示が続く。

たとえば、冒頭の「地球環境データオブジェ」と呼ばれる展示では、次のような説明がある。

「世界の人口は今後ますます増加し、エネルギーはさらに必要になってきます」
 現在、世界の人口は約60億人とされていますが、1950年はわずか25億人でした。今後、アジアなどの開発途上国を中心に人口が増加し、2050年には世界の人口は93億人に達すると予想されており、食料不足、貧困などのほか、資源・エネルギーの不足や環境への影響が心配されています。

「日本の家庭での電気使用量も大幅に増えています」

私たちは暮らしを快適・便利にするために、テレビや照明機器、冷蔵庫などさまざまな家電品を使い、また時代とともに新たな家電品がどんどん家庭の中に増えてきました。それにともなって電気の使用量も増え、その量は30年間で約4倍にもなり、将来増えていくことも考えられます。

「石油の残りはあと約40年分。富士山の8分の1杯分しかありません」

世界で採ることができる石油の埋蔵量(確認可採埋蔵量)は約1兆バレル(1バレルは約159ℓ)。これは、富士山を器に見立てると、その8分の1杯分の量でしかありません。いまのまま使い続けると、石油は約40年でなくなってしまうと考えられています。

「地球温暖化により、21世紀末には海面が最大59cm上昇する可能性があります」

地球の平均気温は上昇しており、このまま推移すると21世紀末には20世紀末と比較して最大6.4℃上昇すると予測されています。その影響で海水が膨張したり氷河がとけ出し、21世紀末までに海面水位は最大59cm上昇すると予測されています。

このような説明が続いた後、「アーステーブル」と呼ばれる円盤型の展示台に移り、「100年後の地球温度を体感しよう」と銘打った温かい手形の鉄板を触ってその熱さを「実感」する仕掛けになっている。

さらに、「エネルギークイズウォール」では、茶色の液体の入った500mlペットボトルが26本展示してあり、「このペットボトルは、私たちが1日に使うエネルギーを石油の量におきかえたものです」と説明し、資源を浪費するわれわれの生活への反省を視覚的に促す。

化石燃料の歴史が壁面グラフィックにより展開されている「地球とエネルギーの歴史」では、最後にこのようなメッセージで締めくくられている。

地球が数億年もかけてつくり貯えた化石燃料。

その大半を、私たち人間は、
わずか数百年で使い切ろうとしています。

ここで全面展開されているのは、地球規模の危機を煽り、しかもその危機はわれわれの快適な日常生活に起因するものであるという「原罪」あるいは「脅し」の展示であったが、こういった「脅し」の果てに待っているものは、当然のことながら、原子力利用の必要性・正当性であり、この一点に向かって展示が収斂していく。

小川 [2002: 63] は、「脅しの空間としての博物館は、教会と同じく赦しの空間でもある」として、「人間が自分自身を責め、同時に、自ら赦す場所になりつつある」と指摘しているが、ここでは、「加害の原罪」を償うために、「原子力」という「赦し」へといざなおうとしているわけである。

(3) 「とにかく安全」論の過剰性

こうして導かれる「原子力」の世界はどのように表象されているのか。「ZONE D 原子力発電のしくみ」に入ると、目の前に突如として現れる高さ22mの実物大原子炉模型(浜岡3号機)に圧倒されるが、それよりも目につくのは、「安全性」への過剰なまでの説明である。

たとえば、発電所の壁の仕組みを示した実物大の鉄筋コンクリートに掲げられているパネルには、次のような説明がある。

浜岡原子力発電所では、歴史上の記録に残されている安政東海地震など、大地震による遠江地方の被害状況をよく調べた上、これに基づいて万全の地震対策を講じています。従って、将来この地方で考えられる、いかなる地震が発生したとしても、発電所の安全性が十分確保できるよう、発電所の建物は、建築基準法の3倍以上の強度を持たせて建てられています。その為、壁の厚さはこの様に約2mと大変厚く、鉄筋の太さも約4cmと頑丈にできています。ですから地震に大変強いばかりでなく、放射線を遮へいする役割も果たしています。

また、「放射の物質を閉じ込める5重の“壁”」を示すパネルでは、原子炉の図とともに、

- 1 ペレット ウラン燃料は固く焼きかためてあるので、こわれて飛びちったりしません。
- 2 被覆管 ペレットはジルカロイという丈夫な金属の管に入れて、密封してあります。
- 3 圧力容器 厚さが16センチメートルもある鋼鉄製です。
- 4 格納容器 圧力容器をおさめる厚さ4センチメートルの鋼鉄製の容器です。
- 5 原子炉建屋 厚いコンクリートの壁で放射線や放射性物質をとじこめます。

という5重の防御策により、いかに安全性が高いかを説明している。同様に、地震対策のコーナーでも、「浜岡原子力発電所はどんな地震が来ても大丈夫ですか？」という問いかけのあるパネルでは、

- SAFETY1 懸念されるいかなる地震にも十分な耐震性を持っています
- SAFETY2 地震が来たら自動停止します
- SAFETY3 1・2号機は耐震チェック済みです
- SAFETY4 津波対策は万全です
- SAFETY5 地震に強い構造です
- SAFETY6 大型振動台でテスト済みです
- SAFETY7 基礎は岩盤に直接設置しています
- SAFETY8 縦・横のゆれを考えて設計してあります

と万全な地震対策を強調しているが、いずれも福島第一原発の事故の惨状を知る現在、皮肉なことに、この記述が虚しい建前でしかないことを逆説的にさらけ出す結果となっている。

では、なぜこれほどまで「とにかく安全」というメッセージを示さなければならないのか。もちろん、原発の必要性を伝えることを目的とする広報施設という建前を考えれば、あえてマイナスの要素を出すことを避けなければならないことは容易に想像がつく。だが問題はそれだけにとどまらない。むしろ、原発のリスクを表明しない原子力広報などあり得ないとされる現在にあって [福留 2008: 15]、かたくなまでの「とにかく安全」論の背後には、以下に示すようなリスク・コミュニケーションの不全が見て取れる⁽¹¹⁾。

橋爪 [1982] は、原子力に関する広報が「とにかく安全」論に終始する理由を、原発を推進する地域のリアリストと、反対する夢想家の分岐・対立に求めている。橋爪によれば、「リアリスト」とは具体的には公職者や名望家など地域の有力者のことで、原発をあえて誘致し地域再生の手掛かりにしようと画策する層を指す。一方、「夢想家」は、原発が地域自立の最後の望みを断つものとして告発側に回る。政府や電力会社は、利益誘導を背景にまず地域のリアリストに働きかけ、原発のもとで生き残ろうとするリアリストを組織化しようとするが、その際に使われていた手法が「とにかく安全」論だったという。原発の危険性を、リスクを含み込んだ上での確率論的な概念として合理的に説明しても、伝統的な村落社会の価値観の上に立つリアリストには通用しないと判断した電力会社は、100%の安全を語り始める。「とにかく安全」だから納得してくれ、という論法である。橋爪は、この方法を「70年代の古典的手法」[橋爪 1982: 77] と呼ぶが、原発PR館には、この古典的手法に基づく「とにかく安全」論の残滓が見え隠れする。

「とにかく安全」論から発せられるメッセージは、リアリストはともかく夢想家には一切通じないばか

りか、むしろ夢想家は「やっぱり危険」という直感から出発するため、ここから「とにかく安全」対「やっぱり危険」という水掛け論を生み出す舞台が形成される。原発PR館における過剰なまでの「とにかく安全」論は、このような対立の構図を誘発するという点で、皮肉なことに、結局は原発推進という本来の目的から遠ざかる結果を招いているともいえるだろう。

(4) 原子力の「参加・体験」

浜岡原子力館には、手で触れて体験する、あるいはシミュレーターのような形で参加するような参加・体験型の展示物に溢れている。たとえば、温かい手形の鉄板を触って100年後の地球温度を「体感」する「地球温暖化の体験」、パネルをめくって答え合わせをするクイズ、偏光板を仕込んだ虫眼鏡を使って二酸化炭素の排出量を覗く映像、原子力発電によって排出される温められた排水と同じ温度の水を触る温排水体験⁽¹²⁾など、あの手この手で体験させようと腐心しているようすが伝わってくる。

さらには、原子力発電所内を疑似体験できる「原子力発電所バーチャルイン」、カメラで撮影した来館者の姿をスクリーンに映し出し、発電所、再処理工場、MOX燃料処理工場を巡る「プルサーマルツアー」、擬似的なエレベーターに乗って地下500mの地中に降り地層処分場を見学する「高レベル放射性廃棄物バーチャル地層処分」、顔写真を撮ってエントリーをした上でクイズに挑戦する「クイズシアター」など、アミューズメント性を高める参加型のアトラクションも多い。

このような疑似体験こそが、態度変容の重要な鍵を握り、メッセージを効果的かつ確実に伝えられるとの計算に基づいていると推測できるが、こうした原発PR館のメディア戦略について、住原 [2003: 92-93] は、「多様なメディアを駆使し、華麗な演出をほどこして来館者に見せつけることによって、原発の持つ、否定的な側面との関連意識を薄めようとする効果」があると分析し、このことを「見せることによって隠すこと」と表現した。すなわち、本来、原発を展示するという行為は、破壊的で反生命的な性格を持つ原発の否定的な側面と分かちがたく結びついているものであるが、その展示にアミューズメント性を組み込ませ、しかも一般来館者の注意をそこだけに集中させることによって、その結合が曖昧になり、結果的に、原発の持つ否定的な側面を薄めていくことになるというのである。この指摘は、参加・体験型展示が、能動的な操作による効果的な学習という展示技術的な側面にとどまらず、その政治的利用の可能性に言及している点で、きわめて示唆的である。

一方、リアリティという視点からは、以下のようにも考えられるだろう。そもそも原発PR館が発電所に併設されているということは、発電所見学とセットで考えられていたはずであり、実際に発電所を見学して実物の迫力に触れられれば大きな効果をもたらしていたと考えられる。ところが、2001年の同時多発テロ以降、テロ対策として発電所内の見学が全国的に自粛されるようになり [勝木 2010]、さらに2011年の東日本大震災が決定的な追い打ちをかけ、現在では発電所内の見学はどこでも実質的に不可能になっている。発電所内の見学は、一部の特殊ケースを除き今後も一般に解禁される見通しは低いとされ、現在は発電所が傍にあるにもかかわらず、発電所内部見学に代わる措置を講じなければならなくなっている。

そうした中で要請されてきたのが、より臨場性を高め、実際の発電所見学に代替するリアリティを提供し得るバーチャル体験だったのではないか。つまり、発電所見学という現場のリアリティを補完するために、バーチャル体験という別のリアリティが動員され、それが参加・体験型展示の増加をもたらしたのである。これは、戦争の直接体験者の減少による口述でのリアルな戦争体験の継承が不可能になってきた現在、その失われたリアリティを補完するために、戦争展示において疑似体験という新たなリアリティの装いをまとった展示が重視されている現象とも重なり合う [金子 2006]。リアリティの欠如は、また別の形のリアリティを呼び起こすのだ。

4 展示を媒介とした「原子力コミュニケーション」をめぐる

以上見てきたように、原発PR館は、「賛成方向への態度変容」[多田 2001] という使命に応えようと、

さまざまな工夫を施して模索を続けてきた。しかし同時に、「とにかく安全」論に基づく単純なメッセージによって覆い尽くされた、ある意味でナイーブな展示であるがゆえに、実際には逆効果を及ぼしているであろうことも確認された。リスク・コミュニケーションにおいては、良い面も悪い面も伝える両面提示により、伝達者への信頼が高まることが知られているが[土屋 2008: 280]、こうした一面的な展示が原発事業者への信頼獲得に寄与しているとは言い難い。

ただし、問題はそれほど単純ではない。総理府広報室による調査(1999年)と、関西電力美浜原子力PRセンターの来館者アンケート(2000年)を比較した多田[2001]の調査によれば、原発PR館に足を運ぶ来館者層は、もともと原子力発電に対し肯定的な意見を有する割合が、一般層に比べて多いことが明らかになったという。つまり原発PR館には、もともと原子力発電に好意的な人が、自身の理解を深めるために来館するというのである。

このことについて住原[2003: 70]は、「来館者はメッセージの受け手であるにもかかわらず、「不安」という無言のメッセージをすでに伝え終わった状態で来館するのであり、展示館はその無言のメッセージに答えながら、同時に自らのメッセージを伝えてゆくという、いわば、双方向のコミュニケーションの場と考えられる」と述べているが、上記の多田の調査に基づけば、原発に対してネガティブな意見を持っている層は、もとより原発PR館など訪れないため、「不安」という無言のメッセージすら発していないという意味で、そもそも「双方向のコミュニケーション」が成立しているとは考えにくいし、PR館内部の来館者に限定すれば、原発に関する価値観の対立が生じにくい可能性もある。とすれば、原発PR館においては、あらかじめ限定された条件下における予定調和的なコミュニケーションが展開されていたということもできよう⁽¹³⁾。

この点に関しては、イギリスの原発PR館、セラフィールド・ビジターセンターの展示が対照的である⁽¹⁴⁾。セラフィールドとは、イギリス北西部のアイリッシュ海に面する原子力複合施設のことで、原子力廃止措置機関(NDA)(2005年までは核燃料公社(BNFL))のもとで、イギリスのセラフィールド社が管理している。それに付随するPR館(ビジターセンター)が2002年にリニューアルオープンしたが、それまでの古いイメージを一掃するため、リニューアルを担当していたBNFL(当時)はロンドンのサイエンス・ミュージアムに展示のプロデュースを依頼した。第三者が入ることにより宣伝ではないことを示すためでもあったが、展示内容・展示方法・デザインなどすべてを委託し、BNFL側はそれに一切タッチしないという方法が注目を集めた。

原子力に対してはさまざまな意見があることを前提に、すべての意見には価値があり、各個人が自分なりに考えて議論に参加することが望ましいとのコンセプトに基づいて、エネルギーについての討論を招くことを目的とした。そのコンセプトを体現する中心的な展示として作られたのが、The Coreと名づけられたコーナーである。ここに設置された巨大なスクリーンに、たとえば「原子力は温室効果ガスを排出しない環境に優しい電源である」「原子力発電の経済性は多くのエコノミストによって疑問視されている」「原子力は危険な技術だ」「原子力と再生可能エネルギーのミックスによって緑の地球を実現できる」といった、原子力への賛成・反対意見の両方が映し出され、こうした意見の合間には、「すべての意見に価値がある。正しい意見も間違った意見もない」というビジターセンター独自のメッセージも表示されるという⁽¹⁵⁾。

セラフィールド・ビジターセンターがこのような展示に舵を切らざるを得なかったのは、やはり原発への「逆風」があったからである。1999年にBNFLによる関西電力高浜原子力発電所向けMOX燃料検査データ偽造問題が発覚し、その他、セラフィールドから漏れ出す放射性物質の海洋放出問題が批判されるなど、厳しい状況にあった。このような事態を「教訓」として生かしつつ選び取った展示が、「結論=100%の安全」を提示しない方法だったのである。

しかし、ここで注意しなければならないのは、セラフィールド・ビジターセンターの展示が、論争的な主題に対する討論の場として機能するいわゆる「フォーラム型」展示だとして無条件に礼賛し、思考停止に陥るべきではないということだ。むしろ100%の安全を提示せず、「すべての意見に価値がある」として

様々な意見を提示するという戦略によって社会からの信頼を勝ち取るという、リスク・コミュニケーションに基づく巧みなパフォーマンスのもとに成立しているとは考えられないだろうか。

浜岡原子力館だけでなく、日本全国原発PR館では現在、かつてのスリーマイル島やチェルノブイリ原発事故とは比べものにならないほどの猛烈な「逆風」の只中にある。セラフィールド・ビジターセンターが、その「逆風」をバネに、原子力コミュニケーションの実験場に生まれ変わったように、日本においても変化の端緒が開かれたとあっていいだろう。その時、これまでのようなギラギラした企業の「欲望」を理性的に覆い隠し、どのような巧妙な手口によって原子力コミュニケーションを展開し、原子力推進のための新たな方策を仕掛けてくるのかということは慎重に見極めなければならないだろう。

いくら「フォーラム型」の展示であったとしても、原発PR館には「賛成方向への態度変容」というミッションが根底にあることには変わりがない。単に「フォーラム型」の展示にすれば良しとするのではなく、むしろ原子力コミュニケーションにおいては、そのような展示手法自体を相対化し、批評していく視点が必要なのではないか。

注

- (1) 電力会社「等」としたのは、PR館の設置主体が、一般電気事業者と呼ばれる9つの電力会社（原発を持たない沖縄電力を除く）だけでなく、一般電気事業者に電力を供給する卸電気事業者である日本原子力発電株式会社等も含まれるからである。以下、本稿ではPR館を設立した主体について、煩雑さを避けるため「電力会社」と称する。
- (2) 本稿における「原発PR館」は、原子力発電所に併設するPR施設のことを指す。原子力のPRを目的とする施設には、ほかに、①発電所併設でないもの（原子力ふれあいセンター〔北海道電力〕、エルガイアおおい〔関西電力〕など）や、②核燃料サイクル施設のPR館（六ヶ所原燃PRセンター〔日本原燃〕など）、③県立の原子力センター（柏崎原子力広報センター・アトミュージアム〔新潟県〕、福井原子力センター・原子力の科学館あつとほうむ〔福井県〕など）があるが、発電所との関連性を重視するため、本稿においてはこれらを含めないこととする。
- (3) 東日本大震災以後、東京電力の福島第一原子力発電所サービスホールと福島第二原子力発電所エネルギー館、関西電力のエル・パークおおい おおいら館の3館は営業を停止し、休館扱いとなっている。なお、原発PR館の展示において福島第一原発事故を扱っているかどうかについては、雑誌『週刊SPA!』（2012年10月23日号）が「日本全国「原発PR館」に行ってみた!」という特集を組み検証しているが、取り上げた全15館のうち福島第一原発事故について展示で言及している館はわずか4館にすぎなかった。
- (4) 馬淵〔2003〕は、電力会社PR館と博物館の関係について、博物館法の定義、文部科学省による社会教育調査の対象、全国科学博物館連絡協議会の加盟という指標を使いながら、PR館を「狭義の博物館でなく広く市民に開放された普及啓発施設」とであると結論づけている。なお、このような性格から、すべての原発PR館は入場料が無料であり、付帯施設を利用する際も無料か、きわめて安価に設定されている。
- (5) ただし、原発立地地域の社会構造や住民意識の歴史的な経緯については、たとえば「もともと、原発の初期段階、特にスリーマイルやチェルノブイリ以前は、日本国民一般は、地元住民も含めて、原発には無関心であった」といった記述に表されているように、やや一面的かつ表層的な把握であったことには留保を要する。
- (6) 以下、電力会社PR館の成立過程については、特に断りのない限り、馬淵〔2004〕の記述に依拠している。
- (7) NIMBYとは、“Not In My BackYard”（自分の裏庭には来ないで）の略で、「施設の必要性は認めるが、自らの居住地域には建てないでくれ」（いわゆる「総論賛成、各論反対」）と主張する住民たちや、その態度を指す。
- (8) ただし、アメリカにおいては、「パブリック・アクセプタンス」に「一時的な押し付け」というイメージが定着したため、1990年代から使われなくなり、代わって「パブリック・インフォメーション」（public information）や「パブリック・コミュニケーション」（public communication）というフレーズが使われるようになったという〔田中 2006〕。
- (9) 星合〔2004〕による企業博物館の館種の分類によれば、本稿で対象とする原発PR館は、原子力発電の安全を理解させるために作られた「啓蒙館」に位置づけられている。このことから原発PR館の啓蒙的な性格が指摘できよう。
- (10) 最近でも、電気料金の値上げ申請した関西電力が、料金の原価に含まれる経費として巨額の広報宣伝費を盛り込んでいたことが明らかとなり、2013年度以降の広告宣伝費の「発電所立地にかかわる理解促進活動」年18億5,900万円のうち、およそ50%の9億3,000万円が原発PR館の運営と原子力広報費に占められていたことが報道された〔『朝日新聞』2013年1月28日〕
- (11) リスク・コミュニケーションについてはNational Research Council〔1997〕を参照。

- (12) その温排水が魚や貝を育てているのに役立つとの解説を付しているが、浜岡原発建設反対運動においては、この温排水によって生態系が破壊され、漁業資源が減少するとして、重要な争点になっていた。浜岡における原発立地の歴史的経緯を踏まえれば、こうした脳天気な「参加・体験型展示」など愚の骨頂である。
- (13) 浜岡原子力館では、館内のいたるところに以下のような文言が掲示されている。「浜岡原子力館内および駐車場内を含む中部電力敷地内において、集会、デモ、ゼッケン・鉢巻の着用、横断幕の使用、チラシの配布、拡声器の使用、およびその他他人に迷惑となる行為をする方の立入を禁止します。これらの行為がなされたと判断した際には、退場いただきます。また、場合によっては、警察に通報させていただくこともあります」。こういった物々しいパネルが館内各所に掲示されている光景はきわめて異様であるが、これは、反対意見に対する門戸を閉ざし、コミュニケーションを拒絶する姿勢をあらかじめ宣言しているかのようである。このことに対する違和感は、『週刊SPA!』(注3文献)においても表明されている。
- (14) セラフィールド・ビジターセンターについては、金森 [2003]・住原 [2004] により詳細なレポートがまとめられている。以下、本稿におけるセラフィールド・ビジターセンターに関する記述は、同文献の記述に拠っている。
- (15) サイエンス・ミュージアムでは、300以上の機関(学会、科学界、政府、産業界、専門団体)から意見を集めて、事前に約3,500の引用を用意したほか、見学に来た一般市民の声も展示物に反映させているという [金森 2003]。

文献

- 小川伸彦 2002 「モノと記憶の保存」 荻野昌弘『文化遺産の社会学』新曜社
- 勝木知里・木村浩 2009 「原子力発電所関連PR館における情報共有の実態と運営の課題」『社会経済研究』57 電力中央研究所社会経済研究所
- 勝木知里・木村浩 2010 「原子力広報資源の有効活用を目指して——ComComミーティングの試行」『社会技術研究論文集』7
- 金森美和 2003 「原子力とコミュニケーション——英国での新たな取り組み」 <http://www.ieaj.co.jp/view/view2.html>
- 金子淳 2006 「戦争資料のリアリティ——モノを媒介とした戦争体験の継承をめぐって」『岩波講座 アジア太平洋戦争 第6巻 日常生活の中の総力戦』岩波書店
- 金子淳 2012 「静岡の社会教育小史——思想・実践・政策面に関する動向を中心に」『静岡大学生涯学習教育研究』14
- 川崎幸雄 1979 「展示館紹介シリーズ9 中部電力(株)浜岡原子力館」『日本原子力学会誌』21(10)
- 清水修二 1997 「パブリック・アクセプタンスの政治社会論(1)——原子力開発と自治体・住民の権利」『商学論集』65(3) 福島大学経済学会
- 住原則也 2003 「日本の原子力発電所展示館——原発認知の使命を担うミュージアム」中牧弘允・日置弘一郎『企業博物館の経営人類学』東方出版
- 住原則也 2004 「原子力発電所展示館を通して見える日・英の原子力広報の違い——政策の反映」中牧弘允『経営文化の日英比較——宗教と博物館を中心に』(科学研究費補助金研究成果報告書)
- 多田恭之・林知己夫 2001 「原子力発電所PR館のあり方に関する調査研究」『INSS journal』8 原子力安全システム研究所
- 田中靖政 1982 『原子力の社会学』電力新報社
- 田中靖政 2006 「原子力コミュニケーションIII 高レベル放射性廃棄物管理の取り組み方を考える：ヨーロッパにおける原子力コミュニケーションと原子力コミュニケーションの視点から」『学習院大学法学会雑誌』41(2)
- 土屋智子・小杉素子・千田恭子・高田香里・岩附章仁・玉川博美 2008 「“プルサーマル”に対する市民の認識と広報内容に関する考察」『日本原子力学会和文論文誌』7(3)
- National Research Council (林裕造・関沢純訳) 1997 『リスクコミュニケーション——前進への提言』化学工業日報社
- 丹羽富士雄 1979 「エネルギー技術開発とパブリック・アクセプタンス」『省エネルギー』31(1)
- 橋爪大三郎 1982 「原子力立地の新たな攻勢——推進側はパブリック・アクセプタンスを狙う」『技術と人間』11(6)
- 福留恵子 2008 「リスク・コミュニケーション再考——「啓蒙モデルからの脱却」が意味すること」『総合教育センター紀要』28 東海大学総合教育センター
- 星合重男 2004 「企業博物館戦略の研究-2」放送大学大学院文化科学研究科情報文化プログラム修士論文 <http://homepage3.nifty.com/hoshiais/article2/index.html>

馬渕浩一・堀越哲美 2004 「わが国における電力会社PR館の成立過程に関する研究——東北、東京、中部、九州電力の調査結果を基に」『日本建築学会環境系論文集』579

山西敏一 1996 「原子力PR施設の現状と今後の課題」『JETI』44(13)

論文

静岡大学地域連携プログラム「想いや願いを筆に込めて」 ——その成果と課題——

杉崎 哲子*

はじめに

地域に開かれた大学、静岡大学の書写書道教育を任されている者として、本学の学生が大学での学びを生かして地域貢献できる場の設定が重要であると考えている。そこで本学に着任した平成23年度には、書文化専攻生全員が関わる形で南部生涯学習センターとの共催講座「筆で書く年賀状」を実施した⁽¹⁾。平成24年度は更に内容を充実させるべく、静岡大学地域連携プログラムとして静岡市美術館と連携を図り、館の企画展「近江巡礼 祈りの至宝展」のワークショップ「しずび書き初め大会」を平成25年1月2日と3日に実施し、1月11日から14日にかけては書展「想いや願いを筆に込めて」を開催した。

ここでは、本プログラムの内容について報告し、その成果と課題を明らかにする。

1 本プログラムの出発点

静岡大学の書道教員が中心となって書文化の振興を図る目的で結成された「静岡県大学書道学会」は、前任教員が着任して間もなくの昭和54年から昨年度までの長きに渡り、地域社会において市民参加型の書き初めや書道展を展開してきた。開始から22年間は市街地のデパートを会場にした「書き初め席書大会」であったが、途中で会場確保が困難になり中断するも、平成15年には静岡市文化振興財団の助成を受けて公募展の形で再開することができた。この時期より静岡大学の非常勤講師であった筆者も事業に関わり、殊に平成17年度から平成22年度までの視聴覚センター（マビック）との5カ年間の共催事業「マビック書道展」では、研究と書展とを併せて実施するなか研究部の責任者として企画・実践に携った⁽²⁾。その後の1年、つまり昨年度は継続できたが、視聴覚センターの閉館に伴って中止せざるを得なくなった。

ただ上記の一連の事業は、いずれも筆者ら非常勤講師やその他の卒業生が中心となって企画立案したものであり、筆者も研究部の責任者でありながら、人文学部の非常勤であったために静大書文化の在学生との接点が少なく、手探り状態で彼らの学びを生かせるまでに至らなかった。

そこで、自治体との連携を図って専門職の方の教えを受けつつ、大学生が大学での学びを生かした形で地域貢献する場を設定したいと考え市役所へと相談を持ちかけたところ、静岡市文化振興財団の方から静岡市美術館の「書き初め大会」の取り組みを紹介された。静岡市美術館では、ワークショップの内容によって必要に応じ学生ボランティアを募集している。したがって、単なるボランティアならば各自がそれに応募すれば十分である。しかし今回は静岡大学の地域連携プログラムとして、書文化専攻生の学びを生かした関わりが可能となった。この形の連携について美術館側からも合意が得られ、本プログラムが開始されることとなった。

2 実施の経緯

・連携要請（平成23年12月）

…市役所に出向く。そこから静岡市文化振興財団へ、さらに静岡市美術館へと連携の趣旨を伝える。

* 静岡大学教育学部講師

- ・打ち合わせ、書文化ガイダンス（平成24年4月）
 …打ち合わせの内容を受け、書文化の年間予定に組み込む形で学生に本プログラムについて通達する。
- ・決定事項の確認、打ち合わせ（平成24年7月、8月）
 「近江巡礼 祈りの至宝展」関連イベントとして静岡市美術館で「しずび書き初め大会」を実施する。
 「想いや願いを筆に込めて」静岡大学書文化卒業書展・学生書展の特別企画書展への出品協力を依頼する。
- ・書き初め大会の内容検討、打ち合わせ（平成24年8月）
 …「広報静岡」（11月掲載の原稿締め切り/9月）に合わせて「書き初め大会」の内容を検討する。
 年頭にあたり、祈りや願いの語句を、想いを込めて大きく書く。完成作品は静大書文化卒業・学生書展に出品。（希望者のみ）*作品の受渡しは静大でとりまとめる。以降はメールで確認する。

日時	家族編：1月2日（水）14:00～16:00 個人編：1月3日（木）14:00～16:00 * 10時～12時まではフリー書き初め
会場	静岡市美術館 多目的室
参加者	家族編：8組32名、個人編：17名
参加者持ち物	自身で使いやすい書道用具があれば持参可。基本的に筆・墨（墨汁）・硯（灰皿で代用）・紙（全紙、静岡サイズ、半切など）は美術館・大学で準備する。

- ・スケジュール調整、打ち合わせ（平成24年11月）
- ・準備（平成24年12月26日）多目的室養生準備 静大学生5名+美術館2名 ⇒ビニールシートをしく。
 前日までの作業（美術館）…報道なげこみ、アンケートの作成、看板等の作成
 ”（大学）…パワーポイント、配布資料、用具・用材、パフォーマンス（含音楽）等準備

《当日の流れ》

時間	全体の流れ	来場者	書文化	職員	備考
12:00	莫タワー集合 ミーティング+設営	見学	受付設営	職員	・来場者用の名札作成 ⇒プロジェクターの用意
13:00	書道パフォーマンス		会場設営		
			パフォーマンス 書文化は専用の名札を用意		
13:30	受付開始	受付を済ませて会場内へ	来場者誘導	受付係	・受付で関係資料等を配布
14:00	開始 関係者挨拶	開始 話・スライドショーを聴く	撮影係	司会 ↓	
14:10	スライドショー 書文化紹介	↓	司会 ↓	プロジェクト ↓	・プロジェクターを使用 ・部屋を暗くする
14:15	5書体の説明(楷・行・草・篆・隸) 書き初めの由来 本事業の説明		パフォーマンス		・皆の前で書体を披露
14:30	スライドショー終了 書き初め開始	書き初め開始(個々で実践) 文字(書体含め)決定 紙サイズ決定 作品作成	会場準備 各グループに書文化生配置【5】 作品作成補助	プロジェクター 片付け	・プロジェクターは以降使用しない ・書き初め開始次第各々で行動 ・一人何枚書いても良い
15:30	書き初め終了	作品完成	会場片付け(簡単に)		・作品発表が可能なスペースを確保
15:40	発表会 記念撮影	完成作品の発表 前が出るor輪になって作品名・作品に込めた想いを全員が発表する	司会、記念撮影		・1組ずつ発表
15:55	関係者挨拶			司会	
16:00	終了	帰宅	会場片付け+明日の準備		・お疲れ様でした

1月3日(木)		対象：20名(個人)			
時間	全体の流れ	来場者	書文化	職員	備考
9:30	莫タワー集合 ミーティング+設営			会場設営	
10:00	自由参加型書道体験 開始	好きな字を書き初めする	近江巡礼の祈りの至宝 展ご来場者に参加を呼 び掛ける		・完成した作品は各自持ち 帰ってもらう
13:00	自由参加型書道体験 終了				
	書道パフォーマンス	見学	※1日目と同様	※1日目と同様	
13:30	受付開始	受付を済ませて会場内へ			
14:00	開始 1日目と同様の流れ	開始			
16:00	終了	終了	片付け開始		
～18:00	完全撤去 終了		完全撤去		お疲れ様でした

3 「しずび書き初め大会」の様子

《1月2日》 8家族、32名応募（当日参加者 6家族 28名）

ほぼ定刻通りにパフォーマンスを開始したものの、車での来場者が駐車するまでに時間を要して足並みがそろわず観客が少なかった。また、書いた紙を持ち上げて見せる際に墨が垂れることを懸念し、余分な墨を紙で押さえ取るようにしたところ、その所作が雑然とした感じを生んでしまった。時間もあったので、書き初め大会開始の前に、急遽もう一度パフォーマンスを行ったところ、沢山の方に見ていただけた。

書き初め大会では、最初に美術館の方から「しずび書き初め大会」の趣旨に関する説明があり、その後はスライドを使って書文化の紹介をし、五書体の説明、書き初めの由来や題材の候補に挙げた語句についての話という流れで進めた。特に「近江巡礼 祈りの至宝展」にある「楽山楽水図」については、それに関する論語「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しみ…」の説明も加えた。

「知者楽水」「仁者乐山」、その他の語句（温故知新、一意専心）については、各家族で題材を相談する手だてにと考え、それらを五書体で示した資料を配布した。

学芸員の案内で実際に「楽山楽水図」を鑑賞して書かれた家族、隔年で日本に帰省するスペイン在住の娘夫婦と孫、娘らのために応募したという年配の夫婦という三世代家族など、どの参加家族も書く語句や書体、誰がどこを担当するかを話し合い、見守りながら「寄り合い書き」の楽しさを満喫された。



写真1 学生による書道パフォーマンス



写真2 スライドショー



写真3 集合写真



写真4 書き初めの様子

《1月3日》 17名応募（当日参加者 18名）

前日の反省を生かし、パフォーマンスから書き初め大会終了までの学生各自の動きを確認して臨んだため、スムーズに進めることができた。参加者はそれぞれ意欲的に取り組み、限られた時間ではあるが、幾枚か書き込み納得のいく作品に仕上げている。年配の方の多くが色々な書体や語句にチャレンジしているのに対して、小学生の幾人かに書塾での課題を、そこでの手本を脇において書く姿が見受けられた。自信を持って書ける題材でない取り組み難しいのか、小・中学校で取り組む書き初めが作品の出来映えを求めてきたことの影響なのか、自分の想いを書くという「書く」楽しさを伝えるまでには至っていないと考えられる。



写真5 配布資料部分



写真6 集合写真



写真7 作品発表

4 企画展「想いや願いを筆に込めて」展示風景

作品展示については、書き初め終了後にしか出品点数や大きさを把握できないため時間的に余裕がなく、裏打ちや積文票の準備、展示レイアウトなどの一連の作業を急ピッチで行った。そのせいもあって会場案内図や看板の準備が不足したなどの反省点は多いものの、卒展・学生展作品の展示部分を調整して十分なスペースを確保でき、全ての作品が生き生きと来場者に語りかけるよう配置した。そこに書き初め大会の様子を写した写真も一緒に展示した。来場者からは、楽しい書き初め大会の様子が伝わってきた、家族で書きあげた作品から温かい想いが伝わってきたという感想が寄せられた。

参加者の方からは、「卒展・学生展と併催であったため静大書文化の学生が本格的に書を学んでいることを知ることができ、余計に関わりをもてたことを嬉しく思った。」との言葉をいただいた。また、81歳の記念にと書き初め大会に参加された男性からは、「私にとって新年早々、何よりなお年玉」というお礼の封書が届いた。そこには、書き初め大会での制作の喜びだけでなく、支援や作品の裏打ち、展示、パフォーマンスなど関わりのそれぞれに対する心温まる言葉と、2日に渡って書展に来場し存分に書の鑑賞を楽しまれた旨も記されていた。作品返却の後にも重ねてお礼の葉書が届き、大いに学生の励みとなった。



5 アンケート結果、感想、反省

《参加者より》

○イベントの情報源／

- ①関係者から聞いて ②ポスター・チラシ ③広報静岡、静岡大学のチラシ 他

○参加理由／

- ・お正月に家族での書き初めは素敵だと思った。
 - ・日本の伝統文化に親しむため。
 - ・大きな紙に書いてみたかった。
 - ・パフォーマンスを見て参加したくなった。
 - ・書の素晴らしさを体験したかった。
 - ・自分への記念として参加した。
- 他

○感想／

- ・年の初めに書くことの楽しさを味わえてよかった。今後も是非参加したい。（多数）
 - ・大学生、美術館の方の支援が行き届いていて有難かった。（多数）
 - ・道具など用意してくれて有難かった。
 - ・大きく書くのは難しかったけど楽しかった。
 - ・もっと書きたかった。
 - ・パフォーマンスが良かった。
- 他

《静岡市美術館より》

- ・当日取材が思った以上にあり、新年より開館していること、近江展の開幕告知にもつながった。
- ・大学と美術館の連携ができた。
- ・業務の執行方法に難があった。
- ・大学との連絡がうまくいかず、イベント内容を練る時間が不足。結果的に事業の質がよくなかった。

《書文化学生より》

- ・参加者の方に喜んでもらえて嬉しかった。書の楽しさを再認した。
- ・広報掲載文やチラシ、配布資料の内容を参加者の立場になって検討するということの重要性を学んだ。
- ・計画的に進めることができず、美術館側との内容検討の時間が不足していた。
- ・3日には改善できたが、事前にシミュレーションをしっかりとすべきだった。
- ・展示については反省点が多い。時間的に厳しいことが予測できたにも関わらず準備が不足していた。
- ・写真の展示に関しては、事前に承諾の可否を把握しておくべきだった。

6 本プログラムの成果と課題

このプログラムを通して見えてきた成果と課題のうち、最初に「しずび書き初め大会」と企画展「想いや願いを筆に込めて」の内容に関して述べ、それをふまえて連携について振り返る。

(1) プログラムの内容に関して

よくある「書き初め大会」のように成果物である作品に優劣をつけるのではなく、書くこと自体を楽しんでもらう方向で実施したいという美術館側の考え方に賛同して本プログラムをスタートした。

①「書き初め」に対する思いと美術館企画展との関連について

静岡市美術館では、「家康と慶喜－徳川家と静岡展」の関連イベントとして平成23年1月2日と3日の両日に「家康・慶喜・家達に挑戦！書き初め大会」を実施している。初日には祖父母・親・子の三世代で、徳川慶喜・家達・慶久・家正の4人が「寄り合い書き」した書「和楽且湛」にチャレンジするという形で実施し、個人の部では、慶喜が七歳の時に書いた「楽山」や家康の「誠」を展示室で鑑賞した後に、時代を超え世代を超えて我々の心を捉える作品の力を感じながら書くというように、美術館の展示と絡めた「書き初め」を行っている。

そこで、今回も「近江巡礼 祈りの至宝展」と絡めた実施をと考え、書文化の方で美術館の展示品リストをもとに検討していた。その中で、最初注目していたのは墨の潤濁の効いた墨蹟である。それを参考に、家族で淡墨と濃墨とをコラボさせた作品制作を考えたり写経を参考にした細字作品を書いたりしてはどうかという企画を練っていた。しかし、その墨蹟は巡回されないこととなり、また細字はイベントとしてよりも講座としてじっくり取り組むべきであろうということになった。そこで「祈り」に絡め新年の

抱負を書きとめる「書き初め」の意義を含めて、「想いや願いを筆に込めて」というテーマにまとまった。また美術館からの提案を受けて、パワーポイントを使用した「書き初め」の説明の中に、昨年度に美術館で開催した歌川国芳展の国芳作品の寺子屋の場面も加えることとなり、内容的に充実させることができた。

②「寄り合い書き」について

書作品で重要視されるのが気脈の貫通である。気脈とは線と線の気持ちのつながりであり、実際にはつながっていない場合も、一字から数字を一筆で書き、「つながり」を大事にして筆を運ぶ。一般的には、一人が書き始めから書き終わりまでの呼吸を途切れさせず、その間の時の流れを大切にしながら空間美を追求することになる。したがって、最初は複数人で書く場合の気脈の途切れを懸念した。しかし、この形式を家族で「気脈」を共有し呼吸を合わせる、家族で気脈をつなぐ（リレーする）と解釈すればよく、「三世代」や「家族」での参加は、むしろ「寄り合い書き」の特徴が際立ち、その意義が認められる。

実際、小さい子が「一」の一面を集中し気持ちを込めて書き、その後に親が「意」と続けて書いた家族、難しい「楽」の字に挑戦している子供を見守る父母の姿が見られるなど、家族で一作品を書き上げる活動は、実に温かく楽しいものとなった。近江巡礼の写真パネルに囲まれて制作できたことも意義深かった。

③題材設定について

想いや願いを表現する書制作においては、まず題材設定が重要であり、それを決定することも書制作の楽しみの一つである。特に今回は「想いや願い」がテーマであるため、書文化では出来るだけ参加者の希望を優先したいとの思いから字書や配布資料での対応を考えていた。しかし美術館側からの指摘通り、時間的制約と参加者からの「何を書くのか」という質問に対する回答の必要性が生じ、家族編、個人編とも語句を3つずつに絞って提示した。それぞれの語句について五書体を並べた資料を配布したことによって、語句を限定しつつも字面を考えた書体の選択を楽しめたようである。

さらに資料を作成する大詰めの時期ではあったが、美術館から指示が入り、幸いにも「楽山楽水図」の鑑賞と、それに関する論語の通りの「知者楽水」「仁者乐山」も題材例に挙げることができた。書体の変遷や論語、その他の語句（温故知新、一意専心）についての解説も組み入れ充実した内容のパワーポイントを示せたと考えている。パワーポイントは、画像の展示が可能で、要点を押さえた口頭説明に役立つ。特に時間的制約のある場合、無理なく進められるよう制作の手順も示せるので有効である。

④パフォーマンスと席書について

パフォーマンスは現代の風潮のようにとらえられがちだが、実は、書家による書道パフォーマンス自体は江戸時代以来の席書の伝統の延長上に位置づけられている。江戸時代から明治時代中頃にかけて盛んに行われた書画の催しの一つである書画会では、個人が寺院や料亭の座敷を借りて席書を開催していた。

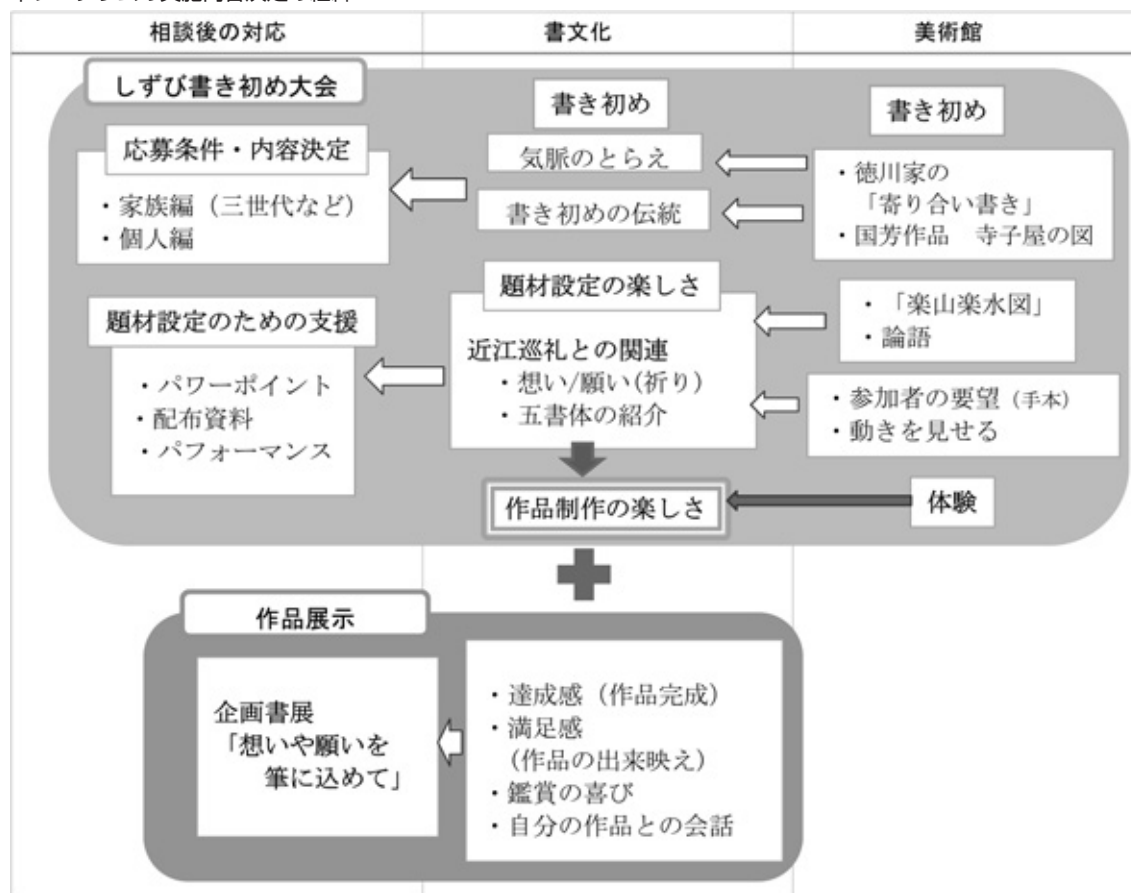
また、手習いの師匠が門弟や他の人々を集めて席上で揮毫させ、書かれたものを展覧する催しも席書と呼ばれていた。江戸時代の席書は、日頃の練習の成果を公衆に示す目的で実施され、寺子屋の師匠もまた、その指導の技量と手腕を社会に示す機会にしていたようである。その際に大太鼓による伴奏が行われていた記録もあることから、現代の音楽に合わせて書く「書道パフォーマンス」は、寺子屋における席書の大字揮毫が進化・発展したものであるといえる⁽³⁾。

本プログラムにおける「書き初め大会」開始前のパフォーマンスは、あくまでも書文化専攻の紹介と導入という意図で、会場の広さに合わせて内容を決定した。美術館側から、今回は徳川展の時のような「手本」がないので「書く過程を見せる」という意味でパフォーマンスの実施を提案され学生に話したところ、最初、彼女たちは、最近流行っている派手な「書道パフォーマンス」をイメージしていた。しかし館内の雰囲気に合わせて、静かな曲で落ち着いた感じの構成を考えた。「書き初め大会」の中でも書文化の学生が実際に「水」を五書体で揮毫したので、大字書きの際の筆の運び方も示すことができ有効であったと考える。

⑤作品制作の楽しみについて

毛筆で書く行為自体楽しいものだが、大字となれば尚更貴重な体験となり書きあげた達成感は大きいものである。作品の出来映えも気になり、上手く書けると満足度が増大する。そこで題材設定の段階では見

本プログラムの実施内容決定の経緯



栄えのする字面の語句を選択した。その点で干支の「巳」を書くという案は採用できず、書写的な文字では表現効果が出にくいということと、出来映えの比較が起らないよう参加者のなかで書く文字の重なりを少なくすることへの配慮も込めて、資料に五書体を掲載することにした。

また「作品」を展示するという目標があると、それが動機づけとなって制作意欲が向上する⁽⁴⁾。しかも、書く語句が自分の想いや願いであった場合は、それこそが表現することの楽しさに直結する。逆に同じ語句で書かれた作品を並べて展示する場合には、劣等感を味わう者がでるという弊害が指摘されている⁽⁵⁾。そこで、過去に行った「マビック展」では、書く題材を、例えば「静岡の魅力(自然)」などのテーマに合わせて自由に決められるように配慮した⁽⁶⁾。今回提示した語句は3種類ほどではあるが、書体選択に幅を持たせ他に書きたい語句を書くことの自由を保障したため、参加者の意思を反映できたと考えられる。

さらに書展の開催によって、作品鑑賞の楽しみが加えられた。書制作をしていると、作品を書き終えた瞬間、それが自らの手を離れて独り立ちするように感じることもある。他の人の作品を鑑賞することはもちろんだが、書展において自分の作品と再会し対話することも楽しいものである。

以上の5つの視点から、本プログラムは地域の文化振興に大いに貢献できたと思う。

(2) 連携に関して

書文化専攻生の地域への関わりとして、「書き初め大会」への協力を申し出たが、静岡市美術館では書き初め成果物の展示はしないため、作品制作と合わせて成果発表も行うことにした。時期的にも卒業書展・学生展のために確保したグランシップにおける併催が可能であった。

書文化専攻生による企画では、専門的に書を学んでいることが支援としてプラスに働く反面、逆に一般の参加者の視点とのズレが生じる場合もある。今回、静岡市美術館と連携を図ることによって、対象をどうするか、時間配分はどうかなどの大枠だけでなく、チラシなどへの分かり易い表記に関しても、参加者

の気持ちを代弁するような「何を書くのか知りたいだろう」「課題を絞って提示した方がよい」といった様々な配慮をするうえで、とても参考になった。広報への記載文やチラシ・ポスターの作成など、一般市民に参加を求める場合に考えるべき様々な事項について、ワークショップ実施の経験に基づくプロの目線での指摘が加えられ、学生は、その都度教わりながら進めることができていた。

また参加費に関しては、既に美術館に揃っている下敷きや墨池代わりの灰皿、文鎮などの用具を使用し、紙や墨は静岡大学のプログラムの予算から捻出し、参加者からは徴収しないということで進めた。ただし、出品作品の返却のための宅急便代は、イノベーション社会連携推進機構の阿部耕也先生から提案いただいた通り、着払い伝票を本人に書いてもらって対応した。出品が希望者に限られていることと配送先の住所の記録を避けるという個人情報管理の意味からも賢明な判断であったと考える。

広報活動に関しては、市の美術館ならば新聞やテレビなどでの宣伝効果が大きいと目論んでいたのだが、それは展覧会自体であり、関連イベントは館内や市の施設にチラシを置くといった対応に留まった。「書き初め大会」の参加者募集については、まず「広報静岡」に、続いて静岡大学とイノベーション社会連携推進機構(地域連携生涯学習部門)のHPにも掲載してもらったが、実際にはなかなか参加者が集まらなかった。そこで静岡大学教育学部附属静岡小学校の全生徒に、また筆者が担当した書道大学講座や静岡県書道振興会の会合の席でもチラシを配布したところ、ほぼ定員を満たす応募となった。

書展の広報については、例年卒展で葉書を送付しているため、それを継続したが、むしろ回覧板を活用したり公民館にチラシを置いたりするなど、近隣住民への働きかけが必要であると感じた。

7 今後の方向性

本プログラムは、「書き初め」という伝統文化の継承と表現活動としての書制作のあり方の拡大という点で開催の意義が認められた。ここでは、静岡大学地域連携プログラムとしてのさらなる充実を図るため、今後の方向性について考察する。

(1) 日常に生きる書写指導の確立と表現の喜び体感

書塾の指導者から受け取ったであろう、いわゆる手本をもとにして書いていた小学生は、書写の授業で取り扱われた教材文字を他の文字に応用発展するまでには学習が定着していなかったと察せられる。書写教育に従事する者として、日常に生きてはたらく書写指導の推進に対する一層の努力を自覚している。

また今回は、時間的な制約を克服するよう題材設定に工夫を凝らし書体や用紙の選択を交えることによって、参加者に自らの表現活動として書制作を楽しんでもらうことができた。パフォーマンスによって書く過程を示したことも表現意欲の喚起に有効であったと考えている。基礎・基本を学ぶ小・中学校の「書写」を大事にしながらも、高等学校芸術科書道への関連や生涯書道への発展を考えて、発達段階に対応した形で文字を書くことの楽しさを伝える⁽⁷⁾ことは、生涯にわたって書を愛する心を育成していくことに結びついている。殊に、幅広い年齢層を対象にする場合には、参加者の発達段階や個々の想いを尊重して書く活動を展開していくことが重要である。

(2) 家族や地域の「伝統文化継承」教育機能の再生

「書き初め」そのものが伝統文化の継承に値するが、1日目の家族編という形態についても、かつて「書き初め」が年中行事の一つとして家族内で行われていたことと関連づけられる。地域生活の基本単位としての家族とは、「生命維持のための基本的な生活習慣を身につけさせること」や「社会生活を営むための躰」などの重要な教育機能を持っているが、加えて「伝統文化の継承」の役割も果たしていた⁽⁸⁾のである。

また、スライドや配布資料を活用して書き初めの由来や論語の意味などを示したことも、書や伝統的な言語文化に対する知識・理解の促進につながった。教育環境として地域社会を考えた場合、国際社会における日本人としての資質形成⁽⁹⁾が重要な役割の一つに挙げられる。書に限ったことではないが、国際人としての交流を推進するためには、知識・理解に裏付けられた技能の向上が求められる。これは学校教育の

みならず生涯学習という視点において、今後ますます力を入れて取り組むべき課題であり、地域に根差した本学教育学部の書文化教室は、その主軸となれるように努力する必要がある。

(3) 継続実施への努力とネットワークの強化

事業の内容を向上させるためにはPDCAサイクルの手法を十分に活用する必要がある。しかし、継続的に実施できない場合、KGI（Key Goal Indicator）の確認に終わってしまうのはやむを得ないことである。実は昨年度の「年賀状講座」の際、2回の講座であることからKPI（Key Performance Indicator）を自覚しつつKGI（Key Goal Indicator）を確認したものの、単年度の開催に終わったためPDCAサイクルの手法の活用がかなわなかった。本プログラムは単発のワークショップであったため、KGIで考えることになったが、「楽しかった」「また来年も参加したい」という感想から判断し、一応の成果が認められる。ただ、これについても、残念ながら、次年度は展示との関わりが望めないという理由で静岡市美術館から継続不能との答えが返ってきたため、PDCAによる検証はできなくなった。美術館では当然ながら美術館の企画展が重要であり、多目的ホールの使用に制限がかかるのはやむを得ない。また関連イベントについても、企画展への入場者増に直結するような内容が求められていることだろう。今回話に出た写経などの講座も連携を図って実施する際には、十分に相談しながら進める必要がある。しかし学生に時間的余裕のない現状において、彼らの主体性を大事にしつつ先方との調整を図るための教員側のチェックは不可欠であり、一つのことを決定するにも幾度となく修正を加えて進めなければならないなど、改めて連携事業継続の困難さを実感した。

また、静岡大学の書道研究室が関係してきたこれまでの社会貢献活動を振り返ると、活用できる施設の確保が社会貢献活動の継続を危ぶみ中断させる結果を招いてきたのは明らかである。

今日では、大学もまた、企業と同様に「社会貢献活動＝フィランソロピー（Philanthropy）」が求められている。米国のインディアナ大学では、フィランソロピーに関する学部を創設してフィランソロピーにおける倫理や歴史、市民社会の形成などの科目の履修を用意し、卒業後には財団やヘルスケア、コミュニティ開発、教育や芸術などの様々な機会でのキャリアの機会を見込んでいるという。日本にはまだここまでの動きは見られないが、今後は大学が主体的かつ全面的に実施する形のフィランソロピーが重要になるのではないだろうか。特に「見返りのない」文化支援こそが理想の社会貢献であるといわれるほど、芸術文化の擁護・支援の推進が叫ばれる⁽¹⁰⁾現代においては、教育の高度化を重ね合わせ、長期継続的な視点で生涯教育を進めなければならない。フィランソロピーの分類には「本業を通じた社会貢献」、「金銭的寄付による社会貢献」、「施設を活用した社会貢献」、「人材を活用した社会貢献」が挙げられる⁽¹¹⁾。今回の書き初めは「施設」を美術館に委ね「人材」の関わりを得ながら、大学の「本業」と「金銭」を軸に展開できた。

確かに連携によって学生の学びは大いに高まり貴重な経験となった。また、市民参加型「書き初め大会」の実現に絶対条件の会場確保についても解消できた。しかし、学生の予定をある程度に優先させるとなると、「連携」という形で外に出かけるのではなく、例えば社会貢献の場を大学内に用意し然るべき人材を招くことによって、学生の負担を軽減しつつ学生への教示は実現可能である。大学として社会貢献の目標を考えた場合、当然ながら連携する施設とは「ねらい」が微妙に異なる。その点においても大学が主体的に実施する形のフィランソロピーならば、自らの方向性をしっかりと定められるのではないだろうか。

幸い本プログラムで実施した書展の後に学生選抜展を開催させてもらった江尻交流学習館の館長からは、今後に向けての発展的な参加協力の話を受けており、来る江尻祭りでは、書文化専攻生によるパフォーマンスが計画されている。こうした自治体や各種団体とのネットワークを大切にしつつ一層強固にして、形を変える等の工夫をしながら、是非とも継続的に地域貢献の事業を展開し、積極的に地域住民との関わりを深めていきたいと考えている。

おわりに

今回中心的に活動した2年生は書き初め当日や書展の会期中に成人式が行われるなど日程的に厳しかったが、学芸員の方の熱に心打たれ参加者の方に喜んでもらいたい一心で献身的に取り組んでいた。授業が終わってからの作業になるため、夜を徹して資料やパワーポイントを作成し、パフォーマンスの構成に励んだ。年末も正月も返上して関わり、書き初め大会の後も誠意を込め熱心に裏打ち作業を進めていた。参加者の方に書く楽しさを伝えたいという彼女たちの想いは確実に伝わったと考えている。

参加者の方々からの感謝の声が十分に彼女らを労ってくれたが、この場を借りて、書文化の学生の頑張りを紹介するとともに、学生達に感謝の言葉を送りたい。

なお、静岡市美術館の吉田様、青木様には、大変お世話になりました。改めてお礼申し上げます。

注

- (1) 杉崎哲子『「想いを伝える書き文字」－南部生涯学習センターとの共催講座『和の心 筆で書く年賀状』－』『静岡大学教育実践センター紀要 第20号』p.299～308 平成24年3月
- (2) 杉崎哲子「書き文字で伝える静岡の魅力－その1－」『文字文化と書写教育』平形精一編 萱原書房 第II部「書写書道教育」p.377～388 平成23年3月
- (3) 石井健「寺子屋の席書と書道パフォーマンス」『文字文化と書写教育』平形精一編 萱原書房 第I部「文字・書文化(含書論・書道史)」p.175～186 平成23年3月
- (4) 滝口雅弘・葛西孝章「生涯発達と書道学習の在り方－成人学習者の意識調査を通して－」『書写書道教育研究』第18号 全国大学書写書道教育学会編 p.31～40 平成16年3月
- (5) 杉崎哲子「小学校国語科書写におけるポートフォリオ評価法の可能性についての考察」『日本教育大学協会全国書道教育部門研究紀要』第11集 p.2～11 平成18年3月
- (6) 杉崎哲子「小学校国語科書写における『毛筆作品制作』に関する一考察」『書写書道教育研究』第21号 全国大学書写書道教育学会編 p.28～37 平成19年3月
- (7) 杉崎哲子「中学校国語科書写における発達段階に対応した硬筆指導の方向性に関する考察」『書写書道教育研究』第26号 全国大学書写書道教育学会編 p.50～59 平成24年3月
- (8) 岡崎友典、高島秀樹、夏秋英房『地域教育の創造と展開』放送大学教育振興会 平成20年
- (9) 中村哲『伝統や文化に関する教育の充実』教育開発研究所 平成21年
- (10) 出口正之『フィランソロピー企業と人の社会貢献』丸善ライブラリー 平成20年
- (11) 本間正明編『フィランソロピーの社会経済学』東洋経済新報社 平成20年

公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習⑭」

学習ネットワークと生涯学習

日時	2011年12月20日（火） 14:25～15:55
会場	静岡大学共通教育A棟301教室
パネリスト	岡本 恵（静岡市文化スポーツ部生涯学習推進課） 小西潤子（静岡大学教育学部教授） 小嶋 遼（静岡大学教育学部芸術文化課程4年） 山崎 綾（静岡大学教育学部芸術文化課程4年） 横関美咲（静岡大学教育学部芸術文化課程4年）
コーディネーター	阿部耕也（静岡大学生涯学習教育研究センター長）

阿部（コーディネーター）——この公開シンポジウムは生涯学習教育研究センターができたときからずっと継続して実施していて、今回が14回目になります。広い意味での学習ネットワークとして、静岡市と市内の大学、高校と大学、県の文化財団との連携の中で、さまざまな事業が行われています。今日はその紹介をしていただきます。また、それらをもとにさまざまな生涯学習の展開があり、それがまちづくりにつながっているといった事例をこれまで取り上げてきましたし、今回もご紹介したいと思います。

今回、生涯学習概論、教育学概論、社会教育計画Ⅱなど、さまざまな授業を取っている学生が参加していますが、私が生涯学習について何か話すよりも、実際にネットワーク、連携によっていろいろ生涯学習が展開している具体的な事例を、ご本人の口から報告していただいた方が、より深く学ぶことができると思いますし、自治体や大学が連携するとこんな可能性もあるということを見出すこともできるはずです。今日の報告者の中には皆さんと同じ立場の学生の諸君もいます。そのような事例を聞いていただいて、少しパネルディスカッションの時間も取ってありますので、活発に質問・ご意見をいただければと思います。

自治体と大学ネットワークによる生涯学習の展開・ 静岡市市民大学リレー講座

岡本 恵（静岡市文化スポーツ部生涯学習推進課）

■静岡市生涯学習推進課の紹介

今日のテーマをお話する前に、まず静岡市役所生涯学習推進課の説明を簡単にさせてください。

皆さんの中には、静岡市外から通学したり、静岡県外から静岡大学に入学した学生さんもいるかと思います。静岡市は、2003年（平成15）に静岡市と清水市が合併し、その後、順に蒲原町、由比町が合併して、現在は人口約70万人を超える政令指定都市となっています。その広い範囲に生涯学習施設が30以上あります。旧静岡市（現在の葵区と駿河区）には11の生涯学習センターがあります。そして、旧清水市、旧蒲原町、旧由比町（現在の清水区）には21の生涯学習交流館があります。生涯学習交流館は生涯学習センターより少し規模が小さめで、小学校区ごとに約1館設置されています。その各施設では、市民向けの講座を職員が開催したり、施設には集会室、大小の会議室、和室、調理室やホールなどがあるのですが、その集会室を市民のグループに貸し出しする事務などを行っています。

そういった施設を取りまとめている課が生涯学習推進課で、駿府城公園の横に建っている静岡庁舎の17階にあります。そこに総務担当、経理担当、施設担当、事業担当という4つの担当がありますが、私はその事業担当に所属しています。

事業担当の仕事は、大学との連携事業を行ったり、各生涯学習施設の講座に協力したり、または役所中のいろいろな課が行う市民向け講座があるのですが、その支援をしたりすることです。また、まちづくりに関心がある人たちへの講座である「人材養成塾」の開催事務などを行っています。

■市民大学リレー講座

大学との連携事業とは具体的にどのようなことをやっているのか、ということですが、まず市民大学リレー講座です。静岡市内には、静岡大学、静岡県立大学、静岡英和学院大学、東海大学、常葉学園大学という5つの大学があります。各大学も大学の校内で社会人向けの社会講座を開催しているのですが、大学の先生による市民向け講座を市民に最も近い場所である生涯学習施設で開催してもらいたい、そして、せっかく5つの大学が静岡市内にあるのだから連携してできないだろうかと考えて、各大学の担当の先生方に協力をいただいて、2009年（平成21）に「市民大学リレー講座」を始めました。

この講座は、基本的に一つのテーマを決定し、各大学から選出された先生方による5人のリレー形式で行っています。リレー講座の準備としては、年2回ほど、生涯学習推進課の事業担当が事務局となり、5つの大学の担当者との会議を開きます。そこではテーマを検討したり、各大学はそのテーマにどういった先生を選出できるか、講義の内容によってリレーの順番はどうするかを話し合います。また、会議以外の細かいことはすべてメールで先生方とやり取りしています。

静岡市と大学との役割分担に関して、市役所生涯学習推進課が行うことは、講座会場を確保することです。ほとんどの場合は生涯学習施設で行うのですが、秋などはいろいろな市民グループが生涯学習センターの大きな会議室を使いたいとか、センター自体の主催講座があったりして、なかなか確保が難しい場合は静岡市産学交流センター（B-nest）などの会場でも開催したことがあります。

また、市の役割分担として、静岡市の広報紙へ募集記事を載せます。そして講座公募用のチラシを作って、各生涯学習施設へ配ります。講座の広報が終わると、次は受講生の申込受付を行います。講義される

先生への謝礼金の負担や会場費の負担も静岡市の方が行います。

大学が行うことは、講義される先生を選出していただいて連絡調整してもらうことと、大学として可能な範囲内でリレー講座の広報に協力していただくことです。

ここで講座の雰囲気をつかむために、昨年(2010年)と今年(2011年)のチラシを見てください(図1~3)。昨年は2つリレー講座を行いました。8月~9月に「静岡市を学ぶ」、10月~11月には静岡のお茶をテーマに「お茶に注目!」という題名でリレー講座を開催しました。そして、今年は「文明と環境」をテーマとしました。

今年は83人の申し込みがあり、定員の80人を超えたのですが、こういう無料の講座ですと、当日は申込者の6~7割くらいの参加者になってしまいます。



図1 「静岡市を学ぶ」チラシ(2010年)



図2 「お茶に注目!」チラシ(2010年)



図3 「文明と環境」チラシ(2011年)

今年の秋リレーの1回目は、静岡英和学院大学人間社会学部の飯山昌弘先生が「科学文明、資本主義、そして環境問題」というテーマで、5回のリレーの導入的な役割を果たしてくださいました。2回目は静岡大学文学部の楊海英先生が「モンゴルの遊牧文明と環境」というテーマで、アジアの一つの地域の事例として、長い歴史から見た環境の変化を話してくださいました。3回目は東海大学海洋学部の植原量行先生が「海と気候変動」という、地球規模で大きくとらえた講義をしてくださいました。4回目は静岡県立大学環境科学研究所の内藤博敬先生が「遺伝子組み換えと環境」をテーマに、遺伝子組み換え技術と環境の問題を研究者の立場から話してくださいました。そして、最後の5回目は、常葉学園大学の長洲南海男先生が「エネルギー環境問題を考える」をテーマに、教育者の視点から環境教育の日本の現状を話してくださいました。

どのような方が申し込まれているかといいますと、本当はこれから大学に入る高校生に来ていただきたいというのが大学の先生方や静岡市役所生涯学習推進課の狙っている層なのですが、実際の参加者は50~70代くらいの男女半々くらいです。静岡市外の方、焼津や島田、藤枝の方も若干いらっしゃいます。皆さん熱心に講義を受けて、質問時間も講座の最後に設けているため、上手に司会をしないと延々と質問が続いてしまう場合もあります。

今年の静大の楊先生の「モンゴルの遊牧文明と環境」も、かなり質問が相次いだと記憶しています。現地の映像や、モンゴルの現場でどのようなことが起こっているのかに皆さん引き付けられていました。また、講座の終了後に楊先生から、せっかく5人のリレーをやるのなら、最後にもう一度5人そろって、一回パネルディスカッションをやってはどうかという提案がありました。

■大学の公開講座の協働開催

次に、各大学企画の公開講座を静岡市がお手伝いする形で行っている連携事業を紹介します。今申し上

げた「市民大学リレー講座」が静岡市と5つの大学と一緒に協議して組み立てて実施しているのに対して、一つの大学、例えば静岡大学が企画した連続講座を、そのまま静岡市の生涯学習施設で開催していただくのが「協働開催講座」です。これは軽い共催と呼べば分かりやすいかもしれません。テーマや内容は静岡大学が決定して、静岡市の生涯学習推進課が開催事務をお手伝いするという感じです。静岡市と共催することで、市役所の広報課が作っている広報紙に、その受講生募集記事を掲載することができます。この広報紙は市内の28万世帯、全世帯に配られます。ですので、講座でアンケートを取ると、広報紙を見て応募したという方が一番多く、市民にお知らせするのに一番力のある媒体です。

受講者の申し込みの取りまとめと当日の講座運営は、市の職員が行います。大学側は内容の企画と講義の先生を派遣します。一見、静岡市が大学のお手伝いをしているだけのようですが、生涯学習推進課としては、大学が開催する専門的な講義を静岡市民の方に容易に提供できるというメリットがあると考えています。

大学の公開講座が開催されれば、生涯学習センターの施設、建物自体のレベルアップにもなります。これはだいたい年2回ほど開催しています。具体的に申し上げますと、2009年は常葉学園大学と「暮らしを通して知る韓国」(全8回)、もう一つは静岡県立大学と「広域ヨーロッパへの誘い」(全4回)、2010年と2011年は静岡大学と静岡県立大学とのものを、1回ずつ行いました(図4)。

2009	常葉学園大学「暮らしを通して知る韓国」(全8回) 静岡県立大学「広域ヨーロッパへの誘い」(全4回)
2010	静岡大学「多文化共生社会におけるヒューマン・ケア」(全6回) 静岡県立大学「薬食同源」(全4回)
2011	静岡大学「終末期医療の「いま」と「これから」～ヒューマンケアの視点から～」(全6回) 静岡県立大学「静岡県立大学NOW! : 学びの新機軸を目指して」(全4回)

図4 大学の公開講座の協働開催実績

今年の6月には、静岡大学「終末期医療の「いま」と「これから」～ヒューマンケアの視点から～」(全6回)を、毎週水曜日の夜7時から葵生涯学習センターで開催しました。内容がとても優れていたもので、この静大の公開講座は定員30人のところ、51人の申し込みがありました。大きめの部屋を確保しておいたので、人文学部の方と話し合っ、全員の受講を決定しました。最終的には皆さん熱心に受けられたので、39名の方が静岡市長と静岡大学学長との連名の修了証書を受け取られました。全6回のうち4回以上参加された方に修了証書を発行しています。市民大学リレー講座の方は年配の方が多いのですが、この静大の講座の場合は、医療現場や介護の現場に携わる方が仕事のためやスキルアップのために、または静岡大学で既に学んでいる方が、その延長として受講されていました。あと、家族の介護にどう向かい合ったらいいのかを知りたくて、参加されている高齢の女性もいました。

■大学の公開講座の広報協力

これは大学自身が主催する社会人向けの講座やシンポジウムの宣伝を市の生涯学習推進課事務局担当が、その得意分野を利用して行っているものです(図5)。それぞれの公開講座を担当されている教授や事務の方から、直接事業担当にメールや電話で依頼があります。事業担当で協力する方法は、まず講座の募集チラシを全生涯学習施設に、役所内の連絡便を使って配布します。また、希望があれば、だいたい10館くらいの静岡市立図書館に役所内の連絡便で配布します。ですので、事業担当

<ul style="list-style-type: none"> ・ 県立大平成23年度県立大学大学院社会人学習講座「社会科学への招待」「ソーシャル・ビジネス入門」「マーケティング・リサーチ入門」 ・ 英和大公開講座「今を生きる」(市HP掲載) ・ 常葉大「オープンユニバーシティ2011後期」(市HP掲載、チラシ配付) ・ 静岡大「静大フェスタ」(チラシ配付) ・ 静岡大・コープしずおか連携講座「<いのち>と環境を考える」(市HP掲載、チラシ配付) ・ 静岡大「日本学会会議中部地区会議学術講演会」(市HP掲載) ・ 県立大大学院 社会人学習講座「クラウドコンピューティングの実践的応用講座」(チラシ配付) ・ 県立大創立25周年記念事業環境科学研究所・特別講義「安全ではなく、リスクを考える」(市HP掲載、チラシ配付)
--

図5 広報協力した講座の一部(2011年度)

に声を掛けていただいて、ゆうパックなどでチラシやポスターをまとめて送っていただければ、2～3日のうちには静岡市内の40ほどの施設に、その講座チラシを設置することができます。

あとは静岡市の公式ホームページのトップ画面に「市内の大学の公開講座情報」という項目を作り、そこに依頼があった大学の情報を載せています。市としては、生涯学習センターや生涯学習交流館に行けば、市民の方々が簡単に大学機関が行う講座情報を受け取ることができるということで、生涯学習施設が知識や高度な情報の発信地になればいいと思っています。私たちの事務量が少し増えるのですが、市役所内の連絡便を使っただけのチラシの配布は無料でできますし、ホームページの修正も市の職員が行います。大学側もたくさんの施設にチラシを郵送する手間や費用が省けます。市・大学両方にメリットがあるので、丁寧に積極的に対応するように心掛けています。

以上で静岡市と大学との連携事業の説明を終わりますが、こういった大学との連携をさせていただくことにより、静岡市民のたくさんの方、なかなか大学まで足を運べないが学びたいという方に人気のある講座を提供していきたいと思っています。

報告 2

音楽活動を通じた地域連携の取り組み

小西潤子（静岡大学教育学部教授）

小嶋 遼（静岡大学教育学部芸術文化課程4年）

山崎 綾（静岡大学教育学部芸術文化課程4年）

横関美咲（静岡大学教育学部芸術文化課程4年）

■音楽活動を通じた地域連携の取り組み

小西——今回報告する事例は、「Let's 能 プロジェクト」という名前で、能を知ろうというプロジェクトです。「Let's know」と似ていますが、「能」です。静岡県文化財団と高校との連携事業ということで、音楽活動とおした地域連携の取り組みとして、今年度（2011年度）に開催しました。

「連携」という言葉が先ほどから出てきているのですが、方向性としては、静岡県文化財団からお話があって、私の小西研究室からさらに静岡県立静岡城北高校との連携という形で発展していった事業です。ちなみに、静岡県文化財団とは、皆さんにも身近なグランシップを運営している財団です。

私たちがそもそも目指すところは、文化財団という行政が主体でやってきた文化事業を、市民・住民主体の活動へ広げていきたいということです。今回の事業の目標とするところは高校生との連携だったわけですが、高校生は数年たつと大学生になり、大学生は数年たつと地域の人になるというわけで、単に高校生向けにお話をしようということだけではなく、そこから地域の音楽文化の裾野を広げていく人材を育成するという方に向かっていくことを意図したものです。

■平成23年度 Let's 能 プロジェクト概要

「平成23年度 Let's 能 プロジェクト」の概要ですが、「平成23年度」とわざわざ名乗っているのは、これが末長く続けばいいなという思いを込めているからです。今年度の事業の特徴は、まず大学生が中心になっていることです。今回の場合はここに3人の学生が中心になり、教員である私自身と財団のスタッフがサポートするという体制によって、企画・運営を進めるという特徴があります。

まず、今日皆さんのお手元に届いているパンフレットを作成しました。後でまた詳しく説明をしたいと思いますが、これは能について私たちが説明をしていくためのツールとして作成したものです。

具体的には11月30日の1日を使い、午前中に静岡城北高校、午後から静岡大学で生徒あるいは学生向けのイベントを行い、その企画と実際の運営をしました。また、静岡県文化財団関連の能に関するイベントの広報活動を、各所でパンフレットを配布したり、口頭で行いました。

そもそも能に目を付けたのは、財団法人静岡県文化財団と能楽師さんとのつながりがあったからです。担い手である能楽師の方々の中に、より広く伝統文化を日本に広げていきたいという思いがあって、そこに文化財団が関わってくるわけです。また、もともと静岡県は徳川との関係もありますから、能との関わりも深いというバックグラウンドもありました。

普通、事業は文化財団の方のコーディネートによって運営されますが、今回はそこに大学のプロジェクトチームとしてわれわれが関わることによって、われわれが持っている研究や教育の基盤と文化財団の持っている企画運営のノウハウをうまくリンクさせ、さらにこれを橋渡ししながら、教員を目指す大学生や高校生をターゲットに、能の普及のために私たちが何かできることはないかということでやってきたわけです（図1）。

財団の方から求められたのは、大学生ならではの視点でやるべきではないかということでした。つまり、

財団の方だとどうしても目線が違う。そこに、高校生や大学生と同じ価値観を持った学生が媒介になることによって、何かできるのではないかと、ということが期待されました（図2）。それから、ここにいる学生たちは教育実習なども経験していますし、さらにそのうち2名は、財団が提供して下さっている「文化事業実習」という授業で、グランシップに夏休みを中心に実習に行っているという経験があります。それらの経験を企画などに生かせるのではないかと、ということも期待され、お話があったわけです。

大学のプロジェクトチームとしての私自身が目標としたのは、幅広い教育実践力を身に付けることでした。彼らは音楽の教員になるということなので、その中で適応力や行動力、コミュニケーション能力なども当然磨かれるでしょうし、自身が地域の音楽文化を広げていけるような指導者・サポーターになっていくことも求めたいところです。すなわち、彼らのキャリアアップにつながったり、彼らが使命感を持って取り組めるようなイ

ベントにしたいということです。単に自分たちが好きでやっている活動ではなくて、地域に貢献することを目標にやっているものですから、そうした経験が将来の地域文化を作っていく、活動に参加することで地域文化を作っていく担い手になってもらいたいという期待を持って、このチームを結成しました。

しかし、実際にやってみて一番大きかったのは、ここにいる学生だけでなく私自身が非常に勉強する機会になったことです。私自身がここに関わることによって学んだことが期待以上に多かったというものになりました。

■企画の流れ

山崎——私たちの「Ler's 能 プロジェクト」は、11月30日に行われた静岡城北高校での公演と、静岡大学の音楽科を対象にした公演を最終的な目標として、定期的な企画会議や外部との打ち合わせを行ってきました。

定期的な企画会議とは、ここにいる4名プラス文化財団職員の方1名で、研究室で1週間に1度、多いときはそれ以上集まって、どのような企画をし、当日はどのような公演をしようかという話をしたことです。それだけではなく、この企画に関係する人や組織がたくさんありましたので、文化財団のほかの職員の方、当日お招きした能楽師の方、そして午前中に公演を行わせていただいた高校の担当教員の方との打ち合わせもしました。また、パンフレットを作るに当たり、印刷業者やデザイナーとも打ち合わせを行いました。そして、当日の運営を助けてもらうために、ここにいる3人の学生以外にも、スタッフを何名かお願いして、

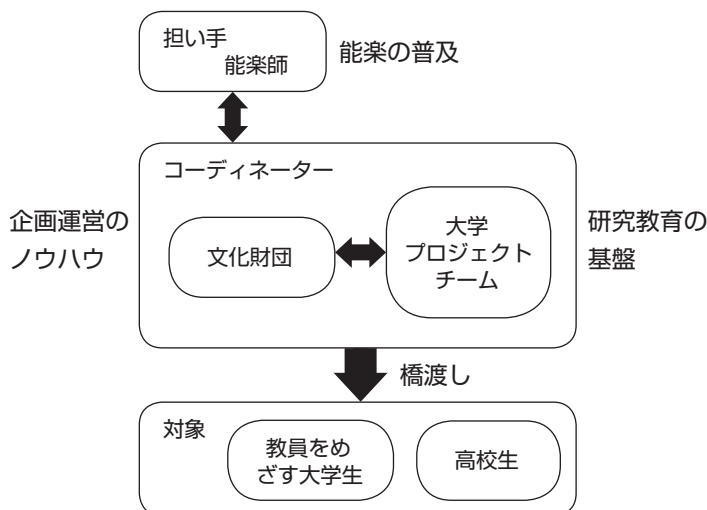


図1 大学生による、地域と未来の橋渡し

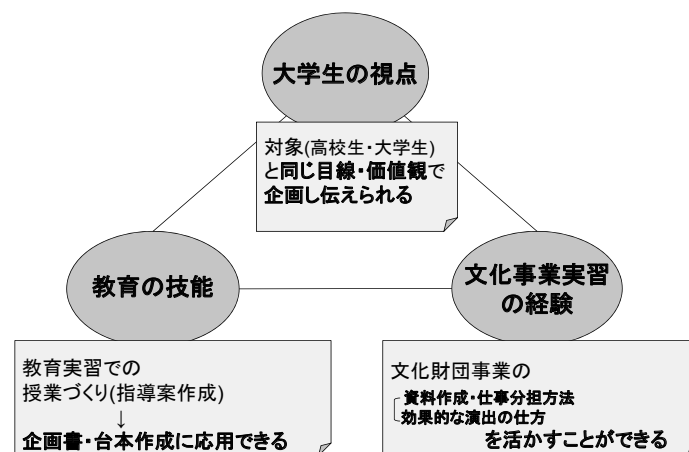


図2 大学プロジェクトチームの潜在能力

その学生との打ち合わせも行いました(図3)。

そして、当日の公演をより充実したものにするために、まず私たちが能の勉強をして深く理解をしようと、フィールドワークに出掛けました。関連公演の芝居ということで、実はグランシップで行われた能楽の公演や講演会を見にいたり、取材をしたりしています。

先ほどお話にありましたが、パンフレットを作成するために、3度、学生たちと先生と

で東京に行って、撮影を行いました。連携という話がありましたが、やはりこのように3回も東京に行って取材をさせていただいたことは、文化財団と連携をさせていただいているからこそできたことだと思います。

当日に必要な企画書の作成も行っています。これはコンセプトや目的、内容、プログラムを載せたものです。タイムスケジュール、司会原稿、プログラム、パンフレットを、文化財団が実際にコンサートの運営のときに使っている企画書を参考にさせていただき、アドバイスをいただきながら、学生で作りました。そして、当日の会場準備と会場運営を行いました。

次に、企画の組み立てについてです(図4)。当日の公演に向けて企画をしていくわけですが、能楽師を呼んできて、すべてお任せしますというわけにはいきません。せっかく大学生と連携して目的を持って進めているプロジェクトですので、いろいろと段取りがありました。

私たちがまだ能に対して勉強不足なところもありましたので、まず、その勉強をしました。また、関連公演に行って、実際に自分が能を見て面白いと思うところはどこか、感動する場所はどこかを自ら探っていくことで、

どういうことを伝えたいのか、対象からどういうことが求められているのかを考えていきました。

自分たちが面白いと思えて初めて伝えられるのだと思います。大切だから見なければいけないと、高校生や大学生に伝えるのではなく、まず私たちが心から面白いと思えることでより良い公演になればと思い、まずコンセプトの設定を行いました。

そして、私たちが伝えたいことを明確にしていく中で、対象の決定を行いました。ここでは大学生だからこそということで、同じ大学生や高校生を対象にすることを選びました。グランシップ(文化財団)の方では、小中学校に対するワークショップはよく行われていますので、ここは私たちが年齢に近い大学生と高校生を選んで話をしていこうということになったのです。

ここから、対象が求めるものはいったいどんなものなのだろうという分析をすることになりました。発達段階や興味があるもの、求めているものは何かを考えた結果、教育学部の音楽科の公演では、能楽の中でも舞を舞うシテ方と呼ばれる人ではなく、後ろで音楽を奏でる囃子方はやしかたの講師の方をお招きしようということになりました。そして、能楽師の決定となります。

しかし、どうしても物理的な問題がありますので、その中で内容の絞り込みを行っていきました。当初は1日使って能楽師の方にいろいろなことをしていただくこうと考えて、午前中に高校に行って、お昼休みに大学会館で大学生全体に向けて公演を行い、3コマの時間に音楽科の授業をして、その後公民館に行っ

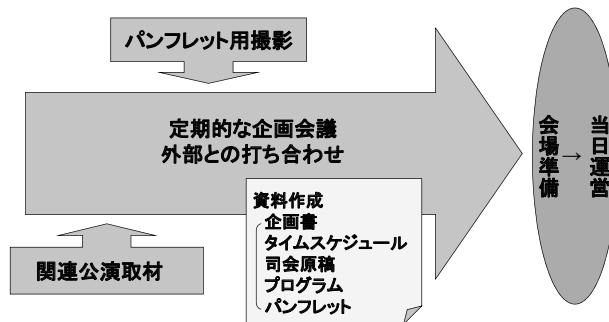


図3 企画の流れ

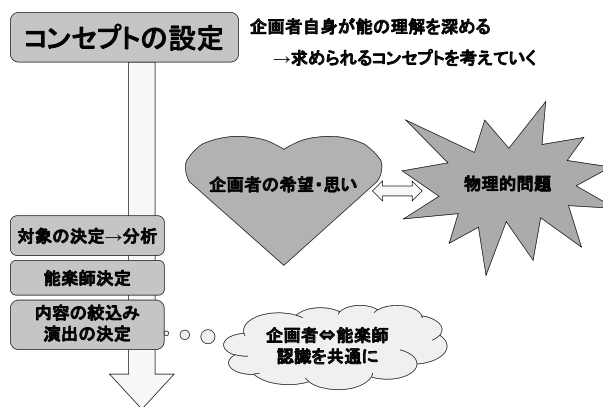


図4 企画の組み立て

て地域の人向けに話をして、その後交流会をするという、能楽師の方にとってたいへんハードなスケジュールを考えていたのです。しかし、やはり移動や場所のことを考えると、高校の公演、大学の音楽科の公演、最後の交流会という三つに最終的に絞ることになりました。

内容を絞り込んで、演出を決定していく中で大切にしたことは、私たち企画者と能楽師の方との認識を共通にしていくということです。アーティストを呼んで、すべてお任せしてやるというような、グランシブや文化施設で言うところの貸館事業ではなく、私たちが伝えたいこと、対象の大学生や高校生が求めているものを能楽師に的確に伝えていくことによって、より良い企画になるよう気を付けました。

小嶋——次に、冊子の説明をいたします。CDのジャケットサイズの小さい冊子です。私はこのプロジェクトが立ち上がったときはいなくて、企画は小西先生と2人の学生で進めていました。その過程で、能を知らないわれわれだからできるプレゼンテーションをしていくことを考えると、どうしても既存の資料ではなくて、新しくビジュアル的に資料になり得るものが必要だ、これを作ることができる人が必要だということで、急ぎ私と呼ばれたのです。完全に他人事で呼ばれてきたのですが、いろいろやっていくうちに、能はとても格好いいものだということが徐々に分かってきて、私もこれにどんどのめり込んできた形になります。

とにかく既存のものにとらわれないで新しい形で伝えるためには、やはり徹底した勉強が必要です。例えば観阿弥、世阿弥はご存じだと思います。能を語る上では非常に重要な人物です。その方の書いた『風姿花伝』という書物を読み込んでみたり、その言葉を抜き出してみたりしました。

あと、写真に関しても、通常の能のパンフレットでは能面などもだいたい真上から撮って、白い女の人のお面がバーンと出ていたりします。また、能の舞台も正面からの写真しかないということで興味を引かれない感じになっていたのを、何とかしたいということになりました。それで、パンフレットの最初のページに、通常、正面しか撮らない能舞台を後ろから撮って、能役者が舞台に出ていくのを後ろから撮るようにしてみました（図5）。ここの空間は能にとってはたいへん重要で、鏡が置いてあったりします。能楽師の方はその鏡の前でお面を置いて向き合って、精神を統一してから、無の状態での舞台に出ていくという、スタートの場所です。このように、われわれが「はあ、すごいな！」と思ったところに着目する写真を撮るようにしました。



図5 能舞台の後ろからの構図

また、パンフレットの後ろには能面の写真が載っているのですが、正面から撮った写真でないと、能面にすごく表情があることが分かると思います。実は、図6の右と左にある能面は同じものです。全く同じものを上と下から撮ったことによって、これだけ表情が違います。音楽科の生徒に見せたら「ホラーだ」と言ってパンフレットを投げ捨てられたのですが、そのくらい訴える力があるのだなということに感動して、パンフレットを作りました。

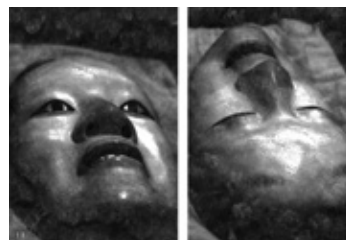


図6 能面の写真

横関——続いて、公演の本番当日の様子を少しお伝えします。当日は、午前中に静岡城北高校に行ってワークショップを行い、午後移動して静岡大学の音楽棟の教室を使って公演を行いました。まず、高校の方では、できるだけ能の空気感を味わってもらえるようなプログラムにしたいということと、生徒が実際に体を動かしたりできるような体験を盛り込むこと、われわれがパンフレットに込めたコンセプトを伝えられるような内容にすることを目的にプログラムを作りました。

そして、2人の能楽師の先生による実演が、何の説明も無しにいきなり舞台の袖から静かに流れてきて

始まるという演出をしたのです。その後は、このパンフレットを使って、ここに込めたコンセプトを学生が説明しながら、学生の進行によって進めていきました。

また、謡の発声を生徒にもまねして声を出してもらったり、能の中で使われている仕草を少しまねしてみるなど、簡単にできる体験活動を生徒全員でやりました。代表の生徒による体験では、能面を代表の生徒に付けてもらいました(図7)。笛方の先生に来ていただいたので、数名の生徒ですが、能管という笛を実際に吹いてもらう体験もしました(図8)。生徒たちは想像していた以上に集中して見ていてくれて、こちらがなるべく説明を省きながら自由に感じてもらえるようにというのが目標だったのですが、それができたかなと感じました。

高校では体育館を使った公演だったので、広い中でできたのですが、大学では音楽棟の教室を使った公演となってしまったので、少し会場が狭くて、入れる人数も限りがあり、教室がパンパンという感じでした。音楽科の3年生を中心にした授業ではあったのですが、ほかの学年の生徒や幼児科の生徒の方々も来てくださって、全部で68名の方が参加する講義となりました(図9)。

高校の内容と違うところは、高校の方では男性の角先生という能楽師の方のお話を中心に行ったのですが、大学は音楽科の授業ということもあり、女性の笛方の先生のお話を中心に進めました。その八反田先生という笛方の先生は教育学部卒業の能楽師という珍しい経歴の方でしたので、音楽に関する専門なお話も聞けて、音楽科の生徒にとってはとても有意義な授業となりました。

公演の終了後には、希望者も参加できる、角先生との交流会を生協の「グリル」で行いました。舞台のときとは違う打ち解けた雰囲気の中でたくさんお話を聞くことができ、私たちにとってとても有意義な時間になりました。

■プロジェクトの成果

小西——では実際に、高校生の反応がどうだったのかということですが、今、横関さんからの話にあったように、高校生に能が本当に理解できるのだろうか、退屈しないだろうかと心配しました。しかも300人近く入る体育館で、直に板の間に座って、休憩を挟んで約2時間というのでとても心配していたのですが、「今から能を始めます。よろしくお願いします」とはやらなかったのです。高校生が座った段階で笛の音が聞こえて、能楽師が現れる。実は、能という芸能のほとんどが「お化け」を扱ったものなのです。お化けは「今からお化けが来ますよ」とは決して言いません。いきなり現れるのがお化けだということを体験してもらいたかったのです。笛の音が始まったら水を打つような感じで皆シーンとして、こちらの方も予想以上でした。しかも、普通、退屈するだろうと思われるような能のイメージがあるのですが、食い入るように、高校生たちが三角座りをしながら見ていたところが非常に印象的でした。

それから、大学生の反応なのですが、大学のイベントが終わってから、「実は私、能を習いたいです！」と言ってきた人がいるのです。しかも真剣に。「能楽師になろうと思います。教師になるのはやめようと思います」と言うので、「それはやめてくれ。教育学部はやっぱり先生になってほしいから」という感じで言い返しましたが、それぐらい本気になってくれたわけです。私たちが伝えたかったのは「能って面白



図7 能面をかぶる高校生



図8 能管を吹く高校生



図9 大学での公演

いよ。いいよ」ではなくて、その能の持っている精神性や魂のようなものをダイレクトに伝えたいという思いがあったのですが、どうもそこがうまく伝わった部分があったのかなと思って、そこも非常にいい感じでした。

それから、能楽師の反応ですが、能楽師の先生にとっては、体育館でやるのはとてもやりにくいのです。というのは、お面を被ると全然前が見えないからです。ですから、能楽師の方は、普段、柱を目印に、この柱はどの位置ということとか、あるいは下の方にわずかに見える床の線を見ながら、何番目のところにいるから今この辺といった具合に位置を確認されるようなのです。それが全くないような、とても舞いにくいところでやっていただきました。しかも、横でも高校生が見ているという状況です。そういう状況であるがゆえに精神統一がたいへんだったようですが、非常に頑張ってくださいました。

その上で、パンフレットについても、「これは能楽師の視点で作ってくれたというところがとてもうれしかった」と褒めてくださいました。つまり、説明書というのは、普通、見る者の視点や見させる者の視点から書かれることが多いのですが、演じる側が説明するというものが今まであまりなかったと思うのです。そのあたりについては、先ほど小嶋君が説明してくれたように、舞台から出ていく能楽師として、どのように美を表現するかということをやりたいかというわけです。少し足りないながらも、できる限りやったところに反応していただけたことは、ありがたかったです。

また、われわれプロジェクトメンバーとしては、ある程度のスキルアップはできたのではないかと思います。いろいろとたいへんではあったのですが、文化財団の専門性に接することもできました。それから、高校に何回か足を運ぶ中で、高校とはどんなところだったというのを改めて思い起こすきっかけにもなりましたが、それ以上に、私たち自身が非常にたくさんの学びをすることができたのが大きな成果でした。やはり学ぶことには無限の可能性があります。

私たちも最初は軽く、皆に能を紹介すればいいと思っていたのが、むしろその無限性に触れて、今がスタートだということを新たに認識しました。そういう意味で、生涯学習を肌で感じ、生涯学習に至るまでの入り口に入ったという実感を持っています。

課題はたくさんあります。学生にとっては分担していくという作業が難しかったようです。皆さんもお分かりのように、4年生という時期にこのプロジェクトを進めていくためには、授業との関わりをどうするかなど、いろいろな問題があります。私自身にとっては、今回は財団との連携ということで経費を入れてもらえるということもありましたが、それ以上に、このメンバーだからこそできたという側面があります。音楽科で写真を撮れる人は滅多にいません。人材確保も大きな課題です。それから皆4年生ですから、就活とのバランスもありました。

また、この事業があったことをたぶん皆さんはご存じないと思います。一応、インターネットのホームページ等では案内していただいたのですが、学内でどう連携を取るかということも課題です。それから、文化財団との連携ということでもありますので、今回、「あ、能はすごいな」と思った人を今後どうケアしていくかが課題になってくるかと思っています。

以上、課題もありましたが、私たちにとって非常に実り多いイベントになりました。以上で私たちの発表を終わります。

パネルディスカッション

コーディネーター（阿部）——パネルディスカッションを始めたいと思います。まず、二つの報告の補足を短めにいただいて、相手の報告について何か感想などがあればお話をいただければと思います。

岡本——来年（2012年）の展開について説明したいと思います。先週の金曜日に、5大学の担当者に集まっていたいただき、今年2回目の会議を行いました。各大学の先生にはボランティアで協力してもらっているのですが、阿部先生も含めて県立大学、英和、常葉、東海の事業担当と打ち合わせをして、今年の簡単な報告と、来年の事業の話をしました。皆さんお忙しい中なので1時間程度の会議でしたが、内容の濃い会議で来年のテーマを決定していきます。

静岡大学は総合大学なので問題はないのですが、英和大学と東海大学海洋学部からは、「お茶」や「静岡市」がテーマだと何年も先生を選び出すことはできないと言われていました。そこで来年はどうかという話になりましたが、来年はある程度事務局の方から提案をしていくことになりました。

実は静岡市では、この4月に10年以上続いた市長が替わりました。市のトップが替わると結構方針も変わって、新しい市のプランが秋に出されました。静岡市も活気のあるまちにしていかなければならないと、市長も当然考えていて、そのプランには、国内国外に静岡市をPRしていこうという項目があります。国外といっても、静岡空港があってすぐヨーロッパというわけにはいかないで、まずお隣の韓国や中国に静岡をアピールしていくことになります。したがって、来年のテーマはおそらく、交流の前に、まず静岡市民も隣の国をよく知ろうという趣旨のものになると思います。このようなテーマで、これから5大学からいろいろな先生を選出していただく検討を始めているところです。

私たち事業担当の仕事の一つに、長期間にわたっていろいろなことを学ぶ「人材養成塾」というものがあり、そこで今20人弱の方が学んでいます。プレゼンの方法とか、課題の見付け方といった講座をしているのですが、今回の発表を聞いていて、きちんとイベントや事業の成果を見出し、成果の中から課題を見つけていくというプレゼン方法が素晴らしいと思って拝見していました。

小西——ありがとうございます。意外にもお褒めをいただいたのですが、実は私としては結構このプレゼンは苦しいものでした。というのは、授業もそうなのですが、トップダウンというか、先生が何か言ってこれをやりましょうというより、皆で作らしましょうというスタンスでずっとやってきたからです。今回のプレゼンに関しても、私の方で枠だけは作ったのですが、中を埋めるものは皆さんそれぞれで担当しようと言いました。ところが、やはり共同で作っていく中で、どうしても私1人でやることと皆でやることがずれてきたりするので、調整が結構難しかったです。しかし、皆が出てきたものを組みながら作っていくというのが大事だなと思いつつ、ぎりぎり締め切りに間に合ったというところです。

先ほど学内での連携がなかなか難しいと申し上げたのですが、実は今回のパンフレットの作成に関しては、芸術文化課程の書道科の学生に非常に大きなご協力をいただきました。それもたまたま、書道の先生に「ちょっと「花」と書いてもらえませんか」と話しかけたところから始まったのです。だんだん厚かましくなって、「「能」も書いてください」とか、実はここにある梅の花や挿絵にある花も全部書道の学生さんに描いてもらったのです。そういうのを全部協力的にやっていただけたというところで、非常に私たちも助かりました。

もともと和の仕様にしようと思って作ったわけではなかったのです。しかし、美意識を追求していくと、結果的に書の表現が非常に合うと今回つくづく思いました。それは非常に大きな収穫でした。

山崎——私からも補足させていただきます。私たち学生3人は特に授業や小西先生の研究室に所属しているわけではありません。私の専門はサクソフォンで、サクソフォンのゼミに入っていますし、こちらの2

人はピアノが専攻なので、主にはピアノを弾いています。ですが、今回、実習をグランシップでやらせていただいたことがきっかけで話があって、やってみようかと手を挙げたのが私と横関さんと、小嶋君は先ほど話にあったように、途中から呼ばれたという経緯があります。

皆さんもいろいろ授業も研究室もあるとは思いますが、単位に関係なくとも、興味を持ったことや連携できることは、そうそうあることではないので、もしもチャンスがあれば、ぜひ、どんどん挑戦してもらえたらと思います。

小嶋——今回、デザインをやらせていただいたのですが、さっき言い忘れたことがあります。パンフレットには、さっき少し言った『風姿花伝』という、観阿弥・世阿弥の頃の書物の中に出てくる言葉を、少し変えて掲載しています。この文字と写真は一応連動させているのですが、写真に出てくる場面を語っているわけではありません。われわれの中でイメージをすり合わせしたものです。それこそ、1回の話し合いに3~4時間かけながら、この言葉でいいのだろうかとすごく考えてみました。

私はさっきも言ったように最初は全く関係のない人で、突然「君、写真撮れるよね？一眼レフが趣味だよね？」という感じで呼ばれて参加したのです（笑）。最初は小嶋用年表のように、自分の歴史の中に残るプロジェクトになるかな、ちょっとやってみようかなくらいの思いだったのですが、すり合わせていくうちに、自分たちにしか撮れない写真があるのではないかという錯覚が生まれて、とにかく楽しくやらせてもらいました。

大学の授業ではどうしても受身でやるが多くなってしまおうと思うのですが、こうやって主体的にやっていると、面白いことは自分でどんどん見つかるのだなと思いました。

横関——この授業をやっていく中で、大学の中だけではなく実際に私たちが外に出て行って、一緒に連携しながらやることの難しさを感じました。しかし、その中で人とのつながりがあって、大学の方が持っているノウハウからつながっていく人とのつながりなどがあって、大学生活の中ではなかなか感じられない社会の中も少し見られたような感じがありました。

先ほど発表いただいた岡本さんの話の中で、事業の目的の中に人材養成もあるとお話しされていたのですが、市で実施している人材養成とはどんな感じのものなのか、教えていただけたらと思います。

岡本——静岡市生涯学習推進課の事業担当が行うまちづくりの中の「人材養成塾」は実はかなり歴史が古くて、たぶん皆さんが生まれる前の1991年（平成3）に、その当時の市長が主導して「若者たちが元気になってまちづくりを引っ張っていくような講座をやれ」という感じで始まった「静岡ヒューマンカレッジ」が最初です。当時は若い人たちがまちづくりに参加する講座ということで、だいたい8ヶ月~1年かけて30人ぐらいが長期間の講座で学んでいっています。1991年（平成3）から名前を変えたりして続いているのですが、ヒューマンカレッジ1期生、2期生、3期生として今、結構まちで活躍したり、市議会議員になったり、NPOを起こしている方もいるそうです。

ヒューマンカレッジが一段落した後は、「まちづくりの学校コラボ」という名前で数年間、その次に「地域シゴトの学校」という名前で5年間ほどやって、現在はプロポーザル形式で仕様書を作成しています。こういった地域の課題を自分たちで発見して、自分たちの力で解決するという、地域づくりをやっていく人材を養成する講座を開催していくための仕様書です。それに対していろいろな会社が提案書を出してきます。現在はみずほ総合研究所の方と一緒に、約8ヶ月間の講座を開催しています。長期間の講座なので、申し込みをした方のやる気を継続することも難しいのですが、大学生は、去年は県大の方がいらっしかったです。今年は大学生はいなくて、20代、30代を中心に、40代も若干いますが、約20人が「地域デザインカレッジ」という屋号で学んでいます。「地域デザインカレッジ」で引いていただければ、市のホームページがヒットしてきます。

阿部——フロアの方からのご質問、ご意見、感想などあれば、ぜひお願いしたいと思います。今、静岡市の生涯学習事業推進課から江口先生がいらしています。先ほど、高大連携の取り組みとして「Let's 能 プロジェクト」の報告がありましたが、実は教職の経験もあられますので、感想あるいはご意見があれば、ぜひよろしくをお願いします。

江口——静岡市生涯学習推進課の江口です。つい数年前まで教員をしていました。20年以上前、県の社会教育で仕事をしまして、それなりの講座を組んでいろいろな方々に参加をいただきました。今日の能の話聞いていて、そのころの楽しかったことが思い出されてきました。

能を企画することによって、何人の人たちとつながりが持てたのかなと思います。きっといろいろな人たちと出会いがあったのでしょう。私は十数年前には阿部先生とも若干お付き合いがありました。そういう意味では、社会教育あるいは生涯学習を進めていく上で、その都度その都度、たいへん良い出会いに恵まれたという気がしています。そういう意味で今日のお話はたいへんうらやましく、懐かしく聞かせていただきました。ありがとうございました。

阿部——残りの時間が少なくなってきました。今回、2つのグループからご報告いただいたのには、いろいろ背景があります。静岡市の市内大学リレー講座に関して言うと、立ち上がってから今年（2011年）が3年目になります。いくつか大学を自治体の中に抱えているところで、個々の大学と自治体が連携をするというのは結構ありますが、大学間ネットワークを使ってリレー講座のようなことをやっているのはそんなに多くありません。静岡市の場合は、たぶん名古屋市辺りがヒントになっているかと思います。

私は環境デザインの方の委員にもなっていますが、だんだんマンネリ化してきて、同じような感じになってしまいます。課題の中で初めは高校生や大学生にも参加をしてほしいという思いがありましたが、大学間ネットワークで大学の資源を使うというときに、教員だけだとやはり頭打ちになるのだろうなという気がしました。留学生なども含めて学生が参加をすると、市と大学間ネットワークのつながりも、あるいは市民に対するカバーの仕方も幅や深みが出ると思いました。

岡本さんには、教員だけではなくて、学生も絡んだ大学と自治体の連携にどんな期待があるか、少しお話しただければと思います。

そういう意味で、詳しい内容はお聞きするまでよく分かりませんでした。小西先生はいつも面白いことをやられていて、また学生の方々と一緒に何か面白そうなことをやられているという雰囲気がありましたので、そこら辺がすごく参考になるのかなと思います。これから静岡市と大学間ネットワークを組んでいく中で、リレー講座一つをとっても、例えば5～6回の講座のうち、小西先生が講師として参加されたとしたら、何人か学生を巻き込んで、ワークショップのような形で展開しそうな気がします。そうすると、静岡市民からすれば、単に大学の教員が話すよりもずっと大学が近いものとなりますし、こんな学生が市内に勉強していて、単位をとるだけではなくていろいろ社会勉強もやっているということも知られることになるでしょう。この二つが出合うといいかなと思いました。

小西先生たちの「Let's 能 プロジェクト」の方も、自治体あるいは文化財団といろいろ組むことで、これまでとまた違う展開も出てくるし、たいへんなところもひょっとしたら出てくるのではないかなと思います。静岡市と静岡大学あるいは大学間ネットワークが組んで、これまでになかったような、特に学生と絡んだ取り組みができていけばいいなと思いました。

小西先生のグループには、静岡市あるいは静岡市が持っているいろいろな施設を使ってこれからやりたいことがもしあれば、お話をいただければと思います。

岡本——私は生涯学習推進課の職員ですが、以前は福祉や税金を担当していました。また、昔の公民館、

生涯学習施設の講座企画をしていたこともあって、そのときは役所の中だけではなくて、駿河区にいたことがあります。市民大学リレー講座ですと、5つの大学を取りまとめて、役所っぽく調整するだけでいっぱいいっぱいなのが正直なところですが、しかし、以前、静岡市健康文化交流館「来・て・こ」という施設にいたときには、企画会議をして、本当に地域に根ざした講座ができていました。そのときに楽しかったなというか、大学生との連携でこういうのがいいなと思ったのが、その施設にずっと関わってくれた静大の「アウトリーチ」という音楽のグループです。今、私はその施設から離れていますが、今もおそらく時々来てくれているのではないかと思います。そのときに学生さんに一声掛けると、責任を持ってリハーサルから最後まできちんと来てくれていました。任せておいて安心でした。当日は、小さな子どもたちが楽しめるようないろいろな企画を持ってきてくれて、本当に学生さんのパワーがすごいと思いました。

もう一つは、静大の広報担当に直に電話をして、静大の中を探索する講座をやりたいと言ったところ、広報課の方がすごく協力してくれたことです。大学の中の農学部とか、確か「エコの芽くらぶ」という環境系のサークルなど、いくつかを大学の方がチョイスしてくれました。子どもたちを連れて静大の中に遊びに来たときも、いろいろな先生や農学部の研究者、「エコの芽くらぶ」が、子どもたちが飽きないように、大学近くにすごい自然があって、ドングリや松ぼっくりがあるということを紹介してくれました。お兄さん役で子どもたちを引っ張ってくれたときには、こういう連携も、簡単に言っただけは失礼なのですが、ちょっと話をするとトントン拍子で進んでいくのだなと思いました。役所の人間が固い頭で考えるよりも、地域に飛び出して行って大学と連携していけば、ずっと簡単に効果が得られると感じました。学生さんの行動力や発想力は、これからも地域と連携するときには強い力になると思います。

青島——「音楽アウトリーチ研究会」の運営をやらせていただいています青島と申します。「アウトリーチ (Outreach)」というのはよく使われる言葉なのですが、「外に出る」という意味です。「音楽アウトリーチ研究会」は教育学部にあります。音楽科の学生が、地域で音楽に触れる機会のない人や老人ホームの人、福祉関係の人、小学校などに訪問したりして、演奏活動をしています。

「来・て・こ」には毎年1回か2回は必ずお世話になっています。自主公演といって、広い会場で地域の人を対象に、自分たちで企画したプログラムを演奏するような活動をしています。この秋に「来・て・こ」でやったときも、100~150人くらいのお客さまに聴いていただきました。今度、大学会館でも、大学生に向けた演奏会を3月18日に行いますので、興味のある方はいらしてください。

小西——大学のネットワークということでは、[Let's 能 プロジェクト] を始めてから、だんだん思い出してきました。実は浜松の静岡文化芸術大学の小岩信治先生と個人的に交流があって、授業で行き来をしているという経緯がありました。そこで参加していた学生が今度、静岡文化芸術大学の小岩先生の研究室を訪れて、^{たきぎのう}薪能を見せてもらうという機会があったという話を聞きました。交流もとても大事な事だと思った次第です。

阿部——ありがとうございました。お話しいただいているうちに、もう終わりの時間になってしまいました。ここで取り上げたのは静岡市の取り組みと静岡大学教育学部の小西先生の研究室を中心にした取り組みですが、たぶん参加者の方のほとんどは人文学部と理学部の学生だと思います。ただ、人文学部にも例えば小二田先生の授業、平野雅彦先生の授業、理学部でいうとサイエンスカフェとか、少し思いつくだけでも、生涯学習という切り口で地域づくりにいろいろ関わるような授業や活動があります。学生さんを中心とした参加者の方々にぜひ実感いただきたいのは、例えば教員になってから地域貢献や市民の生涯学習に貢献できるということではなくて、それ以前に、今までの例でありますように、今の学生のままで十分地域から期待されていますし、いろいろな取り組みで市民の方の生涯学習や地域づくりに貢献できるし、実際されています。しかもそれが、たぶん教育や研究の方にも大きく役立っているのではないかと思います。

とを、ご報告を聞きながら思いました。そんな狙いを持って、この公開シンポジウムをやっていることを受け止めていただければありがたいと思います。

博物館フォーラム

博物館活動と学芸員資格 ——現場の声を聞く——

日時	2012年1月26日(木) 12:45~14:15
会場	静岡大学静岡キャンパス共通教育B棟401教室
報告者	小泉祐紀(静岡市文化財課主査) 鈴木千晶(浜松市楽器博物館学芸グループ職員)
コーディネーター	金子 淳(静岡大学生涯学習教育研究センター准教授)
コメント	高松良幸(静岡大学情報学部教授)

金子(コーディネーター)——今回は「博物館活動と学芸員資格」というテーマで、現場の方の声を聞きながら、学生の皆さんがこれから取ろうとしている学芸員の資格がそこでどう生かされるのか、生かしていくことができるのかを考えてみたいと思います。

学芸員の資格を取ろうとする人は非常に多く、年によって若干違いがありますが、平均すると全国で1万人ぐらいの学生が、毎年、学芸員の資格を取っています。ですから、毎年、学芸員の有資格者数が1万人ずつ増えていることになります。静岡大学でも、人文、理学、教育、情報の4学部で資格を出していて、年間100人以上の学生が学芸員の資格を取って社会に出ています。

ところが、全国で毎年1万人輩出される学芸員有資格者が実際に学芸員として就職できる数は、これも統計によっていろいろ違いますが、100人に満たないと言われていています。これが日本の学芸員の養成制度の最大の問題点と言われているのですが、しかし、学芸員になれなかったからといって学芸員の資格が全く意味がないかというと、そうではありません。博物館の専門職員として働く以外にも、学芸員という資格をいろいろな形で生かすことができます。このことについて現場の方の実際の経験談をもとに考えてみようというのが、今回の趣旨になります。

専門職として学芸員に就職できる人は本当に数少ないわけですが、例えば教育学部の場合であれば、教員の免許を取り、何年間か教師として働いた後に博物館に配属になって、博物館の中の教育普及活動を担うというケースがあります。あるいは、今日お話をいただきますが、考古学が専門の人が市役所に就職し、文化財保護や埋蔵文化財を担当する部署に配属になった場合、博物館ではありませんが、学芸員の資格が生かされる場合もあります。このように、博物館の職員にならなかったとしても、何らかの形で学芸員の資格が生かせる場合があります。

今回ご報告いただくお二方は、いずれも静大出身の方ですが、どういう思いを持ちながら実際に就職をして、そこでどんな取り組みをしながらこの問題について考えてきたのか、今日は議論してみたいと思っています。

文化財保護行政の現場から

小泉 祐紀（静岡市文化財課主査）

■現在に至るまで

今、私が所属しているところは、静岡市役所の生活文化局文化スポーツ部文化財課埋蔵文化財担当というところです。埋蔵文化財、言い換えれば遺跡の保護を主に担当しています。具体的な保護の方法は、基本的には発掘調査による記録保存です。今はスーツを着てネクタイを締めています。普段あまりこういう格好をすることはなく、基本的には作業着で発掘現場に繰り出して仕事をしています。

私が静岡大学に入ったのは1998年（平成10）です。それから人文学部の大学院で考古学を専攻して、2004年（平成16）から静岡市役所に勤務をしています。私が静岡大学に入った当初は、何となく考古学について興味を持っていて、やりたいという気持ちはあったのですが、それほどしっかりとした活動はしていませんでした。しかし就職について悩んだ結果、ぜひこれを一生懸命やってみたいと思うようになりました。それまであまり人生において勉強を真剣に考えたことがなかったのですが、それからは学芸員、あるいは考古学について真剣に勉強するようになり、いろいろな活動に参加するようになりました。

学生時代の具体的な活動は、やはり発掘調査があげられます。静岡大学人文学部の考古学研究室は、だいたい夏にどこかで発掘調査を実施します。私が所属していたときには、藤枝市にある古墳を泊まり込みで発掘していたのですが、それに参加する機会をいただきました。それから、ほかの発掘にも参加したいので、ぜひどこか紹介してくださいと大学の先生にお願いしたところ、宮崎県の陵墓参考地（天皇の陵墓の参考となる古墳）である西都原古墳^{さいとぼる}の発掘調査にも参加しました。また、私の出身が浜松なものですから、浜松市教育委員会で実施していた発掘調査と室内での発掘調査資料の整理作業に、アルバイトとして参加させていただいたこともあります。そのほか、各地で行われていた考古学の研究会にも参加していました。さらに、考古学研究室では静大祭で考古展をやっていますが、その準備にも携わりました。

これらは主に夏休みや冬休みなどの長期の休みを使って活動するのですが、休みがかなりつぶれてしまうのが実際のところ。ただそれは、長い学生時代の中では非常に有効な勉強の時間で、これが今の私の基礎となっていると思っています。逆に言えば、これらがなかったら今のように仕事をするのができなかったかもしれません。学生のときには、まさか実際に発掘の仕事に就けるとは思っていませんでした。運が良かったとか、巡り合わせみたいなのところもあって現在があるのですが、それにしても、これまでの学生時代にやってきた活動が今の基礎になっていると考えています。

■静岡県での学芸員の就職事情

今も就職氷河期という言葉方をしていますが、私の頃も同じでした。2004年（平成16）に大学院を修了してすぐに、運良く静岡市に採用されたのですが、その当時から非常に高い倍率で、本当に運が良かったということも大きいと思います。今の皆さんもそうだと思うのですが、特に公務員の場合などは、一般教養などの勉強を学生時代のうちにしながら就職活動をしていくことになります。

私はあくまで一般行政職、事務吏員という職で静岡市に採用されています。静岡市では学芸員という採用枠はありません。静岡市には登呂博物館という博物館がありますが、そこにいる方々は基本的には事務吏員で、学芸員の資格を持っている人たちです。二十何年前までは学芸員での採用はあったのですが、それ以降は基本的には学芸員採用はないものですから、例えば登呂博物館で働きたいという意思を持っていたとしても、私と同じように静岡市の事務吏員として入るしかないのです。

静岡県内を見渡しますと、この後でお話をされる鈴木さんのいらっしゃる浜松市も学芸員での採用枠は基本的にはなかったと思います。ですから、どうしても一般職で入って、博物館などで働きたい場合には、その中で異動希望を出すということになるわけです。

私も入って3年間は、介護保険課で高齢者福祉の仕事に就いていました。それから3年経って異動希望を出していたのですが、たまたま運良くそれが叶って、文化財課で発掘調査に携わることができるようになったわけです。現在は文化財課に来て5年目なのですが、またこの後どこかへ異動になって、文化財以外の仕事をするようなことも間違いなくあります。もしかしたら次の4月からそうなるかもしれません。そういった一般職ですと、自分の立場が比較的ころころ変わってしまうようで、熱心に学芸員を希望する方にとっては少し不甲斐ない部分もあるかもしれませんが、そこはやむを得ない部分でもあったりするわけです。

■学芸員と一般職

私は一般職という話をしましたが、皆さんは今、学芸員の勉強を一生懸命されていらっしゃると思いますので、学芸員と一般職採用での仕事の違いについてふれておこうと思います（図1）。

学芸員の仕事は、大きくは「調査・研究、収集・展示普及、保存管理」という三つかと思います。文化財課での遺跡の発掘調査など、私が今やっている業務としてあげられるものは右側です。

学芸員	一般職
調査・研究 収集・展示普及 保存管理	業務関連事務 保存管理 展示普及・収集 (調査・研究)

図1 学芸員と一般職の違い

一般職では、まず「業務関連事務」があります。博物館では、何か展示をする時、ほかの博物館から資料を借りてきたりすることがありますが、その時には貸し借りの契約を行います。そうすると、例えば契約書を作ったり、契約をしていいか上司に伺いを立てるといった事務仕事があるのです。そういった仕事は実は非常に膨大です。学芸員として所属している場合には、別に一般事務吏員の人がいて、その人がこのような事務仕事をしてくれて、学芸員の人たちは主に左側の仕事に専念できる環境にある場合もあります。ところが一般職の場合には、その事務仕事をすべてやらなければならないのです。

「保存管理」は、基本的に一般職も学芸員も同じです。

「展示普及」は博物館学芸員は特に重要な仕事ですが、そうでない部署の一般職では、自分たちの仕事を分かってもらうために、なるべくやろうというぐらいのものになります。

「収集」は二重線で消してあります。博物館では物の収集をすることがありますが、私たちのような一般職にいる場合には、積極的な収集は基本的にはやりません。私たちは、どちらかと言えば基本的に発見されたもの、あるいはすでに所有しているものを保管・管理することが主な仕事ですので、新たに何かを収集するという活動は基本的には行いません。

それから下に括弧書きで書いている「(調査・研究)」ですが、これもやはり努力として求められるものではありませんが、率先してやらなければならないものではないのです。ただ私の場合、発掘調査の報告書を書かなければならず、そのときには下準備としてたくさん勉強をしなければならないものですから、なるべく調査・研究はやっていくべきものになります。

ですから、一般職は特に業務関連事務が非常にウエイトが重いということ、調査・研究や展示普及はあまり強く求められていない、そういったところで学芸員と一般職は違ってくるのかと思います。

■文化財保護行政の組織

文化財課はもともと教育委員会に属していました。その後、静岡市の場合には、教育委員会が学校教育に特化する目的のため、それ以外の部門を教育委員会から外してしまいました。ですから、静岡市美術館も教育委員会の中には属していません。今、文化財課や静岡市美術館などは市長部局に所属しているので、一番偉い人は静岡市長になります。教育委員会の中にある場合には、教育長が一番偉いことになります。

ただ、やっている内容は教育委員会の事務業務です。

そしてここが非常にねじれているところなのですが、登呂博物館は現在でも教育委員会の中に残っています。文化財保護法という法律に基づいて業務をやっているのが文化財課で、博物館法に基づいて業務をやっているのが登呂博物館です。博物館法には教育委員会に博物館を置くという内容が記載されているのですが、それに基づいて登呂博物館は教育委員会にまだ残っている格好です。ただ、文化財保護法の事務自体も教育委員会での仕事なのですが、それを補助執行という形でやっています。

最近の市役所は、こういった組織の改正がいろいろとありまして、変な話、こういうものに翻弄されてしまうような側面も持っています。実際のところ、浜松市も静岡市と同じように、文化財の仕事や浜松市博物館も教育委員会から外れるという組織の大改正がここ最近ありました。

■文化財課の仕事

では、静岡市の文化財課はどういう仕事をやっているのでしょうか（図2）。まずは市で指定・登録されている建物、仏像、絵画、カモシカなどの天然記念物の保護・管理を担当する部署があります。そこでは、いろいろな文化財を保護するために補助金を交付する仕事もあります。

私が所属している埋蔵文化財担当は、遺跡の発掘調査、遺跡の取扱いに関連する事務、史跡の整備・保存・管理を担当する部署です。この辺りでは、有名な登呂遺跡のほか、静大のお膝元には国の史跡に指定されている片山廃寺跡が東名の高架下付近にあります。

総務担当が管理している建物の例では、マッケンジー邸があります（図3）。国道150号線を久能からずっと西の方に行きますと、海岸から途中で松林が変わって、海が見えなくなる所がありますね。その付近に建っている白い建物として、名誉市民になっているマッケンジーさんが住んでいた洋風のすごく立派な建物です。もう一つは日本平動物園のすぐ脇に立っているエンバーソン邸です（図4）。意外と奥まっているので気が付きにくいのですが、明治時代に建てられた立派な木造の洋風建物です。

また、それ以外にも文化財保護担当は図5の

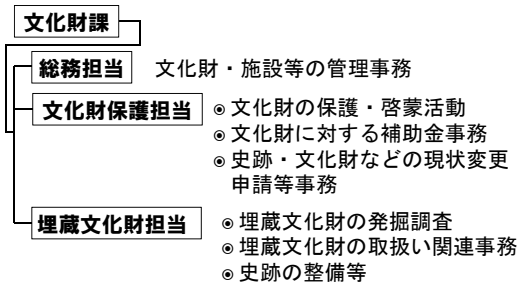


図2 文化財保護行政の仕事（静岡市の例）



図3 マッケンジー邸



図4 エンバーソン邸

指定文化財の種類	国指定 国宝・特別	国指定 重文	県指定	市指定	合計
有形文化財	4	36	79	81	200
建造物・絵画・彫刻・工芸・書跡・典籍・古文書・考古資料・歴史資料					
無形文化財	0	0	0	1	1
工芸技術・技能					
民俗文化財	0	1	8	6	15
有形・無形					
記念物	1	13	11	43	68
史跡・名勝・天然記念物					
合計	5	50	98	131	284

図5 静岡市の指定文化財数



図6 久能山東照宮



図7 草薙龍勢花火



図8 清沢神楽

ような指定文化財を保護して、補助金を交付するなどの事務を行っています。指定文化財は静岡市内全部で284になります。その中で具体例をあげると、最近国宝に指定された久能山東照宮（図6）。そのほか、草薙龍勢花火（図7）、清沢神楽（図8）といった無形民俗文化財などがあります。

■埋蔵文化財担当の仕事

埋蔵文化財担当の仕事は基本的には遺跡の発掘調査ですが、行政の発掘調査は大学などで行われる発掘調査と違って、とにかく時間との勝負です。文化財を保護するといっているのになぜ発掘するのかというと、その後にかしらの開発が行われて、遺跡が消滅してしまう恐れがあるからです。その開発の前に発掘調査をするものですから、開発者としては早く発掘調査を終わってほしい、私たちとしては遺跡を保護したい。そうして私たちはなるべく早く遺跡のデータを記録として残す活動をします。それが行政のやる発掘調査なのです。

私たちが実施している発掘調査は、基本的に壊されてなくなってしまうのが前提です。ですから、時間との勝負の中でも、やはり丁寧に発掘をやって、きちんとした記録として残さなければなりません。

図9では、大型の重機で掘っていて、右で重機に指示している人がいますが、これは実は私です。発掘調査でも大型の重機で上の土をどんどん取って行って、遺跡に関する土が出てきたところでやっと手掘りとなるのです。

今、静岡市駿河区中田はスーパーや薬局、マンションが建ち並びきれいに整備されていますが、図10は、その周辺で発掘調査をしたときの状況です。去年（2011年）私が担当していた調査なのですが、非常に重要な遺跡で奈良時代のお役所の跡です。当時は静大あたりも含めた、ちょうど駿河区ぐらゐが有度郡と呼ばれていて、その有度郡のお役所、有度郡衙の跡と推定されています。

発掘調査を進めていったところ、柱の跡がきれいに並んで出てくる状況が分かってきました（図11）。土の色の違いで、どうもここに柱があったということが分かってきますが、これをしっかりと掘り上げますと、きれいに柱が並んでいるのです（図12）。普通の建物は壁があって、それで上屋が立つのですが、これは真ん中にも柱がありますから、高床になることが分かったのです。

これに柱を立ててみますと、各穴に柱が立って、高床になります。皆さん、奈良の正倉院をご存じでしょうか。ここも実は正倉と呼ばれる建物です。奈良時代のお役所では、租庸調のうち租の税としてお米を取り扱っていたのですが、それを保管する建物がこういう高床だったことが分かっています。こういった立派な建物が発見されることはたいへん珍しいことです。この発掘調査で、この建物が正倉であり、お米を保管する倉庫であることが分かったのです。

私たちは発掘調査で、ただ掘って記録するだけではなくて、それがどういった施設だったのかということをも復元しています。先ほど、一般職では調査・研究はあまり重要視されてい



図9 遺跡の発掘調査



図10 ケイセイ遺跡の発掘調査



図11 ケイセイ遺跡の有度郡衙関連



図12 正倉の発見

ないと言いましたが、こういった復元をするためには、全国各地の調査記録を調べたり、あるいは大学の先生に見てもらったりして、これがどういったものを丹念に調べる必要があります。ですから、実際にはかなり勉強しないと、報告書としてまとめることができないのです。

私たちがやっている仕事はほかにもあります。発掘して出てきた土器などをくっつけたりする作業です(図13)。これはアルバイトの人に来てもらって作業しています。くっつけたものを、今度は図面に記録します(図14)。発掘調査の遺跡や遺物の記録を、最終的には報告書にまとめて、市内の図書館、全国の教育委員会、大学などの研究機関に送ることで、壊れてしまった遺跡の内容を記録として保存する仕事が完了します(図15)。これが私が主にやっている発掘調査という仕事の内容です。

■史跡の保存管理と活用

発掘調査以外にも、いろいろな仕事があります。そのひとつが史跡の保存管理と活用という仕事です。最近きれいになった登呂遺跡には大きな田んぼがあります。その田んぼでお米を作ったりする仕事もやっています。これは史跡を整備するだけでなく、それを活用する仕事です(図16)。

活用という部分ではほかに、『ようこそ登呂ムラへ』という冊子の作成があります(図17)。A5サイズの小さい冊子なのですが、私も携わって作り、イラストなども自分で書きました。こういった登呂遺跡の内容を紹介する冊子を作ったりして、登呂遺跡を極力活用していこうという活動をしているわけです。

実はこの本も作る時には、単に自分たちの思い付きで何となく作ったものではなくて、ものすごい下準備をしています。研究者による検討委員会を開いて大学の先生など有識者に来ていただき、この出土遺物からどんな当時の生活が考えられるか、そういったものを極力史実に近い内容で復元していこうというコンセプトのもとに作ったものです。ですから、復元、推定されている部分は多いのですが、まっ



図13 土器など遺物の洗浄と接合・復元



図14 土器など遺物の実測、図面の作成



図15 報告書の刊行と頒布



図16 登呂遺跡の整備と復元水田の活用



図18 文化財展チラシ



図17 『ようこそ登呂ムラへ』



図19 文化財展展示風景

たこのうそ八百ではありません。

この冊子は登呂博物館ミュージアムショップで、450円で売っています。これは先ほどの仕事の表でいうと、保存管理と展示・普及になってくるような内容です。もしよろしければミュージアムショップでお買い求めください。

それ以外の展示普及活動としては、文化財展という展示会を行っています。総合博物館が静岡市にはないものですから、埋蔵文化財センターと、市役所の本館にある市民ギャラリーを会場にして開催しています。だいたい毎年7～9月にポスターを作って図書館などで掲示をして、宣伝しています（図18）。

専用施設ではないものですから、どうしても小さい展示会になってしまいますが、展示品を並べたり、パネルを作ったりする仕事もあります（図19）。展示の内容や方法については、特に学芸員に関連する講義とか、学生時代に実施していた大学祭での考古展でやっていたことが生かされています。

■自らの行動で将来の自分を設計する

最後に、皆さんの参考になりますように、こうした仕事をする中で考えていることを、いくつかあげたいと思います。私も一般職ですから、またこの先どこかに異動して今の仕事ではなくなってしまうかもしれません。今の仕事はものすごく忙しいです。昼夜を問わず仕事をしたり、家に持って帰って仕事することも本当に多いのです。しかし、一般職でありながらも、やはり学芸員、あるいは考古学に関する仕事に就きたいという思いを持って異動希望を出して仕事をやらせてもらっているわけですから、それをやり続けるためには、やはり次にあげるようなことを常に心掛けながら仕事していかなければならないと思っています。

まず、私の場合は専門が考古学ですから、考古学の勉強は仕事をしながらでも続けています。先ほど（調査・研究）として、あまり職場では重要視されないとはいいましたが、実際のところは調査・研究をしていないと、その仕事の質が上がってこないのです。ですから、その勉強はどうしてもやり続ける必要があります。

そして、仕事内容へのこだわりです。例えば、展示会一つ、あるいは発掘調査一つとっても、何となく無難にこなせば割と簡単に終わる仕事であったりします。ただ、実際に展示会を見れば、これは一生懸命やったものか、手抜きのものかすぐ分かってしまいます。それは、やはり担当者の能力が試されるものなのです。発掘調査でも、一生懸命やった発掘調査かどうかは、発掘調査報告書や、調査現場を見ればすぐに分かってしまうのです。ですから、担当者は適当にやっていると思われることもあり得ます。そうならないよう、自分がやりたいと思ったものについては、とにかく質を上げる努力をする、勉強することが非常に重要だと思います。

あくまで私は事務職ですので、事務仕事は絶対に手は抜けません。やはりトラブルのもとになってしまいますし、業務の主体は事務だからです。ですから、調査・研究という部分だけではなく、仕事への力配分を考えて、事務仕事をしっかりやらなければならないというところも意識しているところです。

最後に一番重要なところですが、まずは仕事が好きであることです。自分の興味のある分野ですから、それについてはとことんこだわりを持ってやり遂げる。嫌いになってしまえば一生懸命にやれませんか、まず好きであることが重要だと思います。

自分が日ごろ思うのは、学生時代にやってきたことが今すごく生かされているということです。それがなければ、もしかしたら文化財課に来て、何の役にも立たずすぐに他の課に異動させられる可能性もあったと思います。逆にこれだけは頑張ろうと意志を持って仕事をしていれば質も上がるし、あの人がいてくれた方が助かるとなれば、この先他の課へ異動してもまた文化財課に呼んでもらえるかもしれません。

ですから、自分の行動が将来の自分を設計する、つまり、またこの仕事に関われるチャンスをもたらるかどうかは自分の行動次第なのです。学芸員という専門職での採用は1%にすぎませんが、そうでなくても何かしらの形で関わられたとき、そこで一生懸命取り組むことは、その後もその仕事に長く関わりたいという将来像にも大きく影響する部分なのです。ですから、学生のときにはそういう意思を持って勉強をし

てもらいたいと思います。やはり間接的にでも、何か関わることができたときには、それは自分の力を発揮する大きなチャンスだと思って努めてもらいたいと思います。

報告 2

大学で学んだこと・博物館で学んだこと

鈴木 千晶（浜松市楽器博物館学芸グループ）

今日私がお話しする内容は、①大学時代どのようなことをしていたのか、②大学院でとても貴重な活動をしたこと、③楽器博物館でどのような仕事をしているのか、という3点です。仕事を大きく分けると、お客さまの見える展示室での仕事と、お客さまが見えない事務所での仕事があります。

■大学における就職活動

私は、2009年に静岡大学教育学部芸術文化課程音楽文化専攻を卒業しました。その後、大学院に行き、教育学研究科音楽教育専修に在籍し、修了しています。修了は2011年3月ですから、就職して1年目です。

就職活動は、大学3年の秋から会社のことや博物館のことを自分なりに少しずつ調べ始めてきました。小さいころから音楽に関わる仕事ができたらいいと考えていたので、学校の教員やピアノを演奏する仕事、音楽教室講師、舞台ステージ制作会社、テレビ局、ラジオ放送局、音楽関係企業など、いろいろなところに興味があったので、手当たり次第見ていました。

学芸員や博物館については、具体的には大学生になってから知りました。皆さんと同じように、私も博物館の授業を金子先生から受けていましたので、そこで初めて知ったこともたくさんあります。博物館で仕事したいと具体的に思ったのは、きっと現場に行って実習をしたからだと思います。インターンシップでは、このすぐ近くにあるグランシップで半年ぐらい、音楽のイベントのお手伝いをしました。また、博物館実習では、今勤めている浜松市楽器博物館に2週間ほど行きました。普段はお客さんとしてしか博物館に行ったことがなかったので、実際に博物館がどのように運営されているのか、実習に行って初めて知りました。この実習が私にとっては一番大きなきっかけだったと思います。

■今役立っている大学院の活動

大学院での活動の一つに、インドネシアの民族楽器ガムランの演奏活動がありました。皆さんは、ガムランという楽器をご存じでしょうか。青銅の打楽器です（図1）。金属をたたいて弾きますが、とても不思議な音がする楽器です。このガムラン一式が、実は静岡大学にあります。2008年度に大阪音楽大学から、ガムランの一式をそのまま静岡大学が譲り受けました。

実際に音を出すことができる非常にいいコンディションの楽器で、とても貴重なものです。2008年度から音楽科の小西潤子先生と学生が協力して演奏楽団を結成して、コツコツと演奏しています。静岡大学の文化祭や、2009年に焼津で行われた「国民文化祭2009」にも楽器をトラックで運んで演奏しました。そのほかには、特別支援学校の生徒さんが大学にいらっしやって、一緒にガムランをたたいて教えたり、どんな音がするのか生徒さんに聞かせたりしました（図2）。ワークショップなども行って、お客さまに実際の音を出してもらって、とても不思議な響きを味わってもらいました。



図1 ガムランの演奏風景



図2 大学でのワークショップ

浜松市楽器博物館にもこのガムランが展示されており、時々中学生などが課外授業でやって来ます。どんな音をするのかたいてみて、とても珍しい音がすると言って喜んで帰っていきます。その中学生が初めてガムランの音を聞いたときと同じ気持ちを私もそのころ感じていたので、中学生が博物館にやって来たとき、どのように対応したらいいのかとか、どのように授業を進めていったらいいのか、このときの体験が生かされていると思います。

二つ目ですが、2010年に大学院の音楽専修のみんなと小西潤子先生とスウェーデンへ海外訪問しました。スウェーデンの音楽大学と教育大学を訪問して、その学生さんや文化政策を担当している議員さんと実際にお話をしました(図3)。私たちは日本の音楽を紹介しようということで、日本の音楽をテーマにしたコンサートを開き、「さくらさくら」や「荒城の月」を和服で披露しました(図4)。

私が驚いたのは、日本でも有名なアニメや漫画がヨーロッパでもたいへん人気があったことです。そこで私たちは、「もののけ姫」の歌を歌い、「アンパンマン体操」を一緒に踊りました(図5)。皆さん知っていてとても驚いたのですが、そんなことで音楽交流もしました。

このようにアジアやヨーロッパの音楽文化を大学院2年間で経験することができたわけですが、アジアでもヨーロッパでもそれぞれ生活スタイルは違いますし、考え方も違ってきます。ですから、いろいろな国の考え方、価値観が音楽にも非常に表れていると思います。音の響きも違いますし、楽器をどういうときに演奏するのか、材料がどんなものでできているのか、そんなことを博物館に就職する前に少し経験することができて、とてもうれしく思いました。

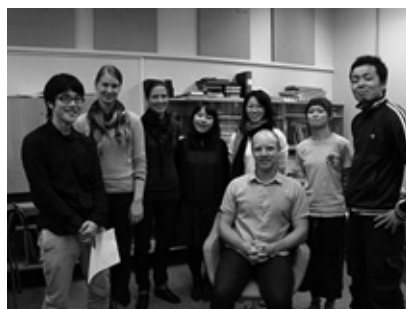


図3 スウェーデンの教育大学を訪問



図4 和服でコンサート



図5 アンパンマン体操

■浜松市楽器博物館について

次に、浜松市楽器博物館についてご紹介します。私は浜松市楽器博物館の学芸グループに勤めています。浜松市楽器博物館は浜松市文化振興財団という財団が運営しており、この財団が浜松市から指定管理を受けています。指定管理という言葉は皆さんも分かると思いますが、この財団は浜松市内に11ヶ所の施設を管理しています。例えば浜松駅前にある大きな茶色いビル、アクトシティ浜松もそうです。そのすぐ隣に楽器博物館があり、ほかにも浜松科学館、浜松こども館、浜松文芸館などを管理しています。

音楽の博物館や楽器博物館というと、私立の大学や付属の博物館、あるいは個人の方のコレクションを集めた個人の資料館がたくさんあります。ですが、この楽器博物館は浜松市という地方公共団体が公立の博物館として建てたものです。公立の博物館は日本では唯一ここのだけで、浜松市が初めての試みです。大阪の国立民族学博物館(民博)にも楽器がいくつか展示されていますが、民博では民族学の研究資料として楽器が置かれています。それに対して楽器博物館は楽器を通して世界の音楽や人々の文化を知ってもらうことを目的としていますので、あくまでも楽器が主役の博物館となっています。

■楽器博物館ができるまでの流れ

なぜ浜松に楽器博物館ができたのでしょうか。浜松市周辺は明治時代から西洋の楽器製造がたいへ

ん盛んでした。今でも浜松市に大手楽器メーカーの本社がたくさんあります。例えばYAMAHAです。YAMAHAの創業者は山葉寅楠と言います。もともとは時計や医療の機械を修理する職人だったのですが、浜松市の小学校にあったオルガンを修理したことがきっかけで、明治になって国産のリードオルガンの生産を始めます。それがきっかけで、今の大きな楽器メーカー、YAMAHAがあるわけです。そのほかにも、河合小市さんが設立した河合楽器製作所（KAWAI）、電子楽器で有名なRolandなども浜松市に本社があります。

それまで浜松は「楽器のまち」として有名でしたが、1965年（昭和40）になると浜松市は楽器づくりだけでなく、「音楽のまち」として文化政策を進めていきます。今では市民も参加できるイベント、駅前でのコンサート、浜松国際ピアノコンクールなどを行っています。

そして1994年（平成6）になると、「音楽のまち」のシンボルとして、大ホール、中ホールのある「アクティシティ浜松」が浜松駅前に完成します。そしてその一角に1995年（平成7）4月、浜松市楽器博物館がオープンして、今年で開館17周年を迎えました。

では、ここで楽器博物館の展示室を少し紹介したいと思います。楽器博物館は1階と地下1階の2階建てです。展示室には約1,300点の楽器が常時展示されています（図6）。展示室以外にも地下の収蔵庫にたくさん楽器や資料がありまして、それらを合わせると約3,200点以上の資料を保管・管理しています。

展示室は国や地域ごとに分かれていて、1階には日本の楽器、アジアの楽器、電子楽器、初期国産の洋楽器、YAMAHAやKAWAIが作った昭和のころのピアノもあります。地下にはヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、オセアニア、そしてヨーロッパの鍵盤楽器の部屋に分かれています。それぞれの楽器のそばに、展示されている楽器の音が聞けるヘッドフォンや演奏の映像があり、合わせると約130ヶ所以上で楽器の音を聞くことができます。

展示室の楽器はすべて触ることはできないのですが、体験ルームの部屋の中の楽器は実際に音を出して遊ぶことができます。お子さんだけでなく、大人やお年寄りもたいへん楽しんで帰られます。そこにはモンゴルの馬頭琴、インドネシアの楽器、アフリカの太鼓、そして日本でも昭和のころの懐かしい足踏みオルガンも置かれています（図7）。

図8は、私たち職員が手作りした楽器です。塩ビ管を使っていて、長さが短いものから、長いものまであります。塩ビ管の入口をゴムのへらでたたくのですが、とてもおもしろい音がしますので、ぜひ博物館に来たときはたいてみてください。



図6 楽器博物館の常設展示



図7 体験ルーム



図8 職員が制作した楽器

■楽器博物館での仕事

私は就職して1年目ですからまだ新人なのですが、私が1年目の今、どんなことをしているのか参考にお聞きください。

展示室での仕事は、まず来館者の対応です。来館者から浜松市について聞かれたり、楽器についてこれはどんな音がするのか、この材料は何でできているのかと、急に聞かれますので、聞かれて困らないようにいつも少しずつ勉強をしています。

あとは展示室の楽器が触られていないか監視をしながら、破損や故障がないか巡回します。当館の展示

品のほとんどはガラスケースなどに入っておらず、露出されている露出展示です。ですから、楽器をさまざまな角度から立体的に見ることができるようになっています。後ろから回って見ることもできます。非常に近い距離で楽器を見ることができ、楽器の中までのぞくこともできます。このような歴史的なたいへん古い資料を公開するという意味ではとてもいいのですが、逆に近すぎて簡単に触ってしまいますし、ぶつかったりすると壊れてしまいますので、資料を良い状態でこれからも保存するという点では、とても危険です。私たち職員も楽器を扱うときには、必ず手袋をはめていて、勤務中は常に手袋を持っています。

博物館には歴史の長い、古い資料を公開する役割もありますが、収集してきた資料を大事に保存・管理して、後の世代に良い状態のまま残していく役割もあります。ですから、展示室で楽器の中までじっくり見てもらうのはとてもうれしいのですが、楽器に触ったり、寄り掛かったりしないように、私たちが注意を払っているのです。

展示室での仕事では、楽器のデモンストレーション（演奏と解説）も行っています。デモンストレーションは毎日1時間に1度行っています。朝9時半から開館していますので、毎日6〜7回ほど、職員で交代して演奏と解説を約10分間行っています。

展示室ガイドツアーは毎週日曜日だけ行っていて、午前と午後いくつかテーマに沿って、楽器の演奏と解説を約30分間行っています。例えば、楽器の歴史について、その当時活躍していた作曲家の曲を演奏しながら、こんな音がしますと紹介したり、身近な鍵盤楽器であるピアノがいったい何年前にでき、発明した当時から現在のピアノになるまでどのように変化していったかなど、時代を追って展示品を紹介しています。

また、普段では文献や資料や写真でしか見ることのできない楽器が博物館には置いてあります。お客さんとの距離がとても近いので、内部がどのようなになっているのか細かいところまで実物を見ることができます。さらに、われわれ職員が大事に壊れないように丁寧に扱って演奏もしますので、何百年も前の楽器の音を実際に聞くこともできます。

図9の写真で紹介している楽器はチェンバロという楽器で、1646年、今から360年ほど前にイタリアで製作されたものです。とてもお客さんが近いですので、いつも緊張しながら紹介しています。

ほかにもいくつか鍵盤楽器があります。私も今勉強しているところなのですが、少し紹介したいと思います。図10もチェンバロという楽器です。作られたのは1765年でフランス製、フランス革命が起きるよりも前に作られたものです。製作家はブランシェ2世とって、当時王室御用達の工房の職人でした。現存しているのはたった数台ということで、その何台かのうちの1台が日本の浜松市にあるのです。

当時のチェンバロという楽器は、王様、貴族などごく限られた一部の人だけが見ることのできる楽器でした。金色に輝いてとても豪華な装飾や絵が描かれています。中でも珍しいのは、右側の写真を見ると分かるのですが、鍵盤の色が今の楽器とは逆に白と黒が反転していることです。この当時はこの色の組み合わせもありますし、今のような白鍵と黒鍵の組み合わせのものもあります。

次はピアノですが、図11はピアノという楽器が誕生した当時



図9 チェンバロ (F.マルキオーニ製作/1646年/イタリア)



図10 チェンバロ (ブランシェ2世製作/1765年/フランス)



図11 初期のピアノ (1700年ごろ/イタリア)

の復元品です。ピアノが発明されたのは1700年ごろ、今から300年ほど前のイタリアです。楽器のすぐ後ろに小さな絵があるのですが、あの人ピアノを発明したといわれる、バルトロメオ・クリストフォリという人物です。彼は生涯に数台ピアノを製作したのですが、今も現存しているのは世界にたった3台で、ドイツ、イタリア、アメリカの博物館に置かれています。また、音の出せる状態でないものもあることから、当館がそれら3台を調査・研究して1台復元をしたものです。実際に音を出して演奏できますが、今のピアノとは一味違う音色がします。そして大きさも今のピアノよりも小さく、軽く、繊細にできています。それら3台のうち、後にほかの人によって手が加えられてしまって、既にクリストフォリのオリジナルではなくなっているものもあります。

図12は縦型ピアノの初期のものです。現在、縦型ピアノというと、アップライトピアノを置いているのをよく見ると思います。そのアップライトピアノが普及するよりも前の初期のころのものです。とても豪華な装飾がされています。中でも一番右側にあるピアノは、見た目がある動物に似ているということで、その名前が付けました。とても首の長い動物なのですが、金色のフレームの部分がキリンの首に見えることからジラフピアノ（キリンピアノ）という名前が付いています。色使いや彫刻もたいへんきれいですから、当時は楽器としてだけではなく、家具や調度品としての役割も大きかったそうです。

なぜ縦型にピアノをしたのかということ、グランドピアノに比べると場所を取らずに、小さなお部屋、限られたスペースに置きやすい、そして値段もいくらか抑えることができるからです。最初にお見せしたチェンバロは貴族が楽しんでいたのですが、そこからだんだんと一般の方にも音楽、楽器が広まっていった、このような省スペースを図った楽器も作られ始めたということです。

楽器から見えるのは、音楽のことだけではありません。例えば、産業、美術、彫刻なども分かります。楽器に彫刻がされていますし、当時どのような技術や彫刻がはやったのかも、楽器を見て分かります。あと植民地との貿易です。例えばチェンバロなどはヨーロッパで使われていた楽器ですが、素材にヨーロッパにない木材、アフリカや東南アジアでしか生産できない木が使われていたりしますので、植民地から手に入っていた事実も楽器を見て分かります。

また、アフリカの太鼓などは顔が付いています。図13はインドネシアの楽器ですが、鬼のような顔はインドネシアの神様と言われています。アフリカなどでは、貝殻や木の実をそのまま東ねて足首、手首に付けてガラガラと鳴らす、自然の素材をそのまま生かした楽器があります（図14）。

チェンバロも木の実をそのまま使った楽器もその国ではとても愛用されていますので、どちらの国が優れていて、どちらの国が劣っているということでは決してありません。その国独自の文化を、どちらも素晴らしいということで、平等な目線でお客さまに紹介するのが私たちの目標です。ですが、その考えを一方的に押し付けてしまうのは良くありませんので、直接言葉にして伝えるのではなくて、デモンストレーションのときに一つ一つを丁寧に紹介することを心掛けています。



図12 縦型ピアノ（19世紀ごろ／ヨーロッパ・アメリカ）



図13 インドネシアの楽器



図14 ガラガラ

■事務所での仕事

次は事務所での仕事です。事務所と展示室を毎日行き来しているのですが、事務所では博物館を運営する上で大切な仕事がたくさんあります。まず電話対応です。1日に何件も電話がかかってきます。団体の予約や楽器に関する質問を受けています。来館者は静岡県内や浜松市内だけではなく、県外や中には外国からの観光でいらっしゃる方もいます。時には英語での接客も求められます。

あと小学校・中学校・高校などの課外授業もありますし、議員さんが視察に来ることも頻繁にあります。小学生に対して楽器のことを説明するときと、政治家の方に楽器を説明するときでは、話し方や表現も違ってきますので、その方が何を知りたくて、どう私たちが説明したら分かってもらえるか、そのときどきで対応しなければなりません。

楽器に関するお問い合わせは、一般の方からもたくさんきますが、新聞社・出版社・テレビ局からもよくきます。私がつい最近受けた電話は名古屋のテレビ局からだったのですが、トルコの歴史についての質問でした。トルコの民族楽器でサズという弦楽器があります(図15)。そのサズの成り立ちについて、何年ごろできて、どのようにして作られて、どんな人が演奏していたのか、そして、楽器のことが分かる遺跡などはトルコにあるかという電話が急にかかってきたのです。その場ではもちろん正確には答えられませんが、しばらく時間をいただいて、自分でいろいろ調べて後日答えました。その都度、その都度、まだ知らないことがたくさんありますので、こういったことがきっかけでいろいろなことを調べているところです。



図15 サズ(トルコの弦楽器)

■各種事業の準備

ほかに、各種事業の準備をしています。常設展に加えて、年に何度か特別展や企画展もしています。博物館以外の外部から展示品をお借りすることもあって、期間限定で公開しています。

ちょうど今月からは企画展「写真で見るガリフナの音楽と踊り」を開催しています(図16)。写真と文章のパネルが何枚も並んでいますが、これは私たちが写真を拡大、印刷して、パネルをカッターで切り張りして作ったものです。もっと大きな何メートルもある巨大なパネルもありますので、張り合わせるときに少しずれただけで、後になってどんどん大きくひびいてしまったり、使い物にならずに一から作り直すことも多くあります。手先が器用なことが求められています。



図16 企画展「写真で見るガリフナの音楽と踊り」

その他、小さな細かい仕事、作業もたくさんあるのですが、大きくて重いものを運ぶことも毎日あります。例えば500kg以上あるグランドピアノを移動するとき、とても古い楽器ですし、歴史的にも貴重なものですから、なるべく台車に頼らずに、私たち若い職員が手で移動をさせています。ですから、力仕事も毎日たくさんあります。

レクチャーコンサート、イブニングサロン、講座、ワークショップなどもあります。世界各国の楽器をテーマにしたコンサートも行っています。そして講座やワークショップでは、珍しい国の楽器を1人1台ずつ手に取って、音を出すことができます。

私は今勤務1年目なのですが、先輩職員は博物館の職員からの視点になりがちですから、特に子どもが感じる疑問は1年目の新鮮なうちが一番気付きやすいそうです。新人から見える視点を生かすということは意識していますが、もちろん気付いたことがあれば何でもすぐに先輩職員に聞くようにしていますし、こういうことを勉強したらいいとか、こういう本を読んだらいいということを、いつも先輩からアドバイ

スを受けています。

楽器を紹介するときに、専門用語や難しい言葉がたくさんあるのですが、それを初めて聞いた人でも分かる表現、子どもでも、お年寄りでも、音楽を知らない方でも、誰でも分かりやすい言葉に置き換えるのが、簡単なようでとても難しいことです。

■こだわりを持ちアンテナを高く張る

学生の皆さんはこれから卒業の論文を書いたりしながら就職活動をしていくと思いますが、どんな仕事をするのか、将来こういうふうになりたいという自分なりのこだわりや、これだけは譲れないという軸を持って、就職活動をしてほしいと思います。

さらに、情報のアンテナを高く張って、いろいろなことを取り入れるといいと思います。中には学芸員、博物館、文化施設で就職したい人もこの中にいると思いますが、私の場合は当時、施設によって採用時期や採用人数がかなり違って、卒業する直前の年明けの1月や2月になって採用試験を行うところもたくさんありました。ですから、少し興味のある施設があったら、毎年どの辺りに募集をしていて、何人ぐらい採用するのかなど事前につかんでおくといいと思います。私も実際にいくつか博物館施設に直接電話をかけて、今年はいつごろ採用があるのか、何人ぐらい採用するのかを事前に聞いたりしました。これから卒業までの間、わずかだと思いますが、時間を大切に有意義にお過ごしください。

ディスカッション

高松——鈴木さんはまだ1年目、小泉さんはベテランの中堅ということになると思いますが、それぞれ学芸員の資格を取ることに、自分が好きな分野である考古学、あるいは音楽に関する仕事を求めた結果、学芸員的な仕事に就かれていますと理解しました。

小泉さんは最後に、自分でやりたいことを自分で見つけて、それに対して一生懸命努力をしてほしい、とおっしゃっていましたが、その努力は、単に勉強するだけではなく、現実には自分の好きな領域がどのように動いていくかを探っていくという努力であると思います。

学芸員という専門職を取り巻く環境は、今、非常に厳しい状況があると思います。まずお尋ねしてみたいのですが、鈴木さんの今の身分は常勤の職員ですか。それとも契約による雇用ですか。

鈴木——立場としては嘱託職員です。

高松——静岡県内では、正規の学芸員が専門職の職員として雇用されにくいという現状がありますが、このことについてそれぞれ少しコメントいただければと思います。

小泉——一般職でいいのか、専門職でいいのかというところだと思うのですが、私の個人的な気持ちとしては専門職の方がいいのではないかと考えています。静岡県内でみますと、静岡市や浜松市といった、いわゆる政令市、大きな都市では一般職での採用が多く、それ以外の小さな自治体では専門職で採用するという傾向が多いように思います。

一般職ですと、やはり先ほど申し上げたように、人事異動でその職から離れなければなりません。しかし、一般職であっても、その職についているときには、政令市ですからほかの市町以上の仕事の質が求められます。ところが、一般職であるために、専門の勉強の時間がなかなか取れなかったりする。そういった中でも同じような仕事をやっていかなければいけないという意味では、非常に苦しい立場であったりするので、ですから、小さな市町に比べると、人一倍努力をしなければ同じだけの仕事ができないという現状があります。

つまり、その仕事だけをずっとやっていくという意味では、小さな市町の方がやりやすい部分もあったりするかもしれません。そういった面で、大きな都市での一般職の難しさを感じています。

鈴木——楽器博物館では今、正式な職員の募集はほとんどありませんので、私も嘱託職員として勤めています。期限もありまして、何年間か更新した後に次の職場を探す先輩の方もたくさんいらっしゃいます。非常に残念だと思うのは、任期があるということで、何年かけてこの勉強をしたり、何年後にこういうことをできるようになりたいという目標がとても立てにくいということです。自分の覚えてきた仕事を次の後輩たちに伝えていくという点で、入れ替わりが早いのがとても残念だと思います。いろいろなことを勉強して、もっともっと吸収したいという気持ちもありながら、いつか去るかもしれないわけです。先輩から仕事を教わり、そして後輩に仕事を教えていく。後輩を育てる時間をじっくり取ることで、常に次の新しい職員が代々継承していくということはとても重要なことだと思います。

あと、職員の人数もたいへん少ないので、1人で受け持つ仕事の量はとても多く、とても忙しいです。もう少し人数がいれば、分担して深くやれるのではないかと思います。

高松——多くの人は学芸員の資格を取っても学芸員になれないという現状があります。しかし、実際に学芸員の仕事を専門職としてされている方は、普通の会社に入って、あるいはお役所の職員として普通に仕事をしている人よりも、苦勞しながら、自分がやってきたことを多くの人に向かって生かしていこうとい

う努力をしています。これから学芸員の資格を取ろうと思っている皆さんは、学芸員や博物館が今どういう状態に置かれているかとか、あるいは博物館は社会の中でどういう役割を果たしているのかということを知って、ぜひこういった方々をサポートしてあげてほしいと思います。社会の中で博物館はこんなに役に立つ仕事なのだ、あるいは学芸員はこんなに頑張っているのだということを、外部から応援していただくことが、学芸員の資格を取っても学芸員にならない人たちが、その資格を取った意義を見出す一つのきっかけになるのではないかと思います。

事業報告

2011年度生涯学習教育研究センター事業の実施報告

1 公開講座

■生涯学習教育研究センター

講座名	開催日	テーマ	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
体験・大学の化学実験	8/6・7	水の分析	機器分析センター准教授・近藤満	原則として中学生以上(小学生は保護者の同伴が必要)	無料	静岡大学静岡キャンパス	15	13
〈いのち〉と環境を考える	9/10	海のしくみと駿河湾深層水	理学部講師・宗林留美	一般市民	1,400	沼津市民文化センター	50	39
	9/24	遺伝子技術のゆくえと〈いのち〉の現在	人文社会科学研究科教授・松田純					
	10/15	いのちの森を守る闘い～南方熊楠の思想～	大学教育センター教授・芳賀直哉					

■人文学部

講座名	開催日	テーマ	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
終末期医療の「いま」と「これから」～ヒューマンケアの視点から～	5/24	最期をどう支え、どう迎えるのか?	人文社会科学研究科教授・松田純	一般市民	1,700	アイセル21(葵生涯学習センター)	30	51
	5/31	声のもつ力	NPO法人ヒューマン・ケア支援機構副理事・上藤美紀代					
	6/7	終末期医療と法	人文学部准教授・神馬幸一					
	6/14	物語とケア	人文社会科学研究科教授・南山浩二					
	6/21	子どもにとっての〈最善〉と終末期医療	人文社会科学研究科准教授・堂園俊彦					
	6/28	終末期医療における心理的サポート	人文社会科学研究科教授・笠井仁					
英語で自分の「体験談」を書きましょう!	5/28	いろいろな体験談を読もう!	人文学部教授・スティーヴ・レッドフォード	英検準2級以上または同等レベル以上の方(高校生以上)	2,500	静岡市産学交流センターB-nest	12	10
	6/18	自分の話の内容を考えよう!						
	7/9	書いた話に対するアドバイスをもらおう!						
	7/30	発表会をやりよう!						

■教育学部

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
安心登山のための読図とナビゲーションスキル(中級編)	5/8	教育学部教授・村越真 ブロードベンチャーリーダー・宮内佐季子	登山・アウトドア活動を行う一般市民	4,000	静岡大学静岡キャンパス	20	12
安心登山のための読図とナビゲーションスキル(秋期・基礎完全マスター編)	10/3・17・31、11/14	教育学部教授・村越真 オリエンテーリング日本代表・松澤俊行		6,000	静岡大学静岡キャンパス	20	17
ノルディックウォーキング&エクササイズと里山自然体験	11/8・15・22、3/13・27	教育学部教授・杉山康司 教育学部准教授・祝原豊 名誉教授・中野偉夫 静岡市非常勤嘱託・重岡廣男	メディカルチェック等で歩くことを制限されていない健康な方	10,500	静岡大学静岡キャンパス	30	7

■教育実践総合センター

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
体育授業としての卓球指導法 研修会	8/6・7	教育学部教授・吉田和人 NPO法人卓球交流会・山田耕司	中学校や高校など において卓球の授 業を担当する教員	1,000	静岡大学静岡 キャンパス	35	12
小学校外国語活動スキルアップ 講座Ⅳ	8/19	教育学部准教授・矢野 淳	静岡県内の小・中・ 特別支援学校教員	500	静岡大学静岡 キャンパス	25	12

■農学部

講座名	開催日	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
食品分析のための高速液体クロ マトグラフィー基礎講座	9/14～ 9/16	農学部准教授・徳山真治	高校で化学Ⅰまたは Ⅱを履修した者	15,000	静岡大学静岡 キャンパス	15	6
森林(もり)のめぐみ ～地球環境を救うもの～	10/8	農学部教授・水永博巳 農学部教授・土屋 智 農学部教授・安村 基 農学部教授・西田友昭	中学・高校教員およ び一般市民	無料	静岡市産学 交流センター B-nest	40	16
バイオテクノロジー体験 ～茎頂培養をしてみよう～	11/3	農学部准教授・河原林和一郎 農学部助教・浅井辰夫 農学部助教・八幡昌紀 農学部技術専門職員・増田幸直	中学生以上	800	静岡大学農学 部附属地域フ ィールド科学教 育研究センタ ー	16	3
家庭果樹を楽しもう!! ～果樹のせん定教室～	2/25	農学部技術専門職員・西川浩二 農学部技術専門職員・成瀬博規 農学部技術専門職員・成瀬和子	高校生以上	1,500	藤枝フイ ールド	10	15

■情報学部

講座名	開催日	テーマ	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
情報学アラカ ルト講座2011	11/12	文明と文化～大陸から少し離れた島国・ 日本の特異性～	情報学部教授・矢野正俊	一般市民	無料	静岡大学 浜松キャン パス	各50	51
		温故知新の経営学～知識と文化の伝承～	情報学部教授・田中宏和					
		Green by ICTによる静岡大学スマートキャン パス化	情報学部准教授・峰野博史					

■キャンパスミュージアム

講座名	開催日	テーマ	講師	対象	受講料	会場	定員	実数
静大キャンパス探訪 ～生物調査隊とキャン パスの自然を観察 しよう～	8/6	夏に観察できる植物と鳥類	教育学部教授・小南陽亮	一般市民、学 生、小中高生 (中学生以 下は保護者同 伴)	無料	静岡大学 静岡キャン パス	20	45
	8/20	夜の静大キャンパス～動物た ちの生態～	教育学部技術職員・新妻廣美					
	8/27	静大キャンパスの動物	農学部学術研究員・加藤英明					

2 静岡大学創立60周年記念事業を継承した連携講座

■静岡大学・読売新聞連続市民講座「地域から広がる可能性」

回	日時	タイトル	講師	参加者
1	5/14	多文化の集う地域から対話を	教育学部准教授・宇都宮裕章	108
2	6/4	変容する家族と地域	教育学部准教授・冬木春子	107
3	7/2	地域福祉と男女共同参画社会	情報学部教授・笹原 恵	89
4	8/6	ICT(情報通信技術)の進展と地域社会～絆の再生と創造～	人文学部教授・伊東暁人	104
5	9/3	若者の居場所	人文学部准教授・荻野達史	70
6	10/1	静岡の過疎山村・限界集落における地域づくり実践報告～縁 側お茶カフェ・買い物ツアー・福祉朝市・お茶ツアー等々～	名誉教授・小櫻義明	95
7	11/5	地産地消と我が国農業	農学部准教授・柴垣裕司	86
8	12/3	地域から考える防災とジェンダー	教育学部教授・池田恵子	73

- ・会場：静岡市産学交流センター（B-nest）6階プレゼンテーションルーム
- ・参加費：無料
- ・主催：静岡大学生涯学習教育研究センター、読売新聞東京本社静岡支局

■静岡大学・中日新聞連携講座「3.11以降をどう生きるか～地域の再生と絆づくりのために～」

回	日時	タイトル	講師	参加者
1	10/8	震災後の再生可能エネルギーへの期待と省エネ	工学部助教・松尾廣伸	34
2	11/12	緩い絆創りで地域を元気にする～社会起業家「ブリッジパーソン」の役割～	静岡大学客員教授・一般社団法人絆塾代表理事・相原憲一	40
3	12/10	東日本大震災を起こした地震とその影響～「大地動乱の時代」をどう生きるか～	教育学部教授・防災総合センター副センター長・小山真人	64
4	1/7	東日本大震災と災害ボランティア活動～山元町の写真洗浄・複写プロジェクトより～	情報学部准教授・吉田 寛	36
5	2/18	地域の絆でリスク社会を乗り越える	情報学部教授・岡田安功	31

- ・会場：[第1・3・4回] アクトシティ浜松研修交流センター
[第2・5回] 静岡大学浜松キャンパス

- ・参加費：無料
- ・主催：静岡大学地域連携協働センター、中日新聞東海本社
- ・企画協力：静岡大学生涯学習教育研究センター

■静岡大学・コープしずおか連携講座「<いのち>と環境を考える～共生社会を目指して～」

タイトル	講師	沼津会場		静岡会場		浜松会場	
		実施日	参加者	実施日	参加者	実施日	参加者
海のしくみと駿河湾深層水	理学部講師・宗林留美	9/10	31	10/1	9	12/10	13
いのちの森を守る闘い～南方熊楠の思想～	大学教育センター教授・芳賀直哉	10/15	19	11/5	14	2/18	16
遺伝子技術のゆくえと<いのち>の現在	人文社会科学研究科教授・松田 純	9/24	27	12/3	13	1/7	16

- ・会場：[沼津会場] 沼津市民文化センター [静岡会場] 静岡市産学交流センター（B-nest）
[浜松会場] アクトシティ浜松研修交流センター（12/10・1/7）、静岡大学浜松キャンパス（2/18）
- ・参加費：無料
- ・主催：静岡大学生涯学習教育研究センター、コープしずおか

3 主催事業

①公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習⑭」

自治体と大学間ネットワークとの連携、学生の参画による生涯学習・地域づくりの実践事例を取り上げながら、生涯学習のための学習ネットワーク構築の可能性を検討した。

- ・日時：2011年12月20日（火）12:45～14:15
- ・会場：：静岡大学共通教育A棟301教室
- ・プログラム：
 - ①「自治体と大学ネットワークによる生涯学習の展開～静岡市・市民大学リレー講座を中心に～」報告者：岡本 恵（静岡市生涯学習推進課）
 - ②「音楽活動を通じた地域連携の取り組み」報告者：小西潤子（静岡大学教育学部教授）
- ・コーディネーター：阿部耕也（静岡大学生涯学習教育研究センター長）
- ・参加費：無料
- ・参加者数：72人

②博物館フォーラム「博物館活動と学芸員資格～現場の声を聞く～ Part.2」

博物館の業務は、主に学芸員資格を有する専門職員によって担われている。ところが、資格を取得しても実際に博物館に就職できる割合はごくわずかで、学芸員資格を生かせるような仕事に就くのはきわめて厳しい状況にある。一方、専門職としての学芸員だけではなく、一般事務として採用され博物館に配属されている場合や、学校の教員が指導主事のような形で博物館に派遣されている場合など、現実には、さまざまな形で学芸員資格が活かされ、博物館を支えている。そこで、静岡大学で学芸員資格を取得し、さま

さまざまな形で博物館と関わりを持ちながら仕事をしている人々をお招きして、どのような経緯で就職し、現在どのような仕事をしているのか等、現場からの声を交えながら、多様な博物館との関わり方を探った。

- ・日時：2012年1月26日（木）12:45～14:15
- ・会場：静岡大学共通教育B棟401教室
- ・プログラム：
 - ①「文化財保護行政の現場から」報告：小泉祐紀（静岡市文化財課主査）
 - ②「大学で学んだこと、博物館で学んだこと」報告：鈴木千晶（浜松市楽器博物館学芸グループ職員）
- ・コーディネーター：金子 淳（静岡大学生涯学習教育研究センター准教授）
- ・参加費：無料
- ・対象：学芸員取得希望学生および関心のある学生、一般市民、博物館関係者、学芸員課程関係教職員
- ・参加者数：95人

③公開セミナー「学ぶって楽しい！～大学で学ぼう～」

知的障害のある人が、学校卒業後も生涯学習の機会を持ち、より豊かな人生を送ることができるようになることを目的に実施した。前期と後期の2回、それぞれ別の内容で実施した。

[前期]（通算12回）

- ・日時：2011年6月19日（日）9:15～12:15
- ・プログラム：
 - ①「アイスブレイク～学びのなかま～」講師：大畑智里（静岡大学教育学部附属特別支援学校教諭）
 - ②「体力向上のポイント」講師：伊藤 宏（静岡大学教育学部保健体育講座教授）
 - ③「最新家電事情～家電の使い方、選び方で省エネ」講師：西谷貴史（㈱コジマCSR推進室）
- ・参加費：無料
- ・会場：静岡大学教育学部G棟104教室
- ・参加者数：125人（うち学生26人、教職員その他41人）

[後期]（通算13回）

- ・日時：2011年10月16日（日）9:30～12:00
- ・プログラム：フィールドワーク「登呂ムラ歴史探訪～弥生人の生活を追え！～」講師：長谷川秀厚（静岡市登呂博物館主幹）・菊田宗（静岡市生活文化局文化スポーツ部文化財課主査）
- ・参加費：150円（入館料）
- ・参加者数：116人（うち学生31人、教職員その他35人）
- ・会場：静岡市登呂博物館

[共通事項]

- ・参加者：静岡県の知的障害養護学校等卒業の社会人（18歳以上）、県立特別支援学校等の教員、青年学級等の関係者・保護者、静岡大学教育学部特別支援教育（障害児教育）専攻の学生、静岡県知的障害者就労研究会会員など
- ・企画：静岡県知的障害者就労研究会

4 共催事業

①生涯学習指導者研修事業「地域の課題と公民館」

静岡県内の公民館活動などを通して、生涯学習事業を展開している生涯学習指導者への教育研究情報の提供と大学とのネットワークづくりを進めるとともに、指導者の資質の向上をはかることを目的に、静岡県公民館連絡協議会との連携事業として実施した。

公民館を取り巻く環境は近年大きく変化し、社会教育・生涯学習の場として、また地域づくりの拠点と

して、これまで以上に地域の住民・機関・団体との連携・協働が求められている。人材育成、地域づくり、防災など、地域全体の総合的な取り組みが必要な課題と向き合い、住民・諸機関・団体相互の連携・学び合いの中で、課題解決を図る様々な事例に学び、これからの公民館の姿について考えた。

- ・日時：2012年2月8日（水）10:00～16:00
- ・会場：静岡市興津生涯学習交流館
- ・プログラム：
 - ①基調講演「地域ぐるみ活動と公民館～新しい公共の実践活動は公民館から～」講師：古市勝也（九州共立大学教授）
 - ②事例報告
 - ・「公民館で取り組む地域づくり」報告者：太田京平（袋井市立浅羽西公民館長）
 - ・「浜松市立和地公民館活動」報告者：木下道弘（浜松市立和地公民館長）
 - ③特別講演「震災復興と地域コミュニティ～東日本大震災・津波被災地の現状と課題～」講師：広田純一（岩手大学教授）
 - ④研究発表
 - ・「生涯学習の実態と意識～静大生対象のアンケート調査から～」報告者：静岡大学教育学部学生
 - ・「災害弱者・障害者のための防災対策～生涯学習の視点から～」報告者：常葉学園大学教育学部学生
 - ⑤パネルディスカッション
 - ・パネリスト：事例報告者
 - ・コメンテーター：猿田真嗣（常葉学園大学教育学部教授）
 - ・コーディネーター：菅野文彦（静岡大学教育学部教授）
- ・参加者数：91人
- ・参加費：無料
- ・主催：静岡県公民館連絡協議会、静岡大学生涯学習教育研究センター

②しずだい飛ぶ教室inしずおか未来学園・夢未来塾「科学の楽しさ・化学の面白さ」

「しずだい飛ぶ教室」は、地域への大学開故事業の一つとして、静岡大学関係の教職員が、静岡県内の遠隔市町へ出向き、出前講演等を行うもので、大学の特徴ある教育研究を地域に広げ、大学への関心を高め、地域の生涯学習に資することを目的としている。今回は、静岡聖光学院中・高等学校で静岡青年会議所主催の「しずおか未来学園・夢未来塾」に協力して実施した。

「夢未来塾」は、様々な分野で活躍する地域社会の講師を招き、人生の先輩として仕事に対する喜びや経験・情熱を地域の子も達に伝え、自らの将来を想い描き、目的に向かって努力することの大切さに気付く機会を与えるもので、今回は約800人の小学生が参加した。料理人、大工、サッカー選手など41人の講師のうちの「学者」代表として理学部・坂本先生が4回にわたる講座を担当した。

- ・日時：2011年9月18日（日）9:00～12:15
- ・会場：静岡聖光学院中・高等学校
- ・講師：坂本健吉（静岡大学理学部教授）
- ・参加費：無料
- ・主催：（社）静岡青年会議所、静岡大学生涯学習教育研究センター

5 企画協力事業

①静岡市・大学連携事業 市民大学リレー講座「文明と環境～人類社会が向かうべき未来とは～」

- ・日時：2011年9月10日（土）～10月22日（土）[全5回] 13:30～15:30
- ・会場：アイセル21

・プログラム：

- ①9/10（土）「科学文明、資本主義、そして環境問題」講師：飯山昌弘（静岡英和学院大学教授）
- ②9/24（土）「モンゴルの遊牧文明と環境」講師：楊海英（静岡大学人文学部教授）
- ③10/8（火）「海と気候変動」講師：植原量行（東海大学准教授）
- ④10/15（土）「遺伝子組み換えと環境」講師：内藤博敬（静岡県立大学助教）
- ⑤10/22（土）「エネルギー環境問題を考える」講師：長洲南海男（常葉学園大学教授）

・参加費：無料

・主催：静岡英和学院大学、静岡県立大学、静岡大学、東海大学、常葉学園大学、静岡市

・企画協力：静岡大学生涯学習教育研究センター

②吉田町特別講座「震災に備える、震災後を生きる」

・日時：2011年12月8日～2012年1月26日までの毎週木曜日 [全6回] 19:30～21:00

・会場：吉田町中央公民館

・プログラム：

- ①12/8 「東日本大震災と想定東海地震・連動地震」講師：里村幹夫（静岡大学理学部教授）
- ②12/15 「東海地震について考えるための防災ゲーム」講師：前田恭伸（静岡大学工学部准教授）
- ③12/22 「正しく測って適切に怖がろう～もしも、の時だけではない放射線計測～」講師：青木 徹（静岡大学電子工学研究所准教授）
- ④1/12 「環境・エネルギー問題を考える～本当のエコライフって何だろう？～」講師：松田 智（静岡大学工学部准教授）
- ⑤1/19 「東日本大震災と地域再生～静岡「原発」の地から～」講師：山本義彦（静岡大学名誉教授）
- ⑥1/26 「市民協働による地域再生～絆づくりの視点から～」講師：日詰一幸（静岡大学人文学部教授）

・参加費：3,000円

・主催：吉田町教育委員会

・企画協力：静岡大学生涯学習教育研究センター

③地域連携応援プロジェクト成果報告会

静岡大学の地域連携活動を推奨・支援するために、2011年5月に静岡大学「地域連携応援プロジェクト」を募集・採択し、これらプロジェクトの成果報告会を開催した。学生たちからは、他の学生の活動を知る良い機会だったという意見が多く聞かれた。

・日時：2012年1月26日（木）17:30～20:00

・会場：[静岡会場] 静岡大学静岡キャンパス共通教育A棟301教室

[浜松会場] 静岡大学浜松キャンパス総合研究棟10階会議室

※遠隔テレビシステムで2会場を結んで実施。

・プログラム：

- ①「地域防災への想い～東日本大震災復興支援ボランティア活動を介して～」プロジェクト代表者：丑丸敬史（静岡大学理学部教授）、報告者：芝田隼人（静岡大学理学部3年）、中矢 秀（静岡大学理学部3年）
- ②「静岡大学と清水エスパルスとの包括連携協定の提案」プロジェクト代表者：水谷洋一（静岡大学人文学部准教授）、報告者：高橋 聡（静岡大学人文学部3年）、園田篤志（静岡大学人文学部3年）、牧野憲人（静岡大学人文学部3年）
- ③「Let's 能～（財）静岡県文化財団「平成23年度伝統芸能普及プログラム」との連携～」プロジェクト代表者：小西潤子（静岡大学教育学部教授）、報告者：小嶋 遼（静岡大学教育学部4年）、山崎

綾（静岡大学教育学部4年）、横関美咲（静岡大学教育学部4年）

④「防災道徳」教育の教材開発と授業実施」プロジェクト代表者：藤井基貴（静岡大学教育学部准教授）、報告者：藤井基貴（静岡大学教育学部准教授）、上地香杜（静岡大学教育学部3年）、三尾佳央奈（教育学部3年）

⑤「多文化共生」をテーマとした絵本読み聞かせプロジェクト」プロジェクト代表者：矢崎満夫（静岡大学教職大学院准教授）、報告者：矢崎満夫（静岡大学教職大学院准教授）、芝 清美（静岡大学教育学部3年）、林 早紀（NPO法人ONES）

- ・参加者数：64人（静岡会場57人、浜松会場7人）
- ・参加費：無料
- ・主催：静岡大学地域連携協働センター
- ・企画協力：静岡大学生涯学習教育研究センター

4 市民開放授業

静岡大学市民開放授業は、静岡大学の学生が受講している正規の科目の一部を一般市民の方に開放し、正規学生と一緒に受講できるようにしたもので、2005年度から実施している。受講者数、開講科目数等のデータは以下の表のとおりである。

①受講者数

年度	受講者数	平均年齢
2005年度	106	58.2
2006年度	154	59.9
2007年度	137	62.0
2008年度	166	61.7
2009年度	203	60.8
2010年度	217	62.3
2011年度	274	63.2

②開放科目数

年度	共通	人文	教育	理	農	工	情報	法科	計
2005年度	116	89	14	12	7	6	10		254
2006年度	127	87	21	118	13	7	10		383
2007年度	128	114	21	77	7	9	10		366
2008年度	143	85	17	93	88	7	0	1	434
2009年度	96	106	21	103	85	4	12		427
2010年度	144	114	19	112	83	10	11		493
2011年度	151	98	18	109	82	9	12		479

③受講科目数

	共通	人文	教育	理	農	工	情報	法科	計
2005年度	56	33	5	0	2	0	0		96
2006年度	63	47	7	9	2	1	3		132
2007年度	48	46	5	11	5	0	1		116
2008年度	50	58	5	13	14	0	0	1	141
2009年度	50	61	3	26	23	2	4		169
2010年度	57	63	4	33	21	4	7		189
2011年度	62	64	3	24	26	3	2		184

④受講者状況

□居住地地別受講者数

居住地	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
神奈川県足柄郡	0	0	0	2	2	2	1
伊豆の国市	0	0	0	1	1	0	1
伊東市	0	0	0	1	1	2	0
熱海市	0	0	0	0	0	0	1
沼津市	2	2	3	3	1	1	3
富士市	0	1	0	0	2	7	12
富士宮市	1	3	2	2	2	3	0
三島市	2	2	0	2	3	2	2

居住地	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
御殿場市	1	2	1	0	0	1	0
志太郡	3	3	2	1	0	0	0
菊川市	1	0	0	0	0	0	0
掛川市	1	1	2	1	2	0	1
静岡市	75	99	101	130	141	129	161
藤枝市	4	11	12	12	12	14	24
焼津市	4	3	0	0	8	13	12
磐田市	0	4	0	3	0	2	1
御前崎市	0	0	0	0	5	4	4
引佐郡	1	0	0	0	0	0	0
湖西市	0	3	2	2	2	2	2
島田市	4	4	2	2	0	0	5
榛原郡	2	2	0	0	0	3	5
浜松市	4	13	9	4	20	27	32
袋井市	0	0	0	0	1	1	4
牧之原市	0	1	1	0	0	2	2
周智郡	0	0	0	0	0	1	1
豊橋市	1	0	0	0	0	0	0
愛知県春日井市	0	0	0	0	0	1	0
計	106	154	137	166	203	217	274

□年齢別受講者数

年齢	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
～19	0	0	0	0	0	0	1
20～24	1	4	1	3	1	1	2
25～29	4	5	2	1	6	0	1
30～34	4	4	1	2	7	5	4
35～39	2	0	5	6	3	6	1
40～44	7	6	5	2	8	9	2
45～49	6	11	7	7	9	12	18
50～54	8	6	6	13	10	10	13
55～59	13	23	10	12	17	17	21
60～64	33	39	30	40	54	57	79
65～69	16	33	37	42	42	45	61
70～74	9	15	20	24	28	33	46
75～79	2	6	11	9	13	14	18
80～84	1	2	2	2	4	5	4
85～89	0	0	0	0	1	3	3
計	106	154	137	163※	203	217	274

※3名年齢未記入

□一人当たりの受講科目数

受講科目数	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
1科目	51	92	77	89	123	129	168
2科目	34	34	44	45	47	42	69
3科目	10	21	12	22	18	28	23
4科目	6	4	2	3	9	14	11
5科目	3	2	0	4	3	1	3
6科目	2	0	2	1	1	1	0
7科目	0	0	0	0	1	2	0
8科目	0	1	0	2	1	0	0
計	106	154	137	166	203	217	274

研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』編集規程

1. 目的

この規程は、静岡大学イノベーション社会連携推進機構地域連携生涯学習部門（以下「部門」という。）の研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』（以下「紀要」という。）の編集に関する必要な事項を定めたものである。

2. 内容

- (1) 紀要は、生涯学習・社会教育及びその関連分野についての理論的・実証的研究に関わる未発表の学術論文等を掲載するものとする。
- (2) 論文等の投稿については、別に定める投稿規程によるものとする。

3. 発行

紀要は、原則として年1回発行する。

4. 編集委員会

- (1) 紀要の発行に際して必要となる企画・編集及び投稿原稿の募集・受理を行うため、部門内に編集委員会を設置する。
- (2) 編集委員会は、部門教員をもって構成する。
- (3) 編集委員会に委員長をおき、委員長は部門長をもって充てる。

5. 審査・編集

- (1) 紀要に論文等の掲載を希望する者は、編集委員会に送付するものとする。
- (2) 投稿された論文等の審査は、編集委員会が委嘱する査読者2名の審査に基づき、編集委員会で次のいずれかに決定する。
A. 採録 B. 照会 C. 不再録
- (3) 校正は執筆者が行い、原則として再校までとする。

6. 公開

紀要に掲載された論文は原則として電子化し、SURE（静岡大学学術リポジトリ）に登録し、インターネットを通じて公開する。

1998年9月22日施行
2012年12月18日改訂

研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』投稿規程

1. 目的

この規程は、静岡大学イノベーション社会連携推進機構地域連携生涯学習部門（以下「部門」という。）の研究紀要『静岡大学生涯学習教育研究』（以下「紀要」という。）の投稿に関する必要な事項を定めたものである。

2. 投稿内容

紀要は、生涯学習・社会教育及びその関連分野についての理論的・実証的研究に関わる未発表の学術論文等を掲載するものとする。

3. 投稿資格

投稿資格者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

- ①本学の教職員
- ②本学の非常勤講師、客員教員、元教員
- ③部門長が特に許可した者

4. 原稿の区分

投稿者は、次の区分のうちのいずれかを判断して投稿するものとする。

- ①論文
- ②研究ノート
- ③その他（実践報告・書評・資料ほか）

5. 提出方法

- (1) 投稿原稿は、編集委員会に提出するものとし、投稿原稿は返却しない。
- (2) 投稿原稿には、欧文タイトル名を添付すること。
- (2) 投稿原稿提出期限は編集委員会が別に定める。

6. 公開

投稿者は、紀要に掲載された論文をSURE（静岡大学学術リポジトリ）に登録し、インターネットを通じて公開することを承諾したものとする。

1998年9月22日施行

2012年12月18日改訂

静岡大学
生涯学習教育研究 第15号

発行日—2013年3月26日

編集・発行—静岡大学社会連携推進機構 イノベーション 地域連携生涯学習部門

〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817

印刷—株式会社三創

Bulletin of The Center for Education and Research of Lifelong Learning

Shizuoka University

No.15

CONTENTS

Articles

- The Exhibition of “Dreams of Nuclear Power”
: “Nuclear Communication” in the Hamaoka Nuclear Exhibition Center and its Representation
..... KANEKO, Atsushi 3
- A Result and a Problem of the Shizuoka University Regional Alliances Program
“The Writing Brush Can Be Crowded for Thought and a Wish” SUGISAKI, Satoko 17

Report

- Symposium : Learning Network and Lifelong Learning (part14) 27
- Symposium : Museum Forum : The Museum Activities and Curator Qualification 43

Division of Regional Collaboration and Lifelong Learning
Shizuoka University
Shizuoka, Japan

2013